

(表紙)

後 編 舊 記 雜 錄 卷 三	忠 良 公			
	貴 久 公	自 永 祿 五 年		
	義 久 公	至 同 九 年		
	義 弘 公			

「國史」卷十 梅岳君 大中公  
實明公 松齡公

五年壬戌春、松齡公還鹿兒島、按松齡公舊譜、似云永祿四年軍記云永祿三年如鉄肥、比及三年而還、則還鹿兒島在此年矣、既而伊東義祐與肝付兼續合兵、復擊島津忠親、忠親不能禦、奔櫛間、義祐取鉄肥、兼續

取志布志、據島津内膳家譜、島津内膳家譜云、二月十八日、忠親奔櫛間、以志布志授肝付兼續、大中公舊譜云、五月十八日、忠親奔櫛間、東光坊家藏伊東家略記云、正月二十二日、取鉄肥、未知孰是、而其事互足相證、因並錄之、初眞幸院領主

北原貴兼生又五郎寬兼、又七郎兼門、民部少輔兼珍、寬兼、兼門皆先死、兼門有子、曰中務少輔茂兼、貴兼死、茂兼承重、叔父兼珍倔強、自立爲後領眞幸、傳二世至又八郎兼守、

據北原三左衛門系圖、吉田・馬關田・加久藤・飯野・小林凡五郎號稱眞幸院見前、北原貴兼生八男、此書三人

五人則略、兼珍生久兼、久兼生祐兼、兼守娶於伊東義祐之女、無祐兼生兼守、祐兼見上卷天文十一年、子兼守死、家臣謀立宗人民部少輔、義祐聞之、乃取其女、嫁馬關田右衛門佐、北原氏、使右衛門佐居三山、即小、殺民

部少輔、取眞幸院及栗野、横川、高原、竹崎地頭白坂下總介、踊城主白坂佐渡介、二人皆北、避難自歸公室、北原又太

郎兼親出奔球麻依相良氏、據大中公、松齡公舊譜、島津支流系圖、兼守娶於伊東義祐之嫡、今從玄佐自記、改撰諸家系譜、北原三左衛門系圖兼守死在此年、東光坊家藏伊東家略記、此年正月取眞幸、二月取高原、高崎、壹岐彌四郎家藏文書、此年正月北原氏亂、參而親之、則

北原氏取眞幸、在此年正月之間明矣、故置諸期、高崎即竹崎、踊城遺城在踊郷地頭館西南十八町計、係泉窪田村、兼親、茂兼之孫也、據北原系圖、三左、夏四月二十九日、實明公與頼娃山城入道盟、據實明、五月、梅岳

君又與頼娃山城入道盟、據梅岳、公賜北郷時久末吉三百五十町、賞禦伊東氏之功也、據島津支、流系圖、樺山幸久與白坂氏

謀、欲以兼親爲北原氏後、請於公許之、乃使白坂與一左衛門尉告兼親、且乞兵於相良氏、相良氏許之、與與一

左衛門尉共、襲馬關田城拔之、德滿城主北原八郎右衛門尉等皆應兼親、十日、兼親入飯野城、於是眞幸復爲北原

氏邑、唯三山以東未下、又宮路某據栗野、北原伊勢介據

横川、皆應伊東氏、公屯溝邊、遣伊集院忠朗、樺山幸久、招降伊勢介、伊勢介不肯、六月三日、遣松齡公又

六郎歲久、攻横川城、新納忠元、伊集院源介久春爲後繼、

歲久門焉、城中兵潰、殺伊勢介及其子新介遂拔橫川、而栗野降於白坂下總介、樺山幸久勸兼親獻諸公、兼親從之、

據大中公、松齡公舊譜、松齡公軍記、島津支流系圖樺山氏譜、樺山文佐自記、北原兼親入飯野城、舊譜、軍記等皆無月日、今言五月十日、據壹岐彌四郎家藏文書、舊譜、軍記等皆云、兼親避伊東氏之難、奔球麻、獨北原三左衛門系圖則云、長享元年北原氏亂、茂兼奔球麻、永祿中、太守石茂兼孫兼親、於球麻、立為北原氏後、與此不同、壹岐彌四郎家藏文書、北原民部少輔、白坂下總守等、族人叛之、殺民部少輔於飯野城、下總守奔、北原氏亂、求援於伊東氏、伊東氏遂取真幸、又與舊譜、係記等異、馬關田鄉有古城墟三所、飯野城遺墟在飯野鄉地頭館北六町餘、係記等異、橫川城遺墟在橫川鄉地頭館西南十三町餘、係中之村、伊勢介、北原氏之支庶、

據島津支流系圖、原書今給黎久後第三子曰長門守久綱、久見第九卷應永二十四年、十六日、貫明公賜喜入季久書、賞

橫川之戰功也、據島津支

忠節、與肝付兼盛、北原兼親及相良氏國老深水右馬助賴金

法名、東彈正忠長兄、北鄉氏室老北鄉紀伊守忠德盟、據島津支

鄉氏譜、原書忠德、久紹之子也、北鄉久紹見上卷天文十一年注、

二十六日、公與樺山幸久盟曰、寡人嘉乃父子忠貞、近日雖有浮言庸何傷乎、自今以後或有讒間、亦當面質、有渝斯言諸神殛之、

據樺山權左衛門家藏文書、

六月四日、公遣相良氏書曰、北原又太郎復歸舊邑、繫君之力、

據大中公舊譜、

秋九月十七日、島津忠親夜襲、既肥本城取之、明日酒谷諸城皆下、

據大中公舊譜、

初大川平越前守隆屋世居大川平城、為北原氏黨、及北原氏有難、隆屋降

松齡公、隆屋生左近將監隆充、隆充先死、是歲隆屋死、

隆充子九郎隆次嗣、隆次尚幼、伊東義祐問之、攻大川平城、不克而去、松齡公聞之、嘉其固守、賜隆次鍋、灰塚、榎田三所、又築一城、與大川平城隔岸相對、名曰今

城、使隆次居之、為置戍兵三百人、據松齡公舊譜、北原氏有難、取真幸事、大河平休兵衛系圖、大河平氏出自菊池氏、有五郎隆俊者、始為八代氏、傳十二世至越前守隆屋、改為大河平氏、隆屋生左近將監隆充、隆充二子長曰仲太左衛門隆利、少曰九郎隆次、隆利無子、以隆次為嗣、隆利居大河平城、伊東義祐攻之、不克、松齡公嘉其善守、賜之鍋、

灰塚、榎田、又築今城、使隆利居之、舊譜止稱大河平越前將監九郎、又越前死無年、今書三人之名、且云越前是歲死、皆據大河平休兵衛系圖、

以善守大河平城、為隆利事與舊譜異、未知孰是、郡村高辻帳、加久藤鄉有灰塚村、榎田村、永山村有鍋門、今改谷川門、今城遺墟在飯野鄉地頭館東北一里有餘、係大河平村、今城東南有大河平城遺墟、相去里餘、

「正文在蒲生新十郎」「義弘公御譜中ニ在リ」

態捧一書候、仍眞幸堺就雜説而被續之由、從老中被申渡候間、則其致支度候之處、大夫殿様より以御使、自心續候事ハ無御分別之由、蒙仰候、更於此方難致分別之間、

使者進上仕候、細碎御返札得其心度候、此趣宜預可御披

露候、<sup>「マ、」</sup>恐惶謹言、

<sup>「朱カキ」</sup>「永祿五年」二月廿五日

忠平(花押)

「上書」  
蒲生美作守殿

「右ノ裏」

忠平

兵庫頭

「日向記」

一豊州家降睦之夏、肝付方ニ聞ユルハ、飢肥ノ夏伊東家

ヨリ知行由申渡ス間、肝付ヨリハ志布志ヲ受取ヘキ由

使ヲ立タリケリ、豊州方ヨリ志布志ハ肝付ノ矢サキナ

レトモ、伊東方ニ渡シ可申旨有間、翌五年壬戌二月、

義祐公木脇八郎左衛門尉ヲ志布志ニ被差越、同廿二日

ニ志布志ヲ請取、肝付ニ相渡歸宅也、其時義祐思召ケ

ルハ、豊州家ヨリカヤウニ懇切有上ハ、豊州ノ家ヲ櫛

間ニ残スヘシト被仰出、日置周防介・柏原宮内少輔ハ

豊州家ノ談合衆ナレハ、是ニハ南郷三百町ヲ被下、依

之、同五月十八日、飢肥悉ク伊東方ハ相渡ス、忠親櫛

間ノ如ク退レケル、夫ヨリ彼堺泰平ニコソ治リケレ、

197 一壬戌 永祿五年、此年三月四日ヨリ、於福昌寺爲國家

太平有一萬部法華經、燒香代賢、檀那貴久、五月十八

日飢肥之夏、悉ク伊東ニ渡、忠親櫛間エ退、同九月十

八夜、豊後守内ノ者共、心ヲ合切返入部、同六月三日、

貴久以發足横川切落、北原新介伊勢ヲ始メ、人衆多々

打死、此年、義久栗野ニテ越年、

『庄内平治記』

一永祿五年二月十日に、伊東カ勢本城を攻落す、城中の

勢共力盡て酒谷の城ニ退処ニ、伊東氏費ニ乘て、又酒

谷をも攻落す、豊州の軍は日ノ夜ノ戦に汗馬の

勞を顧す、筋力を盡といへとも、終ニ勢力衰て、先一

旦の計ニ飢肥南郷を伊東ニ付、志布志を肝付ニ去渡し

て、福島一処ニ曳籠、加無念類ハなかりけり、豊州の

一族家臣遺恨胸宇に溢れけれハ、今度忠親を飢肥の城

主となし、會稽の恥を雪かんと、忍ノ勢を驅ル、

三月朔日、尾辻佐左衛門尉或源八ともあり、初名欽、島津尚久家臣にて殉死

同年九月十七日夜半計の事なるニ、忠親入道泰心并福島  
島の城を打立て、飢肥の城ニ押寄る、日置・柏原等打隨  
ふ、夜半ニ飢肥ニ忍入、案内ハ暗からず、安くと攻  
落し、百人餘り打取ぬ、打残されたる者共ハ山ニ入り、  
峯を越て散くニ逃去ける、翌レハ九月十八日、又酒  
谷を攻落して、敵を切事九十三人、即時ニ城を乗取て  
凱歌を咄と擧、再び飢肥の領主と也、前日の遺憾を拂  
ける、此年六月十二日、太守公の命ニ曰、山東の伊東  
と庄内の北郷家と敵對して支る事三十年ニ及べり、其  
軍算計かたし、その賞として末吉三百五拾町を北郷左  
衛門尉時久ニ賜りける、末吉ハ豊州代々の領地たりと  
いへとも、過し永祿三年の比、豊後守忠親飢肥之後援  
を頼奉り、太守ニ獻せられしを、今時久ニ賜りけれハ、  
土持攝津介與綱を地頭として、彼処ニ住せしむ、後ニ  
長男忠虎を移して末吉を守らしむ、また梅北八十町ハ  
飢肥の軍務を賞せられ、忠親ニ賜り領地せられたりけ  
れ共、此も時久ニ付屬して、飢肥の後攻を頼まれける、

六月三日、貴島圖書助北原氏ハ横川城を攻らるに從て死之、此時欽歿考、新納越後守横川於  
十六日、釘崎丹後北郷氏の臣にて肝付勢と、岩川に戦ひ、拾餘人死之、  
此年、嶽木場筑後大河平隆利の臣にて、島主狗留山に詣るを魏て、伊東義祐來攻を拒き、何れも力戦して死  
之、渡邊三兵衛・濟藤右衛門兵衛・竹下次郎兵衛・川  
野千右衛門・内山爲左衛門・八重尾岩介・黒江三郎右  
衛門・谷口主税・吉牟田良右衛門、

「瀬戸口伊豆入道覚書」

「永祿五年ナルベシ」七年トアリ誤也

一ころハ弘治七年壬戌三月十八日なり、されハ志布志を  
肝付ニさり、おひ南郷を伊東ニ渡し、福島一所に籠り  
無念たぐひはなかりけり、曆々寄合給ひて、今一度豊  
州を歸國させ申さんと、しのひくにくわたちて、同  
九月十七夜の夜半計にハ、おびの城へしのひ入、安と  
と切落し、又爰にて伊東衆を百人余りそ打ニけり、相  
残る者共山ニ入、嶽を越、打物を捨てにくれば、本の  
古郷江おつかへず、さて其うちニもしらますして、又  
こそ切て出にける、かくのことくニせしか共、おびの  
人衆ハとうてんなく、何ほとそと思ひてさしこたへけ  
る云々、

201 「實久公御譜中」

永祿五年壬戌、讀誦法華經一萬部於福昌寺、開關於三月四日、是又爲國家安全士民快樂也、代賢和尚奉修之矣、

202 「全御譜中」

「正文在伊集院來本田吉藏」

坪付

薩摩國伊集院之内御稻荷へ御寄進修理田

野田名

上原加藤先

一段

大谷

永祿五年壬戌三月吉日

(伊集院)

忠倉

(村田)

經定

(肝付)

兼盛

(河上)

久朗

203 「左兵衛尉尚久譜中」

永祿五年壬戌三月一日逝去、年三十二也、法名疊秀、號一枝、陽廣山疊秀寺殿、家臣尾辻源八追跡殉死矣、

尚久

「女子

太守義久主前室、母尚久一腹、

204 謹言上、

抑永祿辛酉孟春十六日尊翰同仲秋十四日令頂戴候、誠不堪歡拵之至乎、仍金鐘寺之事、就御門役斷絶之儀、兩度預御書候条、不及吳儀、雖替役彼寺職、以奉歸付舊門派候、猶細々自福昌寺可被宣候間、令省候、恐惶謹言、

三月十六日

修理大夫貴久御判

總持寺

尊答衣鉢閣下

205 金鐘寺之事、建立新地、必當秋中移、改彼寺職、以可歸

付舊門派之段、不可及吳儀之證文如此候、恐惶謹言、

永祿五壬戌三月十六日

伊集院大和守

忠倉(花押)

村田越前守

經定(花押)

肝付彈正忠

兼盛(花押)

河上左近將監

久朗(花押)

保福寺  
貴足下

本寺  
闍首座

206

「日新公御譜中」

「正文在顯娃右京」

〔牛王〕

起請文

一 預示之 神判三ヶ條入魂令納得之事、

一如承、從他方雖構中妨之謀、不可信用之事、

一 自然其方与此方、強而可及雜說之時者、無御等閑尋可

申候、可承之事、

右条々於令相違者、

奉始梵天帝釋四大天王、日本國中大小神祇、殊者當國惣

社開門正一位 新田八幡大菩薩 金峯山藏王權現 増山

八幡大菩薩 野馬御嶽 天滿天神部類眷屬等神爵冥爵、

各可蒙寵也、仍起請文如件、

永祿五年 戊戌五月吉日

日新(花押)

顯娃山城入道殿

回章

207

「川上武藏守經久 衛門尉 譜中」

「正文當家有之」

起請文之事

御當家乘馬之儀、可致相傳覺悟候、無腹藏可有談合事所  
希候、當者永々聊尔之他言申間敷事、

右之趣於令違犯者、

上者梵天帝釈四大天王、惣日本國中六十余州大小神祇、

別者新田八幡大菩薩 當所之諏訪上下大明神 若宮稻荷

五社大明神部類眷屬御爵可蒙身上罷者也、仍起請文如件、

藤原朝臣忠平(花押)

河守十郎左衛門尉殿

參

永祿五年 壬戌五月吉日

208

「義久公御譜中」

「正文在顯娃右京」

〔牛王〕

起請文

一 就今度雜說、聊無疎略之由、尤同前之事、

一 從敵方爲何雖廻計略、同心有間敷由、深肝神妙候事、

一 世上何様雖成候、奉公可爲一味由、太以肝要候、同對

其方略儀有間敷事、

右之三ヶ条互相違候之者、

梵天帝釈四大天王、惣者日本六十余州大小神祇、殊者當國惣社開門正一位 新田八幡大菩薩 大隅正八幡大菩薩、別者當所鎮守諏訪兩大明神 天滿大自在天神部類眷屬神 爵冥爵可蒙者也、仍起請文如件、

永祿五年<sup>壬戌</sup>卯月廿九日

義久(花押)

穎娃山城入道殿

209 「北郷時久譜中」

永祿五年壬戌五月、太守公有命曰、伊東與北郷爲對敵、相支者凡三十ヶ年、其間軍勞無如北郷氏者、爲其賞賜未吉三百五十町於時久、依之爲地頭移土持攝津助、其後令忠虎移住于末吉也、梅北忠親雖領知、爲飢肥後援附與于時久者也、

210 「貴久公御譜中」

永祿五年六月三日、欲誅伐横川城主北原伊勢介・同新介、遣二男忠平・三男又六郎歳久爲將率多勢向其地、貴久亦欲增其勢、屯于隅州溝邊、於茲乎、使新納刑部大輔忠元

・伊集院源介久春追到其地矣、已忠平指揮、乘勢之際、

伊勢介・同新介奮出、本田刑部少輔・瀧聞美作守會彼父子挑戰、忠元・久春臨其戰場、有大功勞、歳久率吉田之騎歩、攻入城門、奮威相鬪之際被傷者也、伊勢介父子力倦失利、竟自殺矣、以城亦次陷、則斬獲敵首數百、我軍中亦戰死者不少也、入彼地於手裏、則許菱刈氏矣、

211 永祿五年六月三日、横川城<sup>北原伊勢介・同新介父子守</sup> 攻ニ防戰、分取

高名す、

吉田<sup>任人</sup> 二階堂帶刀 箕倉舍人佐

村田雅樂助 瀧聞美作守

本田刑部丞 濱田民部左衛門敵七人切捨

212 「樺山玄佐日記」

一去程に北原兼守早世す、眞幸院叨院内之者ハ北原民部少輔と云を用所に、兼守妻ハ伊東入道之娘なれハ、以其便伊東眞幸を可領企、伊東娘を馬関田右衛門佐と云者に合せ、民部少輔を打殺、彼娘三之山に居而、竹崎・高原之人鉢白坂下總介と云者を呼付、是をも可殺巧、彼者ハ用心して俄歸り、兼日玄佐へ云合事有而、樺山

領地おくほへ落來、其折節義久様曾於郡江御座候間、召出在御覽、伊東入道は高原を在陣とす、踊白坂佐渡介ハ邊川故にや、至向後守護御奉公之由、玄佐迄云定、雖然、白坂助左衛門尉高原へ伊東入道に指出、無心本之處ニ、即時出し、是も佐渡介同前之由也、伊東は栗野横川迄領す、然處ニ、白坂下總介助左衛門尉と云合、踊守護御番衆を申受、此初曾於郡へ、貴久様御光儀也、玄佐様ニ令調法、北原又太郎ハ民部少輔衆を求摩へ退、去程に白坂佐渡介嫡男與一左衛門尉これも高原へ指出候へ共、則踊へ落來、是も又太郎兼親と云けるに、可遣企子細ハ兼親を可成北原に、白坂一家之者共ハ北原手なれハ、彼家を可取立之由を云合、與一左衛門尉求摩へ遣、二人ハいかゝと云に、本田民部左衛門尉曾於郡衆中なるを可添内談也、其比地頭三原遠江守殿へ云、貴久様聞召、玄佐分別次第と承、彼兩人敵地横川之凌山路、菱刈を通り求摩へ着、「永禄五年五月上旬ノコトナラシ」意趣ハ眞幸ハ逆乱以之外なり、兼親可成北原、別而相良殿を頼へし、從踊口此方儀可令馳走云遣、此由相良殿も兼親へも申合、先兩人歸押返シ、與一左衛門尉の弟左近允を相添遣、此度求摩衆同心ニ而與一左衛門尉を相留候處に、兼親

人添遣、左近允は歸、近日從求摩可仕入之由なれハ、相待候處に、馬関田を求摩衆同前に與一左衛門尉忍取、徳滿之地頭北原八郎左衛門尉兼親へ同前、されハ眞幸皆々又太郎を押立、「永禄五年五月十日ノコトカ」飯野へ打入、則白坂下總介を遣、又太郎ハ八郎左衛門尉以相談、守護方へ御奉公專一之由云合、飯野へハ御屋形衆・相良衆寄合爲番、兼親北原殿、横川は北原伊勢伊東を引、栗野之宮路名字伊勢同心成しを、白坂下總介押入、栗野地頭と成、扱貴久様從曾於郡溝邊へ在御發足、「五月廿八日忠平公栗野ヲ發玉ヲト有リ」横川江出頭之由、伊集院和州玄佐雖云遣、不承引、扱はとて御衆遣有、「六月三日」其日中ニ被召取、伊勢入道討死す、扱後々迄の御談合ニ而横川を菱刈江給、菱刈堅固之於御奉公、伊東を可致菱刈、「本マ、」致二心を菱刈をとの御同心ニ而御神判を被取替、栗野へハ義久様御發足、玄佐も致御供、其比白坂佐渡も栗野へ移、玄佐佐渡へ内談して下總介へ云様、北原殿は栗野を守護へ被進上、以其力飯野堅固之覚悟可然、其故ハ、相良當日ハ北原殿を引立かほなれと、向後者眞幸を可望、定而伊東江同心可有、至其時北原殿も相良武略故、身上可危、下總介・與一左衛門尉など伊東へ指出成間敷者共也、我々のために可思案といへ者、下



『箕輪伊賀日記』

總介以得心、飯野へ行、則北原八郎左衛門尉・本村石見守栗野へ致參上、此事を申上、兼親も次之日參上ニ而、栗野を進上なり、飯野有つる求摩來も引歸、飯野麓も破ければ、屋形衆兼親爲合力、城堅固之番也云々、

一サレハ、又一揆ノ黨モ未タ多ケレバ、國中不靜、早々不退治アルヘカラス、爰ニ眞幸院北原ノ兼隆侵病死去ス、彼家中ノ者トモ、一向宗ト云惡宗ニ成リ、佛神三寶ヲモ違背シテ無道トモヲ取行ヘリ、北原カ家來ニ又是ヲ不用者モアリ、不用者ヲ打果セシ程ニ、或ハ日向ヘ落行者モアリ、求摩ヘ事ル者モアリ、方々ヘ逃ケ散シテ誹リノ、シル者ノミアリ、伊東入道聞之、彼北原ガ地ニ望ヲカケル、或ハ相良モ隣所ナリ、無主宰トナレハ望ヲソカケル、然ルニ北原カ家來ニ踊ノ地頭白坂美濃守、北原ノ躰危キ家ト見ユレハ、得此刻、太守方ニ申入り忠人ト成ルヘシトヲモヒ、曾於郡地頭三原遠江守へ蜜々ニ註進ス、遠江守境目役ト云、少モ遅々スベカラストテ、踊ノ城へ番手ヲソ差籠メラル、仍テ白坂カ一黨同心トソ聞ヘタリ、貴久兵庫頭ニ仰ケルハ、

早速彼地ニ發向シテ退治セラルヘシ、去トモ三ノ山ヨリ東ハ伊東ニ屬ス、飯野ヨリ西ハ薩摩方ニ順フ、去程ニ忠平一門侍等ニ評議シテ、永祿七年甲子、彼地ニ欲赴ントノ処ニ、北原ガ一門ニ横川ノ城主北原伊勢守・同名新助有逆心ノ間、彼堺ノ往還不自由、仍テ凌霧嶋山、眞幸飯野郷へ打越シ玉フ、馬関田・吉田・吉松・栗野ノ人々ハ、我モくト可抽忠節由申入ラル、番手ヲ請テ御意ニ參リケル、伊勢守謀叛ヲ企、弓矢ノ用意普ク露顯スルニ依テ、同年六月三日ニ横川へ押寄せ、麓ヲ打破リ、城戸口へ詰入り、切岸へ攻上ル、伊勢守・同名新助是ヲ見ルヨリモ、兼日ノ志毛頭輪廻スヘカラシトテ、無斬ヤナ妻子共、何ツ所ノ者ノ手ニカ、ラシヨリ、逆縁ナカラ我々ガ手ニカケテ有ナラハ、可爲(二脱カ)世本願ト手ニ手ヲ取テ差殺シ、或ハ切殺シテ、念佛數邊廻向シテ、賢人二君ニ不仕ヘト高聲ニ呼テ、柴屋ノ口へ切テ出、郎等トモモ不劣ト續テ切テ出レハ、思々ニ渡合ヒ、散々ニ切合タリ、鹿兒島ノ住人ニ本田刑部丞・滝聞美作守太刀下ニテ分捕ス、又六郎歳久敵内城ニ支ヘケルヲ、眞先ニ進テ攻入玉ヘハ、吉田ノ住人二階堂帶刀・箕倉舍人佐・村田雅樂助合戰シテ高名セラ

## 『長谷場越前日記』

レケル、貴嶋圖書助打死ス、去トモ多勢攻入りケレハ、伊勢守・新助打死スレハ、即チ城ヲ攻落テ數百人討取り、頸ヲ大將ノ御目ニカケ、勝吐氣ヲ拳ケ、時刻モ過ヌレハ、諸軍皆次第ノ歸陣トソ聞ヘケル、然処ニ菱刈方當時致忠勤ノ間、彼ノ横川ヲ被下、永々可有忠節ノ旨被仰御憑ミ、彼ノ地ヲ恩賞ニソ行ハレケル、

一日州眞幸の住人北原方家中の者共、逆心を相構て一向宗と云へる悪黨類ニ罷成り、佛神三寶を違背して、此宗ニ不成者を打果んとせし程ニ、各是を聞付て日向ニ走る人も有り、求摩ニ落去る者も有り、方々江邊散す、此刻を見及て、北原方の倅者に白坂美濃守とて踊地頭有けるが、宗論故北原方ニ心替りそ仕る、曾於郡の地頭ハ三原遠江守へ注進す、連々入魂之事なれば、境目の役として早速御番衆を被指籠、御奉公を被申、白坂の一黨者皆以同心也、去聞栗野・吉田・馬関田・吉松彼の所々ニ御番兵を申請て、我もくゝと忠貞を被抽、

然處ニ北原方の披官者同名伊勢守・同名新介トテ横河の城を取構へ、奉對 守護方被致弓箭、依其無余儀軍

兵被差向、【五年六月三日ノ軍カ】麓村を取破り、板城戸に攻入りて、切岸に

詰上る、城主北原伊勢守・同名新介是を見て、兼日定めし心ざし、毛頭輪廻すまじとて、賢人二君に不仕と大音上て名乗りつゝ、今を限りの事なれば、あな無慙や妻子共、何處の國の悪黨の手に懸り果んより、逆縁なから我くゝが手に懸て有ならば、二世の本願たるへしと、手に手を取りて差殺し切捨て、念佛を廻向して、茶屋の口に切て出て、寄手の武者に渡り相ひ、手柄を碎きて合戦す、鹿兒島の住人進出たる兵物ハ本田刑部少輔、相ならびて滝聞美作守と名乗て太刀下ニ分捕す、各も疵を蒙り退きぬ、續く兵物指合て、敵余多打留て、即城を攻落し、數百人の討頭を御大將の懸御目、勝吐氣武送も過ぬれば、諸軍兵の喜者申計りもなかりけり、懸りける處ニ 貴久様と 義久様の御定ニ者、菱刈方の當時忠勤を被致、彼の横河を被下て、永々の奉公を御頼有べしと、重々御恩賞を被宛行処也、

## 「義弘公御譜中」

北原又八郎兼守領知日州眞幸院、居住飯野、罹病痾臥床、尊者有日於茲、藥餌針灸無驗、竟卒矣、且復無一子之可

繼續當家者、由是家臣等(一)郡議曰、欲使北原民部少輔爲兼守之後嗣連續當家也、兼守之後家伊東大膳大夫義祐三位入道之姉也、以故三位入道流涎於兼守之領地眞幸院、教兼守後家嫁馬關田右衛門佐居三山城、而戮民部少輔、且復背三位之命者、悉以欲屠殺之、北原又太郎兼親畏其被害、出奔求麻、當此之時、踊之城主白坂佐渡介獻踊地於太守請屬旗下、卽以許諾、入守兵於踊城、而後命樺山安藝守善久入道玄佐、俾佐渡介嫡男與一左衛門尉與曾於郡士本田某、兩輩忍敵路往求麻、催兼親得求麻救兵、入部眞幸者再往、而與一左衛門尉留求麻、本田某歸來委細反命矣、其後與一左衛門尉得求麻之救兵、襲捕馬關田城、爰德滿城主北原八郎右衛門尉屬兼親、由是眞幸一院士卒殆乎歸兼親、故入兼親於飯野、而守護方與相良氏置守兵於飯野、所以警衛也、

大川平氏者祖宗以降北原氏旗下、而飯野之奧主大川平城、蓋由此爲稱號歟、先是北原又太郎兼親爲伊東氏畏被屠殺、出亡屈于求麻、太守哀之、與相良氏俱運籌策、而再入兼親於飯野、然而以寡兵不得伊東氏之禦衆敵、遣守護援兵於飯野警衛無敢怠慢矣、大川平越前請忠平之屬旗下、能慮眞僞而後許之、越前老體不經幾程而死焉、其子將監在

大川平也、大川平將監已死、其子九郎爲孤矣、故遂登山於狗留孫、學文筆之際、伊東氏窺得無主之隙、永祿五年壬戌、率軍衆來攻彼城者急於水火、於茲開城門一同突出、各定必死對敵兵相戰數刻、漸日將晡、因是兩兵互退去矣、此日敵死者五十餘員、城兵戰死者只十人耳、今日雖有勝利敵軍未有退去、再有逼攻、則以寡兵難防禦乎、與徒死亡、不如先委居城、待後日之佳期去焉、告防禦首尾於忠平、忠平感之、先昇加久藤鍋・灰塚・榎田三所者也、其後隔大川平川流新築一壘、稱今城、入九郎於此壘、且加三百人警衛士矣、

## 216 「義弘公御譜中」

自飯野西屬守護旗下、自三山東隨伊東氏矣、以故封疆不穩、動及干戈、且復有北原伊勢介・同新介者、父子共在橫川城而未降太守、屢侵邊境也、是則北原之氏族、而非却樹北原之正統謀宗家之興隆之臣、今也乘世間擾亂之費、恣逞逆威、專自己之奸賊也、天豈可緩誅耶、太守貴久公不得已而欲誅戮之、永祿五年壬戌六月三日、以忠平及舍弟又六郎歲久爲大將、引率多勢向乎其地、攻擊之、貴久公亦欲增其勢、前大旆于隅州溝邊、使新納刑部大輔

忠元・伊集院源介久春追到其地爲從軍矣、時忠平輝軍容示武威、以勵諸率圍橫川城、責之太急也、城兵知其不可

遁、防禦焉最切也、利鏃穿骨戎衣淋血、白刃相接雷電飛光矣、吾兵不屑攻入之、勢增欲拔城、於茲乎、城將伊

勢介・同新介既察守禦之不全、共奮出而鬪戰旋勵、本田刑部少輔・瀧聞美作守向于彼父子挑戰、忠元・久春臨其

戰場有大功也、又六郎歲久者率吉田之騎步、攻入城門、奮威挑戰、而至被傷之有數勞、故伊勢介父子失利、力倦

竟所屠殺、城亦乃陷、則獲敵首數百矣、我軍中亦戰死者不少也、橫川地者即被畀麥刈某、由是麥刈氏、可抽無二

忠節之旨、所以裁誓紙捧 太守也、其後 義久主到于北原氏領地栗野、丁此之時、北原兼親獻栗野於 太守、以

遂參謁、則相良氏之守兵悉去飯野歸求麻矣、由是俾守護軍兼警衛飯野也、

217 「樺山善久初幸 入道玄佐譜中」

永祿元年戊午、 又三郎義久公渡御于長濱、此時祖父之又祖父美濃守孝久依忠功、 將軍家義教卿所賜之寶刀治

備前三郎國宗 以之獻 義久公也、  
北原兼守早世、故眞幸院中之族、以北原民部少輔欲爲家

督、兼守之後家者伊東三位入道之女也、件之入道流涎於眞幸之地、使女子嫁馬關田右衛門佐居三之山、討殺民部

少輔、且將誅戮於高原・竹崎之地頭白坂下總介者、而雖召之於三之山、豫慮知之也、速歸竹崎、超霧鳥山到于大窪、

大窪者玄佐之領知也、兼日有內通之子細、故即上達之於義久公、於曾於郡令遂拜謁、又北原又太郎兼親者民部少

輔討殺之時出奔于求麻、爰踊之城主有白坂佐渡介者、欲候守護之旗下、且嫡男與一左衛門尉・同姓助左衛門尉亦

惡於伊東入道之虐政、而去高原歸于踊、玄佐與彼等俱議曰、欲令兼親連續北原之家、然則欲使白坂與一左衛門尉

與曾於郡之土本田民部左衛門尉往求麻、是以地頭謂于三原遠江守、所以治定也、彼等兩輩凌橫川敵地之山路、無

恙至于求麻、謂兼親曰、眞幸之亂逆伊東氏之所致也、兼親憑于相良氏、發出師旅於眞幸者、薩隅之兵者發於踊口、

宜爲馳走、慥致演說無程反命、再差於與一左衛門尉與本田民部之弟左近允、此時與一左衛門尉者留于求麻、左近

允者歸畢、其後與一左衛門尉引求麻之兵、忍取馬關田城、又德滿之地頭北原八郎右衛門尉合意於兼親、故眞幸之士

卒屬又太郎、是以既又太郎得入部飯野、丁此時、玄佐以武略教白坂下總介差飯野、達北原之興敗之奧義、因茲兼

218

〔忠元譜〕

親請候守護之旗下、去程飯野者相良氏之士卒與守護之騎步俱爲警固、雖然橫川者北原伊勢入道屬伊東氏、栗野地頭宮路氏與同伊勢入道、而爲警固、然而白坂下總介押入栗野爲地頭、其後伊勢入道雖有出頭之命、敢不承引、故發軍衆不日陷之、伊勢入道亦被屠殺、而後被免橫川於麥刈、麥刈可抽無二之忠節之旨捧誓紙、其後 義久主渡御于栗野、玄佐亦有供奉之列、于時與白坂佐渡介密以內談、謂下總介曰、執慮北原氏之興敗、當日相良氏雖爲加勢、後日廻計略、與伊東氏可合體者必矣、然則下總介與與一左衛門尉・助左衛門尉等、爲伊東氏所誅戮、非所疑、不如獻栗野於 太守爲北原之家及汝等長久之計乎、下總介應諾矣、以故速到飯野、達件之旨趣於兼親、兼親容焉、即使北原八郎右衛門尉・木村石見守差栗野、達件旨、兼親亦翌日參越以獻栗野、于時警衛飯野之求麻士卒悉以引歸矣、是以警衛飯野者薩隅士卒而已、

一五年壬戌、眞幸院主北原又八郎兼守卒、眞幸諸邑悉入於 官、獨北原伊勢介兼正兼守別族、據橫川城隅地畔 公、六月、公陣溝邊、三日、使 公子兵庫君等領先鋒軍

219

〔全〕

往橫川城、時忠元及伊集院源助久春奮進先登、忠元持槍戰於城門、遂陷之、兼正等自刎首死、此役忠元被疵有功、

一橫川召崩候時、内城攻之城於城戸口、伊集院玄巢と同道申候而、合戦ひ申候、其時も手負申候、溝邊江 伯圍様御供仕候時、兩人御遣候而之事なり、

220

〔全〕

一横川召崩之時、詰之於城戸、伊集院玄巢同心被申候而 鐘仕候、 伯圍様溝邊江御滞留之間ニ兩人御遣候時、

221

〔忠元勲功記〕

一永祿五戊午、眞幸院主北原又八郎兼守病死ニ而、院内多ク者御領ニ罷成候得共、北原伊勢介兼正与申者横川城ニ楯籠候ニ付、 大中様溝邊迄被遊 御出馬、同年六月、 松齡様御大將ニ而御人數被差向候節、忠元・伊集院源助久春入道元巢、与先登仕、於城戸忠元鎧合仕候、終爲攻陷由御座候、

一 北原兼親方者一先求麻へ退出有りけるを、薩方より相良方ニ御談合を被成宛、北原の家督に被召定、然者伊東の境目にて有間た、二方の番衆を被相添、年月を経る程に、兼親如何存知けん、伊東・相良に内略して、薩州方の御番兵を討果んとの仕合を地下人より告知す、扱者無是非子細とて鹿兒島ニ言上し、御糺明を被遂て、相良方の在番被助一命、求麻の方ハ追放す、兼親此外二心の者萬方へ被移、其中ニ北原方ハ伊集院之内ニ有る神殿村を卅町拜領す、御高恩の重き事不可勝計耳、萬人の申衆り、

一 其節、北原ノ兼親ハ一ト先求摩へ退去ケルヲ、其後相良方へ談合シテ、北原ノ家督ニ彼ヲ被召出、然レハ伊東ノ境目ナル間、此方ヨリ番手ヲ被相加經年月程ニ、兼親如何思ヒケン、伊東・相良ニ内談シテ、薩方衆ヲ討果サント仕合ヲ伺ヒケル、此コト告知スル者アレハ、被遂糺明、全依露顯、相良方ノ在番ハ一命ヲ助ケ、如求方追歸ス、兼親其外二心ノ者トモヲ所々ニソ移サ

レケル、兼親ハ伊集院ノ内神殿村ヲ卅町被下、恩ヲ知ヌ奴原何ノ役ニモ立ツヘキナラネドモ、恩ヲアタヘラル、コト、是仁者ノ道、慈悲ノ至也ト萬人申ス計也、

「上書」  
「貴久様より求方へ之御書 於溝邊認申候案文 永五 六四」  
如示給候、北原又太郎方被致入部候、其方之御校量對當家満足此事候、然者横川城容易切取候、是又爲御存知候、細濃重而可申之条、不能一二候、恐々謹言、

六月四日 貴久  
相良殿

去三日、於隅州横川合戦被碎手、御名譽無比類候、剩手之衆數多粉骨之由神妙候、仍企一行候、恐々謹言、  
永祿五年 壬戌  
六月十六日 義久(花押)

喜入式部太輔殿

〔上書〕  
喜入式部太輔殿

義久

〔此御書、喜入季久譜中ニ在リ〕

226

起請文

一 今度就愚老身上、無実讒言御直談被仰下候旨、於生々世々難報之奉存候、然者栴山家始テ已來十一代、對守護不致不忠、近代勝久様從伊作至鹿兒嶋御再來之砌、依被召懸、爲城役無奉公、無是非候、其刻當御代御奉公故候欵、各御存知之前之事、

一 始中終共抽忠節、無二ニ可致御奉公心底無余儀事、

一 浮世依浅猿、向後又左道之雜說候者、任天當可申開事、

右此条々於偽申者、

貴久へ進上案文

御神名

永祿五年六月廿日

栴山

玄佐

三原遠江守殿  
〔重秋〕

227

〔左衛門督歳久譜中〕

北原又八兼守早世、而後家臣白坂下總介・同姓佐渡介・

同與一左衛門尉・同姓助左衛門尉等、依栴山安藝守善久、

招北原又太郎兼親出奔居球麻、而請立北原之後、 太守

許諾、以其事既成、于時白坂佐渡介・同姓助左衛門尉等

欲獻踊地於 太守而屬旗下、同列栗野・吉松・吉田・馬

關田亦達于 太守、而各入守兵於其地、唯横川城主北原

伊勢介・同新介未嘗隨于 太守、不得已而永祿五年壬戌

六月三日、使兄忠平及歳久爲將帥、卒多勢攻横川、已以

指揮乘勢之際、伊勢介・同新介奮出、本田刑部少輔・瀧

聞美作守對渠挑戰、新納刑部太輔忠元・伊集院源介久春

臨其戰場爲大功矣、歳久亦卒吉田兵攻入城門、奮威競戰

之際、被干戈傷也、因茲 太守賜感牘矣、記之於左、

228

其後無音之至、非本意候、今度よこ川城戸口太刀打、す

てにきすを被蒙、おのく辛勞候、ておひともしかやう

に候哉、其之てもいか候らん、承度候、万吉、恐々、

かしこ、

〔朱力キ〕  
「永祿五年」六月廿一日

貴久〔花押〕

〔上書〕  
又六郎殿

貴久

229

敬白 再拜々々天爵起請文夏

一於後代無相違可申承事、

一雖世上轉變候、無御心元被存問敷事、

一和讒雜說之時、互可申開事、

右此条々於違犯者、上ハ梵天帝釈四大天王、下ハ堅牢

地神炎魔法王、日本鎮守熊野三所大權現 八幡三所大

菩薩 稻荷 祇園等、殊者九州鎮守彦山三所大權現

薩州新田八幡大菩薩 開門正一位 大隅國正八幡大菩

薩 霧嶋六所大權現 求麻惣社等 當院鎮守白鳥狗留

孫一二三之宮等神爵冥爵一々可罷蒙狀如件、△

永祿五年戊戌六月廿一日

伊集院入道

孤舟(花押)

北郷紀伊守

忠徳(花押)

肝付彈正忠

兼盛(花押)

北原

兼親(花押)

深水右馬助

頼金(花押)

東彈正忠

長兄(花押)

231

「伊集院忠朗譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋」

尚々令申候、酒種々之肴、涯分致賞翫候、又眞幸之

「上包」  
求麻老中

一筆

230

起請文

「北郷時久譜中ニ在リ、神名モ全文アリ」

一就今度雜說之儀、御懇之預壹筆候、彼雜說少モ不致信

用候、度々之忠節之夏、于今無忘却候、其上助太郎殿

一命被捨候、一家中於國衆中無比類存候事、

一始中終共ニ、對玄佐父子不可有疎略之事、

一雜說之時者、何ケ度度茂互可申開事、

右此条々於偽者、

奉始上者梵天帝釈四大天王、下者堅牢地神等九万八千

軍神二千八百師天、別當國鎮守霧嶋六所權現 正八幡

三所大菩薩 當所鎮守止上大明神 白山大權現 稻荷

大明神 天滿大自在天神、各御爵可罷蒙也、仍起請文

如件、△

永祿五年戊戌六月二十六日 貴久(花押)

椀山安藝入道殿

(幸久)



御返事共如何候哉、使者之事者鹿兒嶋之様通申へく候、是又必定之義候へ、承へく候、自求摩之書狀之返報二參せ候、心遣有へく候、又球摩老中之返書之事、其方にて被指調候て給候へ、半紙を參せ候、

昨日者、從求广之書狀被遣候、一通者則披見申、如其方之參せ候、今二者細く見申へく候、求摩之思義鹿兒嶋へ能く御相談肝要候、從勝軍齋之文之返夏ニ者、所領之懸引眞幸へ申候へ共、無然く儘、横川之事菱刈ニ可被遣之御談合にて候由申へく候キ、隨而者此方旅宿之躰以御枝量、近來之堺酒預送候、夕日從府中罷歸候て、旁く參會、涯分致賞翫候、諸篇重而可申承候、恐く謹言、

〔朱力半〕  
〔朱力半〕  
〔永祿五年〕七月廿四日  
孤舟(花押)

〔朱力半〕上書  
肝付正忠殿  
御宿所  
伊集院入道  
孤舟齋

敬白 起請文事

夫神依人敬増威光  
人依神徳添運命

一於後代無相違可申承事、  
一雖世上轉變候、無心元有間敷事、  
一和讒雜説之時、互可申開事、  
〔牛王〕  
右此条く於違犯者、奉始上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神炎魔法王、別者熊野三所大權現、八幡三所大菩薩、王城鎮守諸大明神、殊者九州鎮守彦三所大權現、鶴戸霧嶋兩所權現、阿蘇大明神、藤崎八幡大菩薩、妙見市房青井大明神、惣者六十余州大小神祇神爵冥爵一

一可罷蒙之狀如件、△  
永祿五年南呂吉日  
〔南呂八月也〕  
相良 頼房(花押)

〔時久〕  
北郷殿 御返報  
〔裏二〕  
相良 頼房  
〔上包〕  
北郷殿 御返報

〔此誓文、北郷時久譜中ニ在リ、神名モ全文アリ〕

〔日新公御譜中〕

寄進法華八軸於田布施常珠寺、其奥書記左、

妙法蓮華經卷第八

永祿五曆壬戌仲秋 薩陽加世田庄

大願主在家菩薩日新

就幸便令啓入候、仍頃者無音罷過候、非本意候、然ハ飢肥立之事ハ、來五六日之比と聞え候、此間ハ兵糧籠計之様ニ候ツ、雖然從 日新様類ニ御意見候条、此度之事ハ兩御陣役疊、悉軍衆被召連御越山可目出之由仰候、仍其御談合最中ニ候、如此定候ハ、御毎子〔本ノマ、〕御一人ハ御出張可有候、然共未尔々候、菟角軍衆可小々罷登事ハ持定と承候、何様尔々之儀ハ重而可申条、令省略候、恐々謹言、  
〔朱カキ〕 永祿五年八月二日 忠平(花押)

又四郎

(歳久) 又六郎殿

御宿所

忠平

永祿五年九月十八日、島津尾張守忠親運籌策、向飢肥攻

伊東氏、既得勝利、而再領知飢肥之地矣、

一其比飢肥衆申様ハ、日置・柏原兩人ニ南郷ヲ被下夏不可然由ヲ沙汰ス、亦日置・柏原モ此儀ヲ心遣ニ思ケル所ニ、有時ハ山東ヨリ大人數飢肥ノヤウニ越ト聞、有時ハ夜討ニ被討ト聞、或時ハ走籠ニセラル、ト聞、ケ様ノ事ヲ聞ツモリ、日置・柏原六月末櫛間ノ豊州ヲ頼落也、比ハ同七月、日置・柏原思ヤウ、一度本城ノ間越ヲ枕トセハヤト思フ所ニ、同心ノ衆三十六人有、則十三社ニ參リ神判ヲシ、時節ヲ社ハ相待ケレ、其比義祐被仰出ハ、九月中ニ飢肥ハ可被移由ニテ、福永宮内少輔モ物内ニ越タリケリ、其外番衆モ可移トヲ、飢肥ヨリ物内ニ越テ、本城ノコトハ無勢也、日置・柏原此由ヲ傳聞テ、能幸トテ深水主水佐・高橋四郎左衛門・種田大膳亮此衆ニ心ヲ合セ、同九月十七日ノ夜中ニ飢肥本城水ノ手ニ指寄、豊州一手ヲ以、吾モノト乱入、日置ハ四千程ニテ櫛原ヨリ町口ニ押寄ル、吉野大炊助此由ヲ聞付テ出合、一戰シテ西ノ城ヘ引籠ル、其時ニ宮田安藝守・同藤五郎・和田兵部丞・海老原清左

衛門・落合石見入道少悅・野邊彈正忠・壹岐小三郎・阿妻跡五郎彼是十人程ニテ、松尾ノ門口ニテ相戰討死ス、但粟下伊賀守ヲハ安藝守、櫻田隼人佐ヲハ清左衛門討取、各思／＼ニ敵ヲ討捕、精力盡テノ以後ノ討死右ノ通り也、扱又番代上別府常陸守・壹岐加賀守・同息長門守敵數輩討亡シ、名譽ノ討死トソ聞ヘシ、因茲本城ノ夏ハ日置・柏原押領也、酒谷ノ城ハ同翌十八日巳ノ刻迄ハ格護ス、番代平賀方ヨリ落合加賀ニ使ヲ立、迎モ酒谷ハモテマシキ間、ツホミ可申トノ使也、加賀返事、此城ニ遷ヨリ本城口ノタレヲハ受取、何士ニ渡可申カトノ返事也、其時平賀ハ迎モモテマシキ城ヲ、不入リキシヲ出サンヨリハトテ、秋山寺ノヤウニ人數五十程ニテ落ラル、ナリ、敵程ナク押ヨスルニ依テ、落合加賀守家ノ子郎等、其外田野衆ニハ海老原清左衛門主從中村孫七郎モ打死也、此夏物内ニ相聞、木脇越前守人數召列、其夜酒谷ノ城近キ長野ニ着寄テ關玉ヘ共音モセス、不及力引退カル、此仕合ニ依テ諸軍皆山東ニツホミ申也、則豐州鉄肥ニ入部有テ、薩广ヨリモ同廿二日、爲祝儀鉄肥越山トソ聞ヘシ、

238 「北郷家藏」

其境與肝付和融之企有之由示給候、尤肝要候、然者對此方可有鬱憤之由、彼方被存候らん、到當家向後於眞實之入魂者、聊以霍執之儀有間敷候、此旨爲御納得候、恐々謹言、

十月二日

義久(花押)

北郷左衛門尉殿

239 「見于田布施金藏院書出」

一法花經十部

右 貴久公永祿五年ニ御寄進、八角形之金塔ニ入、

御嶽社内ニ御座候塔之銘曰、

十羅刹女 藤原朝臣貴久

不

奉納法華經王十部 敬白

三千番神 永祿五年壬戌十一月吉日

240 勝久公

忠良

良久

益房丸 又三郎 後出家薙髮

永祿五年壬戌一本作六年癸亥十二月十九日、於日州廣原誕生、母伊東義祐之家臣福永入道月甫長女也、一本作福永宮輔姉

天正二年甲戌、十三歳而於日州廣原八幡宮元服、稱又三郎良久、

「義久公御譜中」

「正文在三原遠江」

尚く飢肥・志布志兩口之間、於何方も一途之談合可入眼事者、その以分別左兵談、入道殿へ内談次第たるへく候、聊不可有油断候、將亦左兵談入、寒中一段御辛勞察入候、よくよく心得申されへく候、

於此方可有御談合之處、先日立之砌者、執亂候まゝ無其儀候条、態被成御使僧候、尾州對身上火急之旨筋候之間、是非以指寄落着可爲肝要之由、大殿様之思召事候、然者於飢肥之内所領之懸引候て茂、先此一節尾州難儀を可被召執延之事、果而者勝たるへく御分別候之間、能く此談合可然候へんする欵、於此上伊東方不和融候者、又者於肝付方可被入手才覺もや候へんすらん、順逆彼是之儀、可有御油断時分ニあらず候、左兵衛尉殿淡路入道殿へ精

以內談、尾州へ可被申渡候事、專用たるへきよし被仰渡候、よくよく入魂分別入へく候、恐く謹言、

「永祿五年」十二月廿三日 義久(花押)

(上書) 三原遠江守殿 義久

242 「國史」卷十 大中公 貫明公 七 松齡公

六年癸亥春、公如飯野、二月十日、將兵擊伊東軍於三

山、戰勝而還、據大中公舊譜、島津支流系、圖禪山氏譜、禪山玄佐自記、冬十一月十六日、

貫明公賜肝付兼盛感狀、嘉成飯野之功也、據大中公舊譜、肝付典膳系圖、

松齡公舊譜、北原兼親入飯野城、大中公遣軍士、與相良氏兵共成之、公賜肝付兼盛感狀、蓋此時也。

243 「水引泰平寺薬師堂推鐘銘」

薩摩國高城之郡千臺醫王山泰平寺薬師如來御宝前推鐘一

口

于時永祿六曆癸亥二月八日

當住持 正智院有鏡

大檀那 平朝臣重綱

水引地頭ノ源信乘

「義弘公御譜中」

策、入兼親於眞幸、全其身立北原氏之統、而後移之薩州伊集院上神殿村也、

245

「貴久公御譜中」

永祿六年癸亥二月十日、遣薩隅二州軍衆向三山城、既追合戰得勝利、斬首其數多矣、

244 一癸亥 永祿六年二月十日、以守護之人衆三山ニ衆使アリ、ボウカリヤ破テ得勝利ヲ、敵數多被打、新藤殿下向、

奉行

平重陳

藤原政盛

大願主

野崎大膳亮

藤原兼定

勸進沙門

高野山長乘

作者

藤原信續

同 信直

247

「樺山善久入道玄佐譜中」

永祿六年癸亥、貴久主渡御飯野、而二月十日、發向軍衆於三山、此時菱刈入道天眼馳所從其軍、今日有勝利、獲敵首者其數多矣、雖然 貴久主先揚歸鞍鞭矣、舐肥封疆已下諸所警衛不審、是以如斯、

永祿六年癸亥、貴久公渡御飯野、而同二月十日、發向軍衆於三山有勝利矣、然而先以歸鞍也、兼親之伯父左兵衛尉者守吉松城、招入相良氏之師旅於彼城、通伊東氏運謀、欲討殺守護方守兵、其事未成、隱謀已露顯、由是左兵衛尉卻而畏及其害、委居城出奔也、北原八郎右衛門尉・白坂與一左衛門尉者辭兼親之旗下、爲 守護之暱近、以故兼親逐日滅士卒、且復相良氏欲奪兼親之領土、是以移兼親於伊集院神殿村、眞幸院爲 守護領、因茲永祿七年甲子、賜眞幸院於兵庫頭忠平、所以移居飯野守封疆運武略未嘗頃刻安佚也、

有北原又太郎兼親之伯父稱左兵衛尉者、守吉松城、憑乎伊東氏與相良氏、思立兼親、由是招入相良氏之士卒於吉松、欲屠殺 太守之守兵、其陰謀既露顯、以不得住宅、忽然逐電矣、又北原八郎右衛門尉與白坂與一左衛門尉者

辭兼親爲暱近、于時使兼親去眞幸移薩州伊集院、眞幸院  
悉爲守護領、以故 太守令弟又四郎忠平領知飯野、居住  
于此矣、所其由來非玄佐愚慮之所致乎、

248

度々御鬮申下候事、雖相似輕神慮候、當家之事

奉頼偏 御山之應護外無別儀、仰願六所大權現御座哀愍

納受、差向所之敵城被却、一々心中之諸願令成就給へ、

仍御鬮之意趣如件、

条々

一到小林之城働之事、指寄候て喜ならは一鬮、

一時分伺候て於可然者二鬮、

一任佳例、可有白鬮候、

永祿六年癸亥貳月彼岸廿三日

〔本文、貴久公文天廿四年御文書与御同筆ニ而候〕

249

『大村市兵衛重頼日記』

一兵庫頭忠平様、飯野江御移被成候、其後義弘と御名乘

被成候事、廿八才之御時也、

250

〔御譜中〕「正文在高山衆日高千代次」

日向國櫛間湊天神丸

船頭日高但馬守

琉球

〔御朱印〕印文貴久

永祿六年癸亥貳月廿八日 貴久

(花押)

下

251 度々被預音問候、其後御無音之条、陽春院被進候、日州

防戰和弓共大友殿江深重被申談候、順逆彼方同前候、於

実否者可申達候、於弥御入魂所希候、雖輕微之至候、到

來之儘塩柵十斤被進候、可然様可有御取成候、

東彈正忠殿へ

村田

梁瀬源左衛門尉殿へ御宿所かき

〔村田越前守〕

〔求广老中へ案文〕

經定

252

〔御文庫拾六番箱三卷中〕

〔貴久公御譜中ニ在リ、義久公御譜  
中ニハ正文在梁瀬六右衛門トアリ〕

坪付

大隅宮内爲假屋付水田五町

肝付彈正忠兼盛(花押)

伊集院笑岳(花押)

勝軍坊

永祿六年五月朔日

「上書」  
肝付彈正忠

伊集院孤舟

勝軍坊

御同宿中

笑岳

253

「御文庫拾六番箱壹卷中」

若宮御託(マヤ)宣条永六五二

一 御弓矢久しかるへきの事、

一 御弓矢御談合萬事入へく候、自然大事ニ罷成へき事も

や候へんすらむ、御校量肝要たるへき事、

一 敵方より心ヲよする者候、涯分く御用捨入へき事、

一 御働なと候するへ、しはらく被指延候て可爲肝要之事、

一 貴久様御歸託の事へ、相をとりなき人躰御番ニめしを

かれ、六月さま御歸陣候する欵、

一 義久さま去年御むしわつらい候ツ、只今は御託宣へん

きニより候ての事、

一 御鳥井立候へ共、山神のはねやす□木にて候ツ、それ

によりて御やう□なく候、さやうなる御きねん大□存

候する、可被仰付候事、

一 先度のくひの御働ニ、別而金峯山若宮御守候之事、

「未紙切ル、カ」

254

「喜入季久譜中」

「正文在當家」

尚く飢肥・福嶋堺當剋無替儀候、然共福嶋浦於都井

勝利候、敵七十人ニ及討捕申候、爲御心得候、

先度者以一輪申入候之處、其後預御返札候、令拜領候、

仍御屋形様此方御光儀候条、爲可得貴意与風參上申候、

然者弓箭之御相談最中候、爲御心得申通候、雖遠方之事

候、毎事可被添御心事頼存候、猶期後音時候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
一 永祿六年欵五月二日

「北郷時久」  
一 雲(花押)

喜入(季久)式部大輔殿

御宿所

255

「義久公御譜中」

一 女子

島津薩摩守義虎室

一 女子

島津守右衛門尉彰久室

永祿六年癸亥六月十六日誕生、母種子島左近大夫時

堯女也、

寛永十八年辛巳八月十五日、於新城逝去、年七十九、

法號瑚月淨珊庵主、

女子

太守家久卿簾中

256 「御文庫拾六番箱壹卷中」

一御幡六流

一御鎧一領甲二列

一十文字タテ物イチャウ

一御太刀繩切

一御劔

一御太刀ニッウラ同

一組候片ハ刀一

一御鞍一通亦

次ノ一通

一鎧一かけ

一御兵書以上十六卷

一諸大名日記二通

一鳳王ノ羽二一

一九シヤクノ羽四

一御手本一

一羽形以上三通

一玉ノ數大小九

一五廿四通念數

一丹後御坪子縫阿弥陀

一阿弥陀名號一フク

一神明

一毗シヤ門ノ繪

一御重書

十五囊

右書中、綸旨并御内書、殊尊氏將軍御判形多々有、

一櫛間院給分坪付

高崎播摩守

同兵部少輔

河上丹波守

中村隼人助

重田美濃守

篠原佐渡守

永祿六年癸亥七月七日

257 依遠遠未被申通候、去夏之比最上宗檜被差下候、其以後

無音之条被用使書候、宜預御取合候、仍段子□雖些少候

被進候、子細此方柄等彼使可申達候、

首不殿 櫻井紹白軒

御添狀

「村田越前守」  
經定

258 「薩州家義虎譜中」



「正在出水專修寺」

當寺佛法興隆之事、尤以神妙也、弥可奉抽寶祚延長之懇  
祈之由者、天氣所候也、仍執達如件、

永祿六年七月十日

左大辨(花押)

專修寺弥阿上人御房

「上包」  
專修寺弥阿上人御房

左大辨俊光

259 「右馬頭忠將譜中」

「在清水岡寺」

爰隅州賢主藤原征久忝孝心所勤

永祿六年龍集昭陽大淵猷孟秋十有二日、伏值 心翁大安(忠持)

居士大祥忌之辰、預於同上旬就于私宅三日之際、營備茶

菓弥羞之儀、布設法筵拜、請 正興東堂大禪佛屈、請列

岳諸山之堂上者宿遐邇之諸宗二百餘員、以作宗々佛夏焉、

晨經夜座勤修可尊者也、隔宿而命一會之海衆、辨決禪門

無二之論議、誠是發開大施門播揚大法會、予在厥座隅不

顧陋才、哀感之餘感冠、心翁大安居士六字、而綴野傷

六首以奉呈上 尊靈前 云尔、伏希昭鑑

心地發開大施門 無差法味育人根

却來今日當頭着 海月山雲備一盆

翁祖少林得髓鮮 單刀直下不傳々

壁間月白風聲斷 靈也卓然遍大千

大虛寥廓參差是 馥郁德香難覆藏

一夢邯鄲過半世 須臾首已三霜

安養弥陀在寸胸 飢殮渴飲忽相逢

秋空玉露吳天月 剔起愁眉錯失宗

居處從來無住着 白雲岩畔卷還舒

一毫頭上會根本 六道四生齊一如

士常好勇退冤讎 身擲戰功人使愁「嗚」

落葉飄空松尚秀 枝々嫩綠幾千秋

野衲合爪

「右上有之」  
近澤作

260 一町二反

一町二反

同 樋草崎之門  
中藺之屋敷

浮免

一町八反 此内三反堀町一内浦有、於鹿兒嶋庄之

執筆仕候面目ニ被下候、

堀町二

屋敷一

小原ニ有、

惣以上四町二反

堀町二

屋敷一

此前扶持候所領判之事、依懇望令遣證文如件、

法印省鈞(花押)

安樂因幡守殿

永祿六年癸亥八月廿五日

261 (本文書ハ三〇三号文書ト同文ニツキ省略ス)

262 (本文書ハ三〇四号文書ト同文ニツキ省略ス)

263の1 上國刻、種々預御入魂候之趣、御頼敷存候、其以後節々雖可申入候、依遠遠之儀、乍存候、仍上意之續、至國々

面々宿老中、銘々申展候之處、各以得心被奉上聞候、爰元公私共申調候条、寔令満足候、早々於日州表一勢雖可被差向候、當時豊前國之弓筋聊相支候之故、延引之様候、然共彼弓筋茂急度可事行之由候間、豊州・肥州之諸勢被

相残、可被差立通承候、如此嚴重之請御内々候之事、前

代未聞候、將又霜臺御事、此方御知人中江致物語候之處、

何茂御噂耳之由候、芳等從可被申候、恐々謹言、

十月廿一日

佐々木越後入道

本田彈正忠殿まいる御宿所

源宗綱(花押)

263の2

追而從戸次山城守方御具足一領被致進上候、於爰元別而被添心候之条、重々被成 御書等、御祝着之段被仰達、御肝要存候、此謂宜預御披露候、恐惶謹言、

十月廿一日

源宗綱判

本田彈正忠殿

263の3

追而戸次伯耆守方南郡八人惣連署等、以後張行被相調、至陣中も被相添候、同豊州へも親類衆同心差被連候、是又御書等、重而親方可爲同前候、恐々、

十月廿一日

源宗綱判

264

「義久公御譜中」  
「正文在肝付伴兵衛兼屋」

今度飯野一大事之刻、俄被寵任扣留、長々辛勞以甚感心

此事候、猶弥々憑入候、恐々謹言、

〔朱力中〕  
永祿六年十一月十六日 義久(花押)

肝付彈正忠殿 (兼盛)

265 「左衛門督威久譜中」

猶々從兵庫頭殿頻參候之様于今承候へ共、先々此度者、如其方之可參覺悟候、

兼日如申候、餘々無沙汰之条、乍次歸宅之刻、可致一礼候、然者其方之通路等不知案内之間、迎案内者、爲彼是誰之一人被仰付、十二日必々此境へ罷着候者、十三日者其方へ可參候、爲御存知企一行候、期來故候、恐々謹言、

〔朱力中〕  
永祿六年閏十二月九日 義久(花押)  
(藏久)  
又六郎殿

266 「國史」卷十 大中公 貫明公七

七年甲子春三月十四日、宣旨 公任陸奥守、貫明公任修理大夫、據大中公・貫明公舊譜 北原兼親與大河平氏有怨、言於

松齡公曰、置戍兵於飯野及今城、糜費甚多、且今城之與飯野相去不遠、倘有急難、飯野遣兵救之、可無後也、何

以置兵爲 公以爲然、乃罷今城戍兵三百人、伊東義祐聞之、夏五月晦日、將兵攻今城陷之、城主大河平隆次及叔

父孫左衛門隆堅以下九十餘人死、伊東軍死者五百餘人、

據松齡公舊譜、大河平休兵衛系圖、伊東義祐前攻大河平城、不能克、松齡公嘉其善守、今攻今城、死者五百人、則亦有以見其堅守矣、向使三百人戍兵不去、則伊東軍安得拔今城也哉

秋七月十八日、島津忠親與肝付兼續戰于櫛間桂原、新納式部大輔忠衡死、

據島津內膳家譜、原書作新三郎忠衡、島津支流系圖、忠衡初稱新三郎、後改式部大輔、則此年稱式部大輔固矣

忠衡、新納氏之支庶也、據島津系圖、原書近江守忠、武第三子白式部大輔忠衡、忠衡、忠郷之子也、新納忠武見第十二卷明應三年、

初相良氏納北原兼親於飯野城、留兵戍之、公遣兵衆鎮飯野城、相良氏兵

猶留不去、及兼親以栗野獻 公、而後引去、是時兼親伯

父左兵衛尉爲吉松城主、謀與伊東氏・相良氏殺飯野城鎮

兵、會事發覺、左兵衛尉出奔、北原八郎右衛門尉・白坂

與一左衛門尉等亦去眞幸歸公室、北原氏勢益孤、又爲相

良氏所逼不能自立、公乃遷兼親於伊集院神殿村、使

松齡公領眞幸院以備伊東氏、據大中公・松齡公舊譜、島津支流系圖、禪山氏譜、樺山支佐自記、松齡公舊譜云、永祿七年甲子、賜兵庫頭眞幸院、而朱注於七年右方曰、一作六年癸亥、於是 松齡公徙眞幸院

城加久藤、又修飯野城以逼伊東氏、冬十一月十七日、徙

飯野城、留夫人在加久藤城、據木崎原御合戰記、加久藤城遺墟在加久藤鄉地頭館北三町許、係小

田村、十九日、貫明公與都城領主北郷時久盟誓曰、世修盟

好、毋替、毋改、旣肥有難、當擊三山以救之、有渝斯言

諸神癒之、時久、實飲肥領主島津忠親之子也、據島津支流系圖、島津忠親、實北郷忠相之子、出爲妖肥領主島津忠廣嗣、留其子時久、爲北郷氏後、而妖肥與伊東氏接續、動見侵掠、故公與時久爲此盟、妖肥有難、謂伊東氏爲難、

267 「義弘御傳」

一永祿七年甲子、太守以忠平爲日州之藩鎮、賜於北原之舊領眞幸院、故忠平在城于院內之飯野云、  
一國老記左ノ如シ、

筑前守助友嫡子

五代右京亮友慶

初勝左衛門

右 義弘公飯野御在城之時、御家老役ニテ地頭職被仰付云々、友慶木崎原ニテ伊東加賀守ヲ討取トアリ、  
永祿六年、義弘公自鹿兒島飯野へ御移、御在城廿八年、御家老

有川雅樂入道任世

上井次郎左衛門

川上參河入道肱枕

右同御使衆

宮原伊賀入道

五代右京

268 「庄内平治記」

一永祿七年正月廿日、伊東か勢又鬼ヶ城を陣取り、同三月十四日、酒谷へ相働く、翌日の夜引退、同十六日、伊東方より兵を出して、本城向原の作毛を散す、本城の兵迎撃て、敵六人を打取ぬ、

269 一甲子 永祿七年、此年貴久号陸奥守、義久任修理大夫、

270 「義弘公御譜中」

永祿七年甲子、太守貴久公受領及 義久主官途之儀、以馳走 公武成就之旨、前關白大政大臣植家公近衛賜賀書、記左、

271 「正文有乙」(義弘公御譜中ニ在リ)

其後久闍筆候、背本意候、仍修理大夫受領并又三郎官途之事、公武之儀、令馳走差下候、自然者宜取成肝要候、猶進藤左衛門大夫可申候也、狀如件、

〔朱カキ〕  
〔永祿七年〕三月十三日  
(種家)  
(花押)

嶋津(義弘)兵庫頭殿

272

〔新納忠元譜中〕

〔正文在新納次郎四郎忠鏡〕

其後久闕筆候、疎遠候、仍修理大夫受領并又三郎官途之事、公武之時宜令馳走差下候、自然者取成肝要候、猶進藤左衛門大夫可申候也、かしこ、

〔朱力キ〕  
〔永祿七年〕三月十三日

〔花押〕

新納刑部太輔とのへ

〔上包〕  
新納刑部太輔とのへ

〔花押〕

273

〔忠元勲功記〕

一永祿七子三月、近衛植家公并御子 前久公御吹舉ニ而、大中様者修理大夫より陸奥守ニ御受領被爲在、貫明様者又三郎より修理大夫被爲任候、御宣旨御申調、進藤左衛門大夫長治ニ爲御持被差下候節、忠元茂御取成可仕旨、同十三日、右之 御兩公より御銘々御判物被成下、于今家藏仕居候、

274

〔新納忠元譜中〕

〔正文在新納次郎四郎忠鏡〕

雖未申通候、令啓候、仍修理大夫受領并又三郎官途之儀申調下候、自然之義宜取成肝要候、猶進藤左衛門大夫可申候也、かしこ、

〔朱力キ〕  
〔永祿七年〕三月十三日

〔前久〕  
〔花押〕

新納刑部太輔とのへ

〔上包〕  
新納刑部太輔とのへ

〔花押〕

275

〔忠元譜中〕

七年甲子三月、近衛植家及其子前久爲 公與 世子貫公、請官途於 天朝、十四日、宣旨 公爲陸奥守、前此任修理大夫、時繼又 於是前日、近衛父子使進藤左衛門大夫長治、來於賜忠元御書各一通、使以致之、

276

〔本文書へ二七二号文書ト同文ニツキ省略ス〕

277

〔本文書へ二七四号文書ト同文ニツキ省略ス〕

278 其後久閑筆候、疎遠候、仍修理太夫受領并又三郎官途之

儀、不断光院以内談之旨、公武時宜令馳走差下候、自然之義取成肝要候、猶進藤左衛門太夫可申候也、かしこ、

〔同年〕 三月十三日 (種彦) (花押)

川上左近將監とのへ (久朗)

279 雖未申通候、令啓候、仍修理太夫受領并又三郎官途之事

申調下候、尤珍重候、自然之儀取成肝要候、猶進藤左衛門太夫可申候也、かしこ、

〔同年〕 三月十三日 (前久) (花押)

川上左近將監とのへ

280 「日新公御譜中」

〔正文〕 「本マ、」

其後久閑筆候、尤細々可申之處、依遠路無音背本意候、仍修理太夫受領并又三郎官途之事、公武之儀申調下候、

珍重候、委曲猶進藤左衛門太夫可申候也、狀如件、

〔朱カキ〕 「他ノ字ニアリ」 (花押) 「近衛大閑」

〔忠良〕 日新齋

281 「北郷時久譜中」

永祿七年三月十三日、太守修理大夫貴久公被任陸奥守、又三郎義久公被任修理大夫、從 近衛殿賜御書於時久、

有正文、左記之、

282 雖未申通候、令啓候、仍修理大夫受領并又三郎官途之事

申調候、珍重候、自然之義取成肝要候、尚進藤左衛門大夫可申候也、かしこ、

三月十三日 (前久) (花押)

北郷左衛門尉とのへ (時久)

283 「義久公御譜中」

〔正文在島津安藝久雄〕

上卿 中山大納言

永祿七年三月十四日 宣旨

藤原義久

宜任修理大夫、

藏人頭右大辨藤原淳光奉

〔上書〕 口宣案

〔本文書ハ三一四号文書ト同文ニシキ省略ス、但シ年紀ノ注記ハ永祿七年トアリ〕

〔本文書ハ三一五号文書ト同文ニシキ省略ス、但シ年紀ノ注記ハ永祿七年トアリ〕

〔端裏書〕  
〔口宣案〕

上卿 中山大納言

永祿甲子七年三月十四日 宣旨

修理大夫藤原貴久

宜任陸奥守、

藏人頭右大辨藤原淳光奉

〔上書〕

口宣案

〔貴久公御譜中ニ在リ〕

〔正文在文庫〕〔義久公御譜中ニ在リ〕

官途事委細承候、然者息又三郎儀、任修理大夫可然旨、

可被仰遣候、猶量忠可申候、恐惶謹言、  
〔上野〕

〔朱カキ〕  
〔永祿七年〕三月十五日

〔植卷〕  
近衛殿

義輝〔花押〕

〔義弘公御譜中〕

永祿七年甲子之春、北原又太郎兼親謂忠平曰、入警衛士

於飯野與今城者、守護方士卒之費非所言之可得而述、有

事于今城、則從飯野發騎歩可援之、速退士卒者可乎、忠

平容此之言、三月退警衛士矣、後日聞之、兼親大川平一

族背兼親言、有不改宗旨之妬、是以慮亡彼門族也、未知

是乎否、

289 永祿七年甲子

三月十四日、宇都源十郎 伊東の寇と飯野の  
木崎原に戦ひ死之、

五月晦日、大河平九郎隆次 大河平城主にて、伊東義祐來り攻  
め降らす、領邑所望に随へんとの

使僧を罵り、公室の爲に防戦し  
て死、年十五、從兵死者多し、大河平孫左衛門隆堅・大河平

孫次郎隆光・大河平隼人・八重尾兵部左衛門・八重尾

後藤左衛門 以上  
一族、佐藤壹岐 以下  
家臣、佐藤段左衛門・佐藤彦

八・上田傳右衛門・上田次右衛門・上田源八・濟藤越

右衛門・同善介・同喜兵衛・同與一兵衛・同太郎三郎

・同五郎右衛門・同甚五郎・山中郷右衛門・山中與八

・山中藤右衛門・濟藤平右衛門・同八郎右衛門・同甚

兵衛・同藤兵衛・同藤八・八重尾清右衛門・同弥市・

深瀬四郎兵衛・同彌右衛門・同千七兵衛・濟藤四郎右

衛門・同藤之丞・同勘之介・同藤次兵衛・同藤七・松

ヶ野内藏之丞・同兵介・同甚左衛門・渡邊七郎兵衛・

嶽木場治郎兵衛治或作十・同弥七郎・同後藤左衛門・川畑

正之允・同彦作・同彦介・竹下清次郎・山下作之丞・

同喜三郎・川野藤太・村岡七之允・木下山之允・同六

之允・小田小四郎・市之丞・小平次・喜八郎・與兵衛

・弥七郎七或作十・彦左衛門・彦市・沼田拾郎左衛門・同

源藤・栗屋市之介・同彦五郎・濱田勘兵衛・同金兵衛

・黒木藤太左衛門・同清八・崎山伴左衛門・同七介・

松田半右衛門・松田權太・春口新右衛門・田中伴兵衛

・田中平次郎・的場五兵衛・同清之丞・井ノ口二左衛

門・同三左衛門・武田甚介・山口八兵衛・同半四郎・

戸左衛門・少左衛門・源七左衛門・千兵衛・松之介・

正兵衛・五郎介・川内權左衛門・中村勘八・河添甚左

衛門・新兵衛・權七・松田善右衛門・坂之下志摩助・

同新吉・水流仲七左衛門以上皆家臣・橋口越後坊以下は其時援兵として守居

死之士衆とあり・春口兵左衛門・二宮兵部左衛門・全次郎五郎

・與松與一兵衛・野添新左衛門・永野仲左衛門・楠田

主馬、

七月十八日、新納新三郎忠衡佐左衛門祖なり、後式部太輔、

豊州忠親の肝付省釣か宿鳥を侵すを拒くに從ひ、桂原に戦て死之。

290 『阿久根蓮華寺文書』

筑前國聖福寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

永祿七年四月二日 左中將判

宗寶西堂

291 「義久公御譜中」

「案文在本田助之丞」

去々年者、不寄存知之處、腹巻一領送預候、祝着此事候、

尤其後雖可致御礼候、遠遠之間于今延引、背本意候、好

便之条、馬一疋黒毛印大文字、進之候、餘者神力坊可被達候、

「上書」 永祿七年 四月十一日 戸次親方へ 神力坊ニ傳言

292 「義久公御譜中」

「案文在本田助之丞親長」

猶々伊東殿舊年之押領之事者不及申候、必罷上候而、

巨細押領之樣躰委敷申上候、

御方へ長々致滞留御苦勞罷成候、万端難謝候、然者今月

十七日、薩摩へ罷着候、其御方之調略御入魂之通、始終

申達候、公私喜悅不過之候、近日御使僧可有御下之間、

其砌倍可申入候、就中眞幸境目、近年伊東殿押領之分、



別紙書付進上候、飢肥境之事遠方候之間、追而可申上候、

宗檜

櫻井入道殿

〔有上書〕  
永祿七年甲子卯月廿貳日

使ハ神力坊

293 〔御文庫拾六番箱三卷中〕

薩摩大隅日向之境目

眞幸院内之事

伊東方近年押領之地

三野山之郡

三之山之内高崎

同 高原

同 野尻

此前凡書付進上候飢肥境之分、追而可申上候、伊東方舊年之押領之事、先々令省略候、

永祿七年甲子卯月廿貳日

294 〔義久公御譜中〕

〔正文在本田助之丞〕

追而至息孫次郎御傳筆之趣、具申聞候、御丁寧之段

畏存之由申候、

先年之被号御礼、從 貴久様御馬一疋黒毛印大文字、從 義久

様織香若干本被送下、何茂忝拜領、過分至極候、必神力

御坊御下向之刻、意趣可致言上候、先以此旨、宜預御披

露候、恐々謹言、

〔朱力斗〕  
〔永祿七年〕五月十一日

〔戸次〕  
紹花〔花押〕

本田山城守殿

參御報

〔上包〕  
本田山城守殿

御報

紹花

〔上包裏ニ有之〕  
戸次山城入道

295 〔義弘公御譜中〕

永祿七年五月晦日、伊東三位率軍衆來、攻于今城者、自曙至申時、於此遂落城矣、九郎之叔父孫左衛門・弟孫次郎・其祖隼人・八重尾兵部・弟藤左衛門、又橋口越後・

春口兵左衛門・二宮兵部左衛門・同次郎五・與松與一兵衛・野添新左衛門及郎等共九十餘人戰死、爰長野仲左衛門、爲問安否來于當城、不計忽會圍繞之難逃、主從十餘

人遂戰死、九郎嘆曰、一族郎等悉以戰死、今也非保命惜

身之時、突入于大軍中、所以戰死也、享年十六、可惜哀哉、此時伊東氏之士卒死者五百餘人云云、此時當城士卒妻子奴婢悉以被捕、赴伊東氏領土者也、

296 「義久公御譜中」

兩國霍執之儀太不可然、早可屬無事之段、肝要候、此旨日州へも被仰下候迄、委細者近衛殿可有御演說候、猶貞孝可申候也、

〔朱カキ〕  
「永祿七年」六月二日

嶋津修理大夫とのへ  
(義久)  
(花押)

297 「日新公御譜中」

〔正文在最上右近〕

好便之條馳筆候、家門事對其國旧好吳于他儀不殊候、連々無疎意馳走之段、執成頼入候、仍色紙三十枚、雖其憚多

候、書進之候、委曲猶申含古市長門守候也、狀如件、

〔朱カキ〕  
「永祿七年」六月廿七日

(忠良)  
日新軒  
(花押)

〔朱カキ〕「上書」  
日新軒

(花押)

298 「義久公御譜中」

〔正文在稅所彌左衛門篤能〕

貴札之旨致披露候、仍御進物共如目錄請取申候、御喜悅之由被成御書候、將又御官途之儀被仰調候、目出度存候、隨而御烏帽子大口裏打并御扇匂袋等被進之候、爲拙者得其意、可令申旨候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
「永祿七年」六月廿八日

(進藤)  
謹上 嶋津修理大夫殿

左衛門尉長治(花押)

299 「左衛門督歲久譜中」

尚々衆盛之事、蒲生へ別手ニもかまへ候すらんと存計候、しかれ共、りん所ニ候ヲ別手ニつもり候へは、いかゞ候欤、御内義可承候、

態染筆候、仍先度之使者ニ音弓御所持候、のそみに候ハ、可預之由候ツ、其後念々こそくり、しかく音もしいたし候へす候、其弓未しかと候ハ、先々借給候へかした存計候、將又爲弓矢之諸所衆盛させ申へく候、蒲生之事、隣所之事ニ候之間、その一手ニ可盛せ候哉、社參等ニさへ不所好ニ候間、別手ニも盛らせ候するや、内義承候へ、其分別いたすへく候、又栗野へ立候事、何日

加官

請俊安和尚、反切以求切韻定諱之字、記左矣、  
〔圖書頭忠長譜中〕

〔義久公御譜中〕  
〔案文在本田助之丞親長〕

〔案文在加治木來長谷場傳左衛門〕  
御在國之刻、此境之干戈一入火急之條、無沙汰罷過候事、  
于今口惜候、隨而古今集切紙七通被差下候、忝頂戴仕、  
偏以御故実、多年之本望此時成就、尤祝着候、此等之御  
礼可然之様御取合所希候、仍乍輕微「チケンテ有之」紅糸一斤進之候、  
聊表志計候、恐惶謹言、  
〔朱力キ〕  
〔永祿七年〕八月五日  
陸奥守貴久(花押)

不断光院  
閣下

〔義久公御譜中〕  
〔案文在本田助之丞〕

去夏之比、古市宗檜被差下候、御入魂之至畏入候、其以  
後依御、無音、爲使僧花、舜軒進入候、先々豊前表之弓箭御  
和陸之由、其聞得候、尤目出候、仍而日州境之防戰無盡  
期候、此刻以御入魂一途之御調略所希候、巨細彼僧長門  
江申含候、餘者年行可申入之条、不能書載候、

〔朱力キ〕  
〔永祿七年〕九月 日  
〔禮紙ニ〕  
追而見來儘、沈香三斤・段子三端表微志計候、  
〔上書〕  
大友殿へ御書案文 永祿七 九月

〔貴久公御譜中〕

比ニ候哉、承度候、自然栗野への道具もたせ候ハ、弓  
之事もしかとめしをき候へく候事候、恐々、かしこ、  
〔朱力キ〕  
〔永祿七年秋〕七月廿六日  
〔歳心〕  
左衛門大輔殿 義久

忠長 張 此字切  
嶋津又五郎殿

于時永祿七年甲子八月天正日

前總持俊〔安〕老納書之  
〔印アリ〕

初夏之比、最上宗檜御使僧相良方江被差下候、誠々被添

御心候、畏入存候、其後依御無音候、爲使僧花舜軒被罷

出候、可預御取合候、先々豊前表之干戈御和融之由、及

高聞候、尤目出被存候、然者田舎堺江一途御校量之事、

被憑存候、雖然依豊前境御取乱、于今御延引候哉、和平

之上、可爲此切候、隨而相良當方數年申合候、頃者如何

様之被挾心底候欵、對當家被求疵、剩格護之在所へ一ヶ

度被絡候、雖如此候、心遺恨漸調迄候、如當事奸於不正

者、向後者、以伊東同心可取企銚楯事必定候、相良方江

如舊談被仰付、可爲一味之由所仰候、最前如申候、土持

境江御働本望候、自然於事延候者、伊東當方和与之御調

儀、彼是可得御意候、巨細彼僧長門江申達候之条、不能

腐毫候、

〔朱力キ〕  
〔永祿七年〕 九月 日

〔礼紙ニ〕  
追而見來候儘、段子五端御中へ被進候、寔表志計候、

〔上書〕  
大友殿年行中へ 此方老中より

〔北郷家藏〕  
起請文

一於弥永代無別儀可申合事、

一此度一ヶ条承趣之事、

一既肥於難儀者、三之山口可出手事、

若此旨有違犯者、

〔牛庄〕  
奉始梵天帝釋四大天王 六拾餘州大小神祇、別而當國鎮

守霧島六所大權現 正八幡大菩薩 止上大明神 開門正

一位 九所大明神 新田八幡大菩薩 諏訪上下大明神

天滿天神等部類眷屬等御討可蒙者也、仍誓文如件、

永祿七年甲子拾一月十九日 義久(花押)

〔時久〕  
北郷左衛門尉殿

〔上包〕  
起請文 義久

〔此誓文、北郷時久譜中ニ在リ〕

306

〔義久公御譜中〕

〔正文在川上因幡〕

御書之趣致頂戴候迄、如蒙仰、日向國既肥堺目和談之

儀、川井方・岡本方・幸阿以兩三人被仰遣旨、則御返

答申上候之處、於末吉之儀相違之段、御驚之由無御心

元奉存候、

一就此弓箭既肥和融之儀、爲御意見御下向之間、伊東彼

兩陳於引退者、奉任 上意、御公領等之儀、田數以口上申定、御請之儀被申候、城之沙汰少茂不申談事候、一柘山所へ兩御札被下候、御返札河井殿へ進入之處、被披露成候欵、於末吉之儀無相違之由申上候、無御分別之旨承候、猶以不致分別候、

一城之儀居住付、城不入之由、一向不承分候之由數度申上候、此條被聞召分之旨、以幸阿霜月廿七日承候、先々日出候、

一伊東東山殿様御判頂戴之儀、是又於末吉備州作之趣者、東山殿様御判之一巻在、伊東備後守被見之、雖然京都ニモ其疑有、今又當國之沙汰一向無其理之由候、備後守是同心也、伊東守護号之事、更々不入儀也と被仰、若此儀於偽者、八幡御照覽々々と三度被仰、可蒙御罰と地を御打御誓言候、其後川井方被申儀者、今度無事於事成者不申及、伊東背御下知候者、則豊後江備後守被罷登、大友殿江申談、嶋津殿・大友殿御存分之儘可被成候、其時茂飢肥境目之内、御祈所者相違有間敷欵与承候、其御返事大友・嶋津申合、殊 上意爲御奉公、伊東退治之時、御祈所之事尚々無餘儀之由被申候、一度々無事之儀被相調候へ共、從此方破申之由承候、此

方分別者、皆々乍恐自御方被相破候之得心候、一御請之案文拜見仕候、是又飢肥堺目之事、御公領之段無相違候、

一此分にて無事被相破之儀、無勿躰被思食之旨、從此方茂其存分候、今度上使御下着候而、國々御調儀其恐不少、致祝着之處、種々御心詞相替儀、爲何故候哉、國之亂之御取成者、外聞実儀非本意候、以御納得被成治國之御催促候者、向後之可爲御名利候欵、此等之段雖惶入候申上候、每事以御用捨可預御披露候哉、恐惶謹言、

「朱力半」  
永禄七年 霜月廿七日

村田越前守  
經定(花押)

川上左近將監  
久朗(花押)

進上 川井殿

大檀那大梵天王大檀那嶋津藤原朝臣日新 信心施主指宿安藝守貞幸 兒玉佐渡守盛實

永祿七甲子 結緣衆等 小工

右意趣者奉爲天長地久御願圓滿殊者大檀那等御息災安全國土泰平諸人快樂故奉造立旨如件 大勸進大工貞清

十二月二日 結緣衆等 小工

大願主帝釋天王當檀那嶋津藤原朝臣忠長

聖衆天中天

迦陵頻伽聲

△奉造立南瞻州久志浦九玉大明神御宝殿一字

哀愍衆生者

我等令敬礼

「正文在文庫」「義久公御譜中」

今度進藤殿爲御使下向、以官途被下給之由、千秋万歳目

出度候、就ヶ様之御悅、太刀一腰・馬一疋大慶之至候、

從是茂太刀一腰・馬一疋表祝儀計候、我々受領之事、過

分至極候、万吉、恐々謹言、

永祿七年 拾二月十五日 陸奥守貴久(花押)

謹上 (義久) 修理大夫殿

「國史」卷十 大中公 實明公  
七 松齡公

八年乙丑春三月二十四日、島津薩摩守義虎殺長島城主天

草越前守、而取其地、義虎、實久之子也、據島津伊 織系圖、夏五

月朔日、伊東義祐下飢肥新山城、殺守將日置狩野介忠光、

據島津内膳家譜、島津支流系圖、日置忠鑑次子白忠頭、忠 頭養子白忠充 即忠光也、忠鑑見第十三卷永正十二年注、十九日、

三好義繼・松永久通弑征夷大將軍足利義輝、法名圓道號

光源院、義弟南都一乘院門主覺慶奔江州、長髮還俗更名

義昭、據將軍家譜 召募兵衆、將入京師、遣上野大藏入道齋内書、使公及 貫明公盡忠節、復使細川兵部大輔藤孝勸之、冬十月二十八日、藤孝以書告 二公、據大中公舊譜

310

「日新公御譜中」

「正文在國分衆有馬清左衛門」

謹令致言上候、抑改年之御大慶千秋万歳、重疊雖申上事舊候、猶以不可有休期候、珍重幸甚々々、隨而被任修理大夫之由、忝蒙 仰候之条、相定官途候、就此等之祝儀、態捧慶書候、仍御太刀一腰・御馬一疋奉致進上之候、何様永日中御賀瑞倍可申上加候、此旨以、宜預御披露候、佳事、恐惶敬白、

正月十四日

修理大夫義久(花押)

進上 大野駿河守殿(忠憲)

311

「義久公御譜中」

「正文在文庫」

誠今春之御慶千祥万喜重疊、不易令申納候了、抑就御官途之儀、預御使者候、并爲御祝礼御太刀一腰・馬一疋目出度候、何様自是茂万賀、永日中益々可申加候、慶事、

恐惶謹言、

「朱力寺」  
「永祿八年」正月十五日

日新(花押)

謹上 修理大夫殿

御返報

312

「貴久公御譜中」

「正文」 「本マ、」

就醫道之儀、意温齋令下國候、爰元存知之者候條、染筆候、自然之砌者可被加芳言事、可悅入候也、狀如件、

「朱力寺」  
「永祿八年」三月十五日

「龜孝」  
(花押)

鳴津陸奥守殿(貴久)

「上包」  
鳴津陸奥守殿

(花押)

313

永祿八年乙丑

三月二十四日、吉滿善左衛門久張長島にて歿死とあり

五月朔日、日置狩野介忠光周防介忠充とも、同人歿、鉄肥の新山外屋尾を攻る時、三十人歿死

とあり、財部武藏守盛慰永祿三年五月十一日、新山城戦死ともあり、歿考、

314

「日新公御譜中」

「案文有之」

謹以言上、修理大夫受領、又三郎官途之事、以御書御

使節被蒙仰候、誠々到来々忝候之處、結句私之所へ被成

御書下候、前代未聞何以可過之候之哉、不知所謝、名實

其恐不少之至候、仍奉致進上之候、不苦候者、可然様御

取合所仰候、

〔朱力キ〕

〔永祿八年〕四月

〔朱力キ〕〔義輝公江欽〕

御請

315

〔上全〕

〔案文有之〕

御書謹而以令頂戴候畢、隨而修理大夫受領并又三郎官途

之事、忝被仰下候、歡抃之餘不堪報謝之處、別而雖令申

度候、爰許依鉾楯繁務之至、進藤左衛門大夫殿御存知之

條々、不及是非候、將又乍輕微白糸三斤、致進上之候、此旨

宜被達貴聞候、誠恐誠惶敬白、

四月

〔朱力キ〕  
御判

〔長治〕  
進藤左衛門大夫殿

316

〔庄内平治記〕

一同八年二月七日、伊東板敷田ニ野伏を出し、本城の兵

卒を十三人打取、同十九日、敵新山外屋の尾ニ陣取て、

同三月廿四日、楠原迄働入、

同五月朔日、豊州の軍は新山外屋の尾を責破、敵勢廿

八人討取、生捕四十人、物具七百取てけり、味方ニ財

部武藏介盛慰を初三十人打死し、手負ハ四百八十人也、

317

〔頼繼私覚〕

一永祿八年乙丑二月五日、爲本田刑部少輔殿御使者、霧

島權現江御鬮申候、依御鬮之子細、曾於郡之事、御神

領可□々之由、被仰出之御意趣者、密儀々□法印

頼繼・本田刑部少輔殿兩人之外存間敷候、御屋形様

上意之趣、爲國家彼是殊勝第一□候、

〔花林寺四世住持〕

頼繼判

318

一乙丑 永祿八年五月十九日、義照公房様御生害、松永

奔走、隅州吉田若宮乘神名帳、任正一位、檀那貴久、

319

〔正文在垂水邑主〕

大隅國帖佐郷之事、堅固可致知行之狀如件、

永祿八年乙丑八月廿四日 修理大夫義久御判



『大村市兵衛重頼古戦書付』云

「右馬頭以久、初幸久、征久トアリ」  
又四郎殿

320

「右馬頭以久譜中如左」

永祿八年乙丑八月二十四日、太守義久主以隅州帖佐郷

賜于幸久、于時又四郎

321

「本田氏藏」  
寫

父親辰所領之事、弟宗左衛門尉依逆續、恐天道某一町ニ  
一反宛、爲初穂水田四反半被遺置候、某子孫至末代雖可  
格護候、情回遠案者、此水田故ニ親類之中可爲不和事決  
定ニ候、所領之事、所詮我等一代一期之夕迄可致領主也、  
一世後者、任拙書可有知行候、爲證護染私筆訖、伊集院下  
神殿之内平原之門之内一町田ともより三番目三反、吉田  
宮之裏神之藪之門之内道下一反半、以上四反半、右如件、

永祿八年乙丑九月三日

本田山城守  
親鑑(花押)

同名次郎五郎殿

御宿所

323

「國史」  
卷十 大中公 實明公  
七 松齡公

「永祿八年乙丑」  
一十月廿六日日州落城ス、 惟新公御手負給ふ事、

九年丙辰春二月、公祝髮道號曰伯圍齋、先是 公傳守

護職於 實明公、至是祝髮入道、以資先將軍之福云、  
大據

中公善譜、原書、公值將軍小祥祝髮入道、按此年五月十九日、實爲將軍  
小祥禪辰、而公以二月祝髮者、用到彼岸日耳、到彼岸、出佛書棚殿經  
既行布施、然後越生死此岸、到菩提彼岸、心經注、彼岸者西土俗以般若  
諸佛地、謂之彼岸、涅槃經、彼岸者喻如來也、書言故事、西廬用乘般若  
航、清涼經師云、大般若者苦海之慈航、香齋之巨綱、注云、航船也、般  
若能度化於人若海中之船、度人登於彼岸、四達之路曰衢、俗云十字路、  
是也、般若又如巨綱、以照人昏暗之路也、又王「頭陀寺碑文、彼岸者、  
引之于有、則高謝四流、推之于無、則登弘六度、北史張普惠傳、道由化  
深、故諸漏可盡、法隨禮積、故彼岸可登、徐陵雙林寺碑、濟是沈舟、能  
升彼岸、歡頌詩、問津窺彼岸、迷路得眞車、白居易題韋開州經藏詩、聞  
君登彼岸、捨復復何如、曆家春秋仲月、各置彼岸日、和漢三才圖會引谷  
響集云、春秋彼岸經典不見、支那無說、本邦小說中往往有說、多附會之  
實、如彼岸功德成就經、偽作經文、自敘佛祖、今按彼岸日、蓋起自浮屠  
氏、而曆家採之爾、未必深考可也、按公老 實明公嗣、舊譜不書其年、  
大中公永祿十三年春、遺疏球王書曰、寡人前傳守護職於修理大夫、亦不  
言其事在何年、樺山玄佐自記、實明公嗣、大中公祝髮於今年二月、則前此傳守護職於實明公明矣、故以此年爲十  
五世編年之終、非以大中公老 實明公嗣、斷爲此年事也、 公娶於  
入來院彈正忠重聰之女、四男、長 實明公、次 松齡公、次  
歲久、皆入來院氏之出、次家□、 實明公生於天文二年  
癸巳、是歲年三十四、據島津 歲久稱左衛門督、是爲日置  
領主島津左衛門祖、家□稱中務太輔、是爲永吉領主島津  
主殿祖、據島津 略系圖、 夏六月十六日、肝付氏軍攻岩川城、獲  
首二十六級、據島津支流系圖北郷氏譜、按北郷忠相取岩川新  
城、見上卷天文六年、此云岩川城、疑即新城、 秋九

月九日、霧島發火延燒、人多焚死、據湯地嘉左衛門家藏文書、霧島嶽跨日隅二州、

東風高原郷、伊東義祐築壘三山、將攻飯野、冬十月十一日、

貫明公遣肝付兼盛書曰、兵庫頭將有事於三山、請君引兵

會之、據貫明公舊譜、肝付典膳系圖、公遣 貫明公爲大將、松齡公・左

衛門督 又六郎改稱 左衛門督 歳久爲副將擊伊東氏、二十六日、攻三

山城、松齡公被創病甚、不克而還、據大中公・貫明公・松齡公舊譜、松齡公軍記、

三山今曰小林、小林多故城壘、

324 「雜抄」

永祿九年正月十六日

第十

賦何船連歌

織はゆる世やはた花のから錦

糸くりいたす春雨の空

石はしる瀧は氷のとけ初て

空も長閑に渡る朝かせ

行やられて月もいさよふかりの聲

はね打かへす秋の夜からす

初しもの薄霧さむミ更終て

木すえうつろふ里のをちこち

日新

忠金

昌宗

義久

忠元

珠玄

季久

忠知

なかれ出る水みとりなる山本に

たゝをのつから暮の涼しさ

ともすれハ風をもよほす雲浮て

いかならましや人のかねこと

待もうしもし忘るかとひ見はや

こゝろかハリハ夜のまにもあり

事しけき昨日や去年となりぬらん

霞をくむそ里のたしひ「本マ、」

小松引さいの若菜を摘もちて

雪にぬれく野路のかへるさ

ふき送る風ハ袂にむすほくれ

日もいりあひのかねのをちかた

出ぬへき月や尾上に籠るらん

しけミかくれの山のさをしか

かなしひをふかむるさとの夕霧に

あたりたにもとなかめやる空

ふきもこよ思ふ其方の松の風

すきしやいつち袖のむめか香

手枕は夢かと明春の夜に

たゝくかすむ峯の横雲

武久

意外

忠辰

久朗

友治

久張

親治

國眞

經威

實親

玉進

昌宗

義久

忠元

珠玄

季久

忠知

武久

意外

忠辰

別行かりかね遠し出て見む

船路やすらぶうらのつれく

興つなミ立よりきおふ雨の日に

すミかとたれかかへる芦の屋

ならはせハさのミつらさやなかるらん

餘所目忍ふに夜かれある中

ことはりをしらてかこつハはりなしや

親のゆるさぬこひのあハれさ

思ふ事ひたや籠りに送りきて

打いてかたき世とそなりぬる

我なから身のつたなきのかへりみに

のほるくらあもよしやなにせむ

いりそむる此山かけの花の色

門よりゆかしふる寺の春

ともし火ハ霞の内にほのかにて

たれか月まつよひふくるころ

すさましく浪寄海士の一むらに

しほるく袖や秋もしるらん

おもひかねころも今ハた打侘て

旅にと出しつて聞かまほし

國眞

友治

久朗

經威

久張

親治

忠元

義久

季久

珠玄

武久

忠辰

經威

忠元

義久

友治

珠玄

國眞

忠辰

久張

ゆきかひも関屋の道のしけき日に

をくれさきたち立る小車

花見にハ誰も残らすいきなひて

おりてかへるやつし山ふき

春ハたくころ心はなくさミに

外かをわすれてまなふかしこさ

打籠り出るかたなき窓の内

人のかひの鳥や悲しき

ゆふつけの聲になくく別きて

おもへはかたミ袖のうつり香

たちはなの花ハちり行夕風に

打はらひつる雪の面かけ

又いつる越「が歌」のしら山越てまし

あつまちとをく身ハまとひつゝ

もとめえぬ行ゑもつらしすミ所

をしへしやとり月にとハはや

露なからあたしことの葉頼ミきて

なにを秋とてかはる人かも

むしならハ聲に立てもうらミまし

えにしありとや浮ふおしとり

忠元

昌宗

義久

意外

親治

昌宗

珠玄

忠元

國眞

義久

忠知

武久

珠玄

經威

忠元

季久

友治

忠辰

珠玄

意外

水までも法のなかれそ難波かた  
 ね覺うるほす鐘なと給そ  
 あかつきをおもへハ春の名残りにて  
 けふの三月のなとくハ、らぬ  
 山さくらをそぎハ心ありやせむ  
 一木に來なく干とりもしとり  
 そことなくあさたち行はひろき野に  
 もとむるミツハかけかすかなり  
 袖にせくなミタも月のうつろひて  
 國へもいらぬ夜ハそ身にしむ  
 萩の葉のそよともとふかとはかりに  
 なくさめ草も種はこゝろよ  
 よむ歌にしハしやうきものふるらん  
 しけるむしろもおなしいらふき  
 身はかくていかて年月送らまし  
 もろこしまてとおもふ船路  
 かすゝの手向をなすもことほりに  
 とたへあらしとしきミつむ人  
 折たくもしハし□<sup>(5)</sup>かりの薄けふり  
 すミつかむやハ山の下庵

忠元 忠元  
 珠玄 珠玄  
 國眞 國眞  
 義久 義久  
 季久 季久  
 久張 久張  
 忠辰 忠辰  
 忠知 忠知  
 忠元 忠元  
 昌宗 昌宗  
 珠玄 珠玄  
 經威 經威  
 忠元 忠元  
 親治 親治  
 武久 武久  
 友治 友治  
 意外 意外  
 季久 季久  
 國眞 國眞

小夜時雨ふることをのミよすかにて  
 かたれはかたりあかす友とち  
 秋風のしらへことさらすむ月に  
 かたはらさひしきりくすなく  
 夕霜にをきや替ると露寒ミ  
 ねてのあさけをおきて行道  
 かりそめに見しもおもひハ浅からて  
 花もうつろふ人  
 つくくくと日もなか雨の打そまき  
 むかふみきりの春のしつけさ  
 池水やさくなミ寄る風立て  
 岩ほもやまもうこきなき陰  
 日新一句 友治六 忠金一 久張四 昌宗六  
 親治四 義久九句 國眞六 忠元十一 經威九  
 珠玄十二 實親一 季久七 玉進一 忠知六  
 武久六 意外六 忠辰六 久朗二

325 『入來家臣田中家藏』

坪付

大隅國帖佐郷

餅田名

一 下富田門

一反 新入田

一反十ほり町 深田

廿ほり町 しんにうてん

一反卅 馬渡利

二反十 たうてん

二反 ゆるきむた

以上六反冊此外

一反卅ほり町

うき免 中河原田

一反水口之内 下今石

かみの門之内 多ほしかた

一反 深見名内門之内 舟津大そのゝ内 竹の脇

以上一町冊

永祿九年貳月吉日

【以久家老町田因幡守カ】

忠秀

久親

田中越中守殿

326 「貴久公御譜中」

永祿九年丙寅、故 將軍家源義輝公相當一周忌矣、由是待二月彼岸、貴久剃髮、而稱伯圍齋也、

327 「樺山善久入道玄佐譜中」

先是、永祿九年丙寅二月彼岸、因 故將軍家一周忌、所以 貴久主落飾、號伯圍齋、翌年十一月云々、「末ニアリ」

328 「庄内平治記」

一同九年三月廿二日、伊東目井ニ陣を取、同四月廿日、鉄肥宮の浦の勢共と伊東方の軍兵を海上にて相戦、廿九人か首を取、生捕敵へ九人なり、切捨以上六十三人、敵船五艘を切取り、

329 『全』

一同五月十八日、北郷左衛門尉時久初て松山ニ軍を出す、北郷紀伊守忠徳首途の日を定む、北郷左京進軍配す、河野筑前独鉦の矢を射るル、税所周防介五鉦の矢を射ル、箭か持ハ勝藏院是をつとむ、首途の酌ハ河野伊豫也、時久太刀一腰を末吉の諏訪ニ寄進し、長刀一振を

住吉へ奉納し、武運を祈られけるとかや、同月廿四日、福島への伏を出して、伊東か勢を十一人打取、

同六月十六日、肝付か勢共岩川ニ打出たり、時久兼て置る処の城兵防ぎ戦て、敵の首をゑたる事二十六級とそ聞へし、味方ニ久木崎丹後を初十余輩打死す、同七月二日、時久鉄肥ニ出張す、同十七日、肝付か軍勢福島之城ニ寄來る、城中の勢防ぎ戦ひ廿五人の首を取、

330 一丙寅 永祿九年二月彼岸、先公房様當一周忌、貴久落

髮号伯圍齋、三月、福昌開山眞前作花ニ、荷開クコト  
敷枝、花ハ櫻也、十月廿六日、自守護方三山ニ衆使、  
城悉焼拂、城ハ不落、

331 「北郷時久譜中」

永祿九年六月十六日、肝屬氏出兵於岩川、時久所置之城  
兵防戦、得首二十六級、味方死者久木崎丹後以下數十人、

332 永祿九年丙寅

三月五日、篠河左衛門兵衛内之浦ニ於て戦死、種子島氏臣なり、  
四月二十七日、義輪狩野介重親浦生にて戦死とあり、

六月十六日、重信加藤左衛門家弘北郷家臣、隅州岩淵に戦て死之、久木  
崎丹後同日、岩川ニ戦て死之、

333 「貴久公御譜中」

龍盛院領

坪付

浮免

田毛名之内

冊 松原湊

以上

永祿九年丙寅五月吉日

村田越前守 經定

伊集院右衛門大夫 忠金

川上左近將監 久朗

334 「正文有之」「義弘公御譜中ニ在リ」

猶々藥之儀、委敷段伴介申聞せ候、

就働之儀、預書狀候、殊ニ日取之事巨細得其心候、必々可爲勝利候、仍肝付彈正忠則可申付候、次藥種之事承候、乍些少令進入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔永祿九年〕六月十日

義久(花押)

〔義弘〕  
兵庫頭殿

〔上包〕  
兵庫頭殿

義久

〔此御書、御文庫四拾四番箱中ニ在リ〕

335

〔御文庫四拾八番箱中〕〔義弘公御譜中ニ在リ〕

先刻者、到三之山堺被成働候、然處仕役萬々勝利之至、

千秋万歳目出度存計候、先々以書面祝儀申入候、兼又其表當時無愀變候哉、事余猶期後喜候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔永祿九年〕六月廿一日

義久(花押)

〔義弘〕  
兵庫頭殿

336

〔御文庫廿二番箱一卷中〕〔日新公御譜中正文在高岡衆本田九郎右衛門親豊トアリ〕

先年於所々度々忠節、到今聊無忘却候、仍伊作入來名之内一ヶ所、原藪并水田一町・島地壹町、誠補微志計也、永代不可有吳儀候、此等之趣、常之忠人不可及見聞候、爲後日之鑑札如件、

永祿九年

七月二日

日新(花押)

本田笑閑

〔御譜ニハ無シ〕  
松閑ひまこ

本田九郎右衛門殿

〔上包〕  
本田笑閑

日新

337

〔本文書ハ三三九号文書ト同文ニツキ省略セ〕

〔此御案文、御文庫三番箱一卷中ニアリ〕

〔川上經久譜中ニ在リ、神名ヲノセタリ〕

338

〔義久公御譜中〕

〔御納戸方ヨリ出〕

詠月前松和歌

修理太夫義久

〔上書〕  
兵庫頭殿

義久

くもりなき月のひかりに立ならふかすさたかなるみねの  
松かえ

秋日同詠月前松和歌

左近將監久朗

なかめつゝふけ行までの月影にやゝすみわたる軒のまつ

風

秋日同詠月前松和歌

忠金

住の江や松ふく風も浪のをともひとつにすめるあきの夜  
の月

秋日同詠月前松和歌

刑部丞忠元

うら浪の夜は二木に鳴尾なる松をてらせる月の光に

秋日同詠月前松和歌

右衛門尉經充

一もとの松にうら風音つれて月はえわたる志賀のから崎

詠月前松和歌

沙弥意外

あらしふく尾上の松にやとりてやくもらぬ月の夜をてら

すらむ

秋日同詠月前松和歌

前河内守平重持

ミねたかみいく代の秋になれぬらん松の葉わけの月の夕  
かけ

秋日同詠月前松和歌

右衛門兵衛尉久治

吹からにそらも心もすみはてゝ月にはくもゝ軒の松かせ

詠月前松和歌

玄傳

ひとむらの松のみえるをしらせけりひるはかりなる月の  
盛は

秋日同詠月前松和歌

備前守久秀

宵の間はしほくもりせし月かけをふけてすませるうらの

松かせ

詠月前松和歌

其阿

うらなみのよるくことに月すめはあらしの聲もたかさ

このまつ

詠月前松和歌



沙弥玄佐

てる月や見る人からに常よりもひかりそへたる庭の玉まつ

詠月前松倭歌

珠玄

夜もすからさやけき月のともし火に浪やかくらむ墨のえの松

秋日同詠月前松和歌

散位書信

宵の間はさはるとみえてふけ登る月さやかなる山まつのかけ

秋日同詠月前松和歌

前丹後守友治

鳥羽玉の夜わたる月や山松の葉分のかせにひかり添らむ

秋日同詠月前松和歌

雅樂助經威

つれなさのこゝろくらへる松の葉にやとりなれたるあり  
明のつき

秋日同詠月前松和歌

實親

こゝろなき山さと人もみつゝきけ月をやとせるミねの松

かせ

秋日同詠月前松和歌

左衛門尉長治

かけたかき月をやとして砌なる松も千とせのいろやそふ

覽

〔朱ニテ〕  
〔永祿八年之秋〕

339

〔義久公御譜中〕

〔正文〕「本マ、」

起請文

一當家一流射御之趣、令相傳之處、他言有間敷事、

若偽あらは、

〔在牛王〕  
上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本國中大小神祇

冥道、別而當處諸神等之可蒙御射者也、

永祿九年丙寅  
八月六日

義久(花押)

川上十郎左衛門尉殿  
(經久)

340

〔左衛門尉義久譜中〕

其よりへさいく音信あつかり候、是よりふさた申不及

候、あまりかろく敷候へ共、わたミゆひまいらせ候、  
かさねて、かしこ、

〔朱カキ〕  
「永祿九年」閏八月十八日

左衛門佐殿

伯固

341 「御文庫二番箱一軸中」

從は無音之刻、先日者預御使書候、祝着之至候、仍於三  
之山働之儀承候、尤肝要候、吉日示給候者、軍衆可致馳  
走候、方々御調儀此時候、旁西光寺可相達候、可得御意  
候、恐々謹言、

〔義久公御譜中永祿九年トアリ〕  
九月拾六日

嶋津殿

御宿所

頼房(花押)

相良

嶋津殿

御宿所

頼房

342

「義久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋」

到三之山、兵庫頭急度被思立事候、他行なと無之様、然  
与被待居候而、彼方之一左右次第ニ人衆を相催、早々か

けつゝかれ候やうニ頼入候、從眞幸直ニ可有注進候、我

等之事へ定而一兩日も可事延候間、其之事へ夜白をいわ

すつゝ候て、兵庫頭江諸篇談合候て、時宜よろしきや

うニ可爲專一候、彼儀者近日のやうニ相聞候、涯分人衆

をもよをし候て、一左右を可被待事、油断有ましく候、

く、恐々、かしこ、

〔朱カキ〕  
「永祿九年」拾月十一日

義久(花押)

「上書」(兼盛)  
肝付彈正忠殿

義久

343

「日新公御譜中」

「日新記ニ有之」

永祿九年丙寅孟冬、孫子忠平・歳久爲大將、領軍衆攻三

山城、雖然城壁堅固、不得陷之、敵慈戰死多矣、代萬靈

唱正覺、

たれにかも誰そと問れん誰しかも

誰かはひとりたれかのこらん

344

「貴久公御譜中」

345

〔義弘公御譜中〕

伊東大膳大夫義祐築要害於三山、而聞欲侵兵庫頭忠平居城飯野地之廻計策、則懼傍徨不逐凶徒有後患、以故永祿九年十月廿六日、嫡子修理大夫義久爲大將、二男兵庫頭忠平・三男左衛門督歲久爲副將、率大軍到其地、攻責孔急、于時茂山源左衛門尉・長谷場長門守・同彌四郎・愛德十郎・濱田右京亮・長野助七郎・塚田太郎左衛門尉・同太郎五郎・面高眞連房賴俊・上床源兵衛尉・田口仲俊房・重信平左衛門尉・伊地知新三郎盡筋力挑戰者也、此日忠平臨其戰場、會強敵爲力戰之際、被傷痛惱甚重、由是騎步周章驚、是以不陷要害、徒以退散也、阿多中務丞・末弘又左衛門尉・本田治部少輔・同姓與五郎・椎原某・阿多源左衛門尉・中山源三等戰死矣、今日不陷彼城者、忠平之憤惜莫大於此也、

〔義久公御譜中同意ナルヲ以略ス〕

伊東大膳大夫義祐三位入道據三山城、而有欲侵忠平居城飯野之計策、達之於 太守伯圀齋、齋曰、懼速不逐凶徒必有後患矣、由是永祿九年丙寅十月廿六日、兄 修理大夫義久主爲大將、忠平及弟左衛門尉歲久爲副將攻三山城、

346

〔實久公御譜中〕

〔正文有之〕

諸士卒盡筋力、忠平亦臨其戰場、會強敵被深傷、痛惱甚以厚矣、以故諸將士卒驚動不陷其城退散者、所以憤惜也、委曲以記于伯圀齋譜中、故略于此矣、

今度公儀御樣躰、先代未聞無是非次第候、就其一乘院殿到甲賀和田被成御退座、近國出勢之段被仰出、御請候間、急度可被成御入洛之由候、此度可被抽忠功旨、被成 御內書、爲御使被差下上野大藏入道候、猶得其意可申入候由被仰出候、可得御意候、恐惶謹言、

〔朱力字〕

〔朱力字〕

兵部太輔藤孝(花押)

謹上

嶋津陸奥守殿  
(實久)  
 同修理大夫殿  
(義久)

347

〔殉國名載中抄〕

永祿九年丙寅

十月二十六日、阿多中務允久宗、松輪公將として伊東氏の三山城を襲へる時、菱刈より謀を漏し公の師利あらず、奮戦して死之、其列甚多し、末弘又左衛門尉・本田治部少輔或少輔作・本田與五郎・鮫島又左衛門宗明双月の子、椎原助十左衛門

郎或作又六、上床助六左衛門國成十二年、中山源三郎・指宿勸  
 解由兵衛忠次丹後守次子、兵衛爲左衛、或阿多源左衛門尉忠繼、加世田  
 二十、内山隼人或十郎左衛門ともあり、箕勾佐渡助主、堀一彌  
 六、中二見ゆれば、此に置て歿考、新保伊豆・  
 太・野元左右衛門以下の交名多くは三山戦亡の  
 有川主馬木崎原戦死の列ニ主馬允貞、窪田甚五郎・高木權  
繁あり、同人歿、後考を俟  
 左衛門・丸田彌七左衛門・中馬後藤兵衛・樺山圖書守  
 ・野田源左衛門・大重四郎兵衛・逆瀬川八左衛門・鎌  
 田吉次或作鎌田、鬼塚助七郎・鮫島備後或作、逆瀬川六  
 左衛門・押領司右京・池田安房・市成隼人・荻野帶刀  
 ・室田雅樂・芦谷大藏兵衛・吐師與左衛門・小倉六郎  
 左衛門・常波三郎四郎・田尻荒五郎・肥後因幡守・秋  
 丸新三郎・新納江州中間一人・村岡勘解由左衛門・大  
 迫四郎兵衛・堀小左衛門仕日新公、於郡、長山清左衛門・  
 柳田藤七郎・重信平次郎・宇都弥七左衛門・丸山七郎  
 左衛門・野本清兵衛・野本彌七郎・東條助左衛門・古  
 枝與左衛門・岩切孫四郎・篠原九郎・弟子丸源次郎・  
 原大膳助・兒島源左衛門・町田相左衛門・積松九郎左  
 衛門・益崎隼人・海江田又十郎・敷根越中・有村次郎  
 ・久木田助三郎・竹内隠岐・上田後左衛門・原田呈栖  
 入道・西郷八郎次郎・大窪藤六左衛門・宮原治部左衛

〔養久公譜中〕

門・宮原助五郎・谷口孫左衛門・馬形八郎左衛門・同  
 助八郎・大迫九郎・安藤源太左衛門・小倉與七・丸野  
 主馬平田彌、猿渡民部左衛門・遠矢金兵衛・遠矢源三郎  
中内、伊作宗次郎・鎌田七郎・海江田九郎三郎・相徳善左  
 衛門・同十郎・窪兵部・前田又七・松本新三郎・垂野  
 源太左衛門・桑波田主馬助・境田仲左衛門・饗輪六郎  
 左衛門・久木田十郎左衛門・有馬右衛門・瀬戸口又七  
 郎・淵脇助太郎・國分平四郎・鎌田刑部左衛門・山本  
 清兵衛・同平五・長瀬三郎五郎・村田藤左衛門中間一人  
 伊牟田又左衛門・園田又次郎・三原藤兵衛・梅北土佐  
 守・成尾助七郎・左藤又左衛門・前田七郎左衛門・丈  
 六寺・安樂助右衛門・津田源左衛門・野邊治部左衛  
 門・鎌田二郎四郎・池田十郎二郎・有田隼人・名越助  
 左衛門・伊作又作九郎・山内藤田左衛門・朝岳兵部少  
 輔・鮫島四郎左衛門・安樂大炊助・五代孫太郎・川島  
 勘解由・村田雅樂十月廿六日、梶原彌六兵衛・椎原小三  
 郎・福嶋助八郎・鹿島彌四郎・中馬新兵衛・肥後助七  
淨福寺戦亡  
牌二載ス

「義久公御譜中」

「正文在岩切」右衛門信秀」

一伊東大膳大夫義祐築於三山居於彼城、而通謀於相良氏、欲兵庫頭忠平之侵飯野城、太守聞其告曰、速不逐凶徒則如後患何、是以永祿九年丙寅十月廿六日、義久爲大將、兵庫頭忠平・左衛門督歲久爲副將、率數萬騎向其地、雖有勝利、忠平會強敵爲力戰之際、被深傷痛惱甚重、由是不陷彼城、徒以退去、可謂不幸也、

猶々引導之書・行之書二卷不見出候、菟角相揃候之間被借候者、可爲祝着候、

從 伯圍様團子書御用之由蒙仰候、此方所持之書二卷不見出候、其江所持之書被借候之者、可爲祝着候、自然私無所持者、一瓢様之御行之書之通 大殿様ニ御嗜候之者、被申上候而、被持せ候様、可爲肝要候事候、かしこ、  
「朱カキ」  
「永祿九年」霜月八日 義久(花押)

可樂 進之候

左衛門尉歲久 駿谷ロゴ二 重城戸迄 小林三の山御攻ニ戰功、伊東要書ヲ三山ニ

構へて、忠平公御居城飯野之地を侵さんとするの策アリ、故攻玉ふ、  
市来住人一番合戦

茂山源左衛門尉

箕句舎人助

「○阿多中務丞戰死」

「○末弘又左衛門尉戰死」

○間世田刑部左衛門尉「耳川戰死」

○木脇刑部左衛門尉「祐昌花山戰死」

「○本田治部少輔親次戰死」

「○本田與五郎戰死」

市来住人 田尻荒兵衛尉

中山又右衛門

「○鮫島又左衛門戰死」

「○椎原助十郎戰死」

長谷場長門守

長谷場弥四郎「純辰後筑後守」

「○指宿勘解由左衛門忠次戰死」

「○阿多源左衛門尉忠繼戰死」

愛徳十郎

濱田右京亮

「○中山源三」

「○内山隼人」

長野助七郎

塚田太郎左衛門尉

「○箕句作太郎主從戰死」

「○堀一弥太」

塚田太郎五郎

面高眞連坊

○上床源「イ左」六兵衛尉「國成戰死」

「濱田民部左衛門堀ニ打コマル」  
田口仲俊坊

重信平左衛門尉

伊地知新三郎

永祿九年十月廿六日、御大將

義久主「花立」 忠平主「大豆別府」

口より二 之丸迄、

「樺山玄佐日記」

一貴久様飯野へ御發足、三之山御衆遣之折、菱刈天眼入道被走參、先く御歸鞍ニ而、飢肥口・眞幸口御番無寸暇、義久様御相續之以後、貴久様御法躰伯固と奉申、

かゝりける處に、兼親伯父左兵衛尉と云者求摩に云合、

求摩衆を吉松之人躰なれば、彼城へ引入、兼親を伊東

・相良同前に取立、屋形御人衆を可討果相企之由無其

隠、此事依風聞、左兵衛尉落失、北原八郎左衛門尉・

白坂与一左衛門尉と兼親不用成御内之者眞幸直之御知

行なり、兼親も鹿兒島へ被召越、其後求摩を在申旨、

一涯栗野迄玄佐召列雖越、猶雜説依、兼親者内端に号

北原殿被召移、飯野へハ義久様御舎弟又四郎殿、今兵

庫頭殿と奉申御賜、其後三之山へ數度御働之砌、菱刈

三之山へ此由注進す、然間御使被成御存分、於彼城

屋形御人衆多と討死す云々、  
「永祿九年十月廿六日ノコト也」

(本文書ハ三四三号文書ト同文ニツキ省略セ)

「日新公御譜中」

「日新記ニ有之」

菱刈弓箭之時、

松かえに花をかすかのふちのゑん

大口きてもまひあそふらん

354 『長谷場越前日記』

一飯野者、伊東・相良・菱刈方の依爲境目、御太將軍は

兵庫頭義弘様をわします、然者御老中ニ大名衆在番を

被成處也、伊東・相良者同意して、於飯野表者數ヶ度

の絡き仕る、其憚り不浅、御念之矢を小林にそ被遊、

比者永祿九年十月十五日ニ御出勢を被成けり、花立口

ニ者、御太將軍修理太夫義久様之御手勢五萬騎ニ而

被攻処ニ、大豆マメの別府口ヒツクに者、御太將軍兵庫頭義弘様

の御手勢三萬餘騎にて二の丸迄攻破り玉へば、寢谷口

の御太將軍ニハ、左衛門督年久様二萬余騎を卒して二

重城戸に攻入せ玉へハ、眞先手の兵物詰入て、でんど

うに合戦す、太刀始おば市來衆ニ茂山源三左衛門尉仕

る、押並て間瀬田刑部左衛門尉・田尻荒兵衛尉・長谷

場長門守・同弥四郎同心にて合戦す、愛徳十郎・濱田

右京亮・長野助七郎・塚田太郎左衛門尉・同太郎五郎

・眞連坊同心ニ而、二番に合戦を被致、相續く兵もの

上床源六兵衛尉・田口仲俊坊・重信平左衛門尉・伊地知新三郎同心にて合戦す、爰ニ而も、折目の合戦ハ間瀬田刑部仕る、無比類手柄也、然者於諸口手負戦死衆重りて、鹿兒嶋衆を始として、阿多中務丞・末弘又左衛門尉・本田治部少輔・同名與五郎・椎原名字も戦死也、加世田衆ニ阿多源左衛門尉・中山源三戦死也、金吾様の御内衆ニ内山名字も越度也、此外在る所ニも一命を捨て御奉公衆有之といへ共、不知は愚筆ニ不及書残者也、扱又萬方の御兵儀を被致、繰退にと御下知を被成折節ニ、續衆城主取合ひてつけ勢をせし程に、御方の兵物、爰やかしこに伏勢をさせせつ、敵余多被討せ御競ひニ成けれハ、伊東衆ハ着き留りける程ニ、諸勢ハ飯野へ打歸リ、翌日<sub>ぶ</sub>在る所ニ手負衆ハ被歸さ、御評定事終り、御大將様鹿兒嶋へ御歸陣を被成者、諸軍兵も御供を致て打歸リ、喜事ハ不淺、懸りける處ニ、菱刈方の内存者如何様ニ有やらん、横河之者共が町口ニ出合て、軍衆と手負を日記ニ付る振舞者野心人とそ見得にける、天野ニ當りてや、悪黨ニ與同して邪氣を構る討也、就夫諸大名諸侍訴訟を被申上、彼横河と申者忝も可存、貴久様・義久様・義弘様・年久

355

様・家久様の御甲冑を被召つゝ、被攻落し処也、是を拜領仕り、其上度々の憚を御赦免有し御恩賞、報ても〳〵難謝処ニ、只今補ふ計にて御恩を不知奴原を可有御成敗と、支て言上を被致、主將様者聞召、可然之由堅固ニ被仰出處也、

## 『箕輪伊賀自記』

一三ツノ山小林ノ城ニハ伊東勢ヲ差籠メ可防戦ノ用意アリ、飯野ハ尤大事ノ依爲堺目、兵庫頭忠平御座ス、去ハ諸郡司大名皆々在番ヲ被勤、伊東・相良同意シテ飯野表へ數ケ度ノ略(略カ)ヲナス、兵庫頭彼小林ノ城ヲ攻崩シ、伊東カ勢ヲ不追拂ハ、遂ニ事ノ煩ト成ヘシ、早速追伏アルヘシト申玉ヘハ、太守尤可然トテ、隅薩ノ軍兵如眞幸發向ス、仍永祿九年十月十五日ニ打立テ眞幸院ニ着ヌ、同廿六日、軍勢ヲ打出サル、花立口ニハ太守義久其勢ニ萬余騎、大豆別府口ニハ兵庫頭忠平其勢一萬五千余騎、寢谷口ヘハ左衛門尉歳久一萬五千余騎、兵庫頭手ハ二の丸迄攻入、金吾ノ手は二重城戸へ詰入テ散々ニ相戦フ、隅薩ノ軍兵我モ〳〵切登ラントス、一番合戦市來ノ住人茂山源左衛門ソシタリケル、玉頭

口ノ垂ヲ箕匂舎人・同佐土助・木脇刑部左衛門・中山又右衛門取詰入切崩ケルニ、箕匂佐土助主從ソコニテ討死ス、切放退ケルニソ、軍兵輒ク二重木戸迄詰入ケル、市來ノ住人田尻荒兵衛ト云者アリ、大力成男ニテ武勇モ人ニ知ラレタリ、六尺余ノ太刀ヲニテ垂ニ詰入散々ニ相戦ヒ、鎧ヲ鏑ニツキ貫キ、鎧ノ金ヤマトリケシ、鎧曲リテ引程ニ、太刀ヲ敵ニ奪ハレテ、大口關ノ荒兵衛一期ノ不覺ヲカキヌルトテソ退ケル、連々荒兵衛ト武勇ヲ勵ス人々ハ、目ヒキ鼻ヒキ笑ヒケリ、間世田刑部左衛門・長谷場長門守・愛徳十郎・濱田右京亮・長野助七郎・塚田太郎左衛門・面高眞連坊・上床源六兵衛・田口仲春坊・重信平左衛門・伊地知新三郎殊成軍セラレケリ、然ハ兩口ノ手負死人其數ヲ不知也、鹿兒島衆ヲ始トシテ、阿多中務丞・末弘又左衛門尉・本田治部少輔・同名與五郎・椎原助十郎、加世田ノ住人阿多源左衛門・中山源三、金吾ノ御内ニ内山隼人打死ス、其外在々所々ニテ輕一命、合戰軍勞戰死の人々不可勝計、防ぎ戰ふ事時刻移る程に、已ニ可攻傾処ニ、忠平手を負給ヘハ、士卒驚き引退く、忠平も残多く思ヒ玉ヘトモ、先此度は、軍士も疲れ手負も多けれハ、

357

御立願文 頼繼私覚書

一 永祿九年丙寅拾月十九日午、從 御屋形様爲御使者伊集院下野守、高原所領霧嶋六所大權現江可有御寄進之通御祈念被仰付候、高原事自神代權現御神地之様ニ申候、然者使者大綱之子細ニ候間、爲證跡爲持太刀、座主被渡置候、頼繼以校量有數日返進候、彼之使者冠嶽任和光院候、頼繼弟子之事候、爲後日書付置候、

356

『大村重頼古戦書附云』  
〔永祿九年丙寅〕

御開陣被成、重而御攻有へしと、義久被仰出ハ、繰引ニ次第ノ退れける、城中よりは是を見てつけ軍せよとて勢を出し附送る、慈之兵此やかしこに伏せ置て敵數打取る、其より敵は付止め、去程に諸勢飯野へ引歸、其翌日ヨリ手負トモヲ在々所々ニ歸さるゝ、御評定事畢、太守鹿兒島へ御歸鞍アレハ、諸軍皆在々所々へ歸ケル、

一 十月十五日、義久公小林之城ニ被發向五万余騎也、花立口御陣也、義弘公三万余キ大豆別府口ヨリ二ノ丸ニ御責入御一戰、雖然伊東見次勢來御開陣也、



359 詠永祿九年於三山打死、敵慈之萬靈成道正覺六字、

日新

358 「貴久公御譜中ニ在リ」

御神慮大綱ニ存候間、老躰之事情へ者、爲後日證跡  
愚筆留置候、

「花林寺四世」  
法印頼継判

于時永祿九年十月下旬之比、於道之山奉公被閉目し人々  
のため、弥陀の名号六字をつらね、弔事一念、弥陀佛則  
滅無量在のこゝろたるへし、

貴久

なを重くおもふ心の一筋に捨しやかろき命なりけり  
むら／＼にしくるゝけふの柴よりも昨日の夢そはかなか  
りける

ありはてん此世の中ニさき立を歎くそ人の迷成ける  
水の淡のあわれに消し跡とてや折／＼ぬるゝ袂なりける  
立そへる面影のミやなき人の忘れ形見と残し置けん  
佛ます世をいつくとや尋ぬらんよへはこたゆる山ひこの  
聲

360 「北郷時久日記」九年七月ニ至ル

何事もみな南無阿弥陀／＼猶討死ハ名をあくるかな  
無益にもむつかしき世にうはたまのむかしのやミの報ハ  
るらん

悪敷よにあらゆるものもあしなれハあからさまニハあら  
し身の果

南ニハ弥陀観音の御座なれば身まかる時も御名を唱よ  
誰かにも誰そとはぬ誰しかも誰かハ獨り誰かのこらん  
ふつ／＼とふつと世も身もふつきりとふつとくやくしくふ  
つとかなしも

一永祿元年戊辰三月十八日丙寅ヨリ打立、十九日卯日、もひ

き破候、其日宮之原ノ合戦、身方輩軍、北郷藏人殿・

同又八郎殿・兵部少輔殿、豊州ノ御人數、平田出羽守

親子打死、以上兩家ノ衆二百余打死、

一同年中、曾於郡屋形へ御上候、所務ハヒカへ候、

一同十二月五日寅、伊東新山切腐ス、北郷左衛門頭殿・

同三郎右衛門殿・山内次郎右衛門殿・知覧大和守殿打

死、

一永祿二己未末吉屋形へ御上候、豊州より、

一十二月廿三日丙寅、飢肥へ伊東銘キ火矢射候、板敷田ノ

合戦、屋形ノ御人衆八人、飢肥衆十人打死、

一永祿四辛酉六月廿四日癸未、板敷田ノ作散ニ合戦、

一同廿六日乙酉、酒谷ノ作散合戦、

一七月五日癸巳、鎌カクレヲ伊東陣ニ取、

一同八月十九日丁酉、伊東開陣、

守護方之弓箭

一永祿四辛酉五月十四日癸卯、廻ヲ肝付より忍入城落、

一同五月廿七日丙辰、自屋形ヨリ廻ニ陳ヲ被食候、

一同六月十三日壬申、土用中馬立ノ陳ヲメサレ候、

一七月八日丙申、竹原山ヲ陳ニメサル、

一七月十二日庚子、自肝付廻へ兵糧込、竹原山ヲセメ落ス、

屋形衆五十人打取、右馬頭殿御打死、

一同八月六日甲子、馬堅開陳、

一同十二日庚午、惣陳開陳メサレ候、

一永祿四辛酉六月十二日辛未、末吉城屋形より北郷殿へ給ル、

一同五壬戌四月五日戊午、松山城自肝付忍入取、

一同五月十三日、志布志之城肝付へ渡サレ候、

一同四月十七日庚午、梅北北郷殿御知行、豊州より進セラ

レ候、

一永祿五壬戌二月十日甲子、本城衆酒谷マテ御ノキ候、

一同二月廿日甲戌、本城ヲ伊東ニ渡ス、

一同七月九日、高原口田平破候、矢合兩長并殿 悪日にて候

一同八月朔日、江平破候、

一同九月十七日之夜戊戌、櫛間より泰心様御大將ニテ、日

置殿・柏原殿御供にて、飢肥本城ニ忍入、明者十八日

亥、切返候、酒谷モ同取返候、伊東衆九十三人打取候、

一永祿七甲子正月廿日甲子、鬼ヶ城ヲ伊東取構ル、

一同三月十四日丙辰、酒谷へ伊東銘、其夜鎌カクレニ敵ス

ワル、明日ノ夜半ニ開、

一同十六日戊午、本城向原ノ作散引時、本城衆新山へアケ

候、伊東衆新山へアケ候て合戦、伊東衆六人打取、

一永祿八二月七日乙亥、板敷田ニ野臥候て、本城衆十三人

打死、

一同十九日丁亥、伊東新山取構ル、

一三月廿四日辛酉、楠原マテ伊東銘ク、

一永祿八五月初日丁酉、新山外屋ノ尾ヲ仕破ル、打取廿八

人、取人四十人、具足七百取、身方ノ手負四百八十人、

打死卅人、

一永祿九丙寅五月十八日戊申、刀組之時ニ、松山へ始テ箭被

射出候、右京進殿軍敗メサレ候、

河野筑前守トツコノ矢、

最所周坊守殿五古ノ矢射ラレ候、

箭加持勝藏院、

矢細工大岩根河内守、

右京殿岩川八幡宮へ百足御上候、 住吉明神へ水田一

反御上候、

時久公、末吉ノスワ大明神へ御腰物、其日御上候、住

吉へ重代ノ長刀御上候、右京進殿へ時久ヨリワシノ羽

一尾進セラレ候、右ノ日取ノ大將紀伊守殿 貴殿様、

御首途ノ酌取河野伊与介殿、

一十月廿

屋形様飴肥ノ爲与力、始テ眞幸院三ノ山へ御働候テ、

カク井御破候、

一永祿九八月廿四日<sup>壬午</sup>、牛ノ河内へ肝付より大野伏カケ

候、庄内衆松ヶ野ニ跡ヲ取切候、合戦身方レキく五

六人、以上廿人打死、

一永祿九<sup>丙寅</sup>三月廿二日<sup>寅</sup>、伊東目井ヲ取構ル、土用ニト

ル、

一同四月廿日<sup>辛巳</sup>、宮之浦衆舟イクサ、伊東衆廿九人打取、

生捕九人、切捨以上六十三人、舟五艘取、

一同五月廿四日<sup>甲寅</sup>、櫛間ノ人衆目井へ野伏ニ出テ、十一

人打取、

一永祿九六月十六日<sup>丙子</sup>、肝付ヨリ岩川へ野伏カケ候時、

敵打捕頸廿六、慈ノ越度十余人、

一同七月二日<sup>卯辛</sup>、時久公飴肥へ御越山、

一同七日、目井ノ城開ク、

一同七月十七日<sup>丙午</sup>、櫛間へ肝付ヨリ絡候ヲ打取、頸廿五、

忠 良 公  
 貴 久 公  
 義 久 公  
 義 弘 公

自 永 祿 十 年  
 至 同 十 一 年

後 舊 記 雜 錄 卷 四

361 「國史」卷十 大中公 松齡公

賈明公上 初名忠良、又改義辰、後改義久、大中公之子也、幼字虎壽丸、稱又三郎、又改三郎左衛門尉、任修理大夫、

叙從四位下、稱三位法印、道號龍伯、法名賈明存忠庵主、妙谷寺殿、

永祿十年丁卯秋七月十三日、公與樺山幸久盟、據島津支流系圖

菱刈陣正隆秋相兄子鶴千代治家事、遂以大口・羽月・山

野・曾木・馬越・湯尾・平和泉・横川等地叛、隆秋、重

猛之弟也、據大中公舊譜、菱刈孫太郎系圖、菱刈重猛見上卷永祿四年、公拔横川以賜菱刈重猛、見菱刈孫太郎系圖、公拔横

川見上卷 永祿五年、冬、公會 大中公 松齡公擊菱刈氏、十一月二

十四日、大中公將清水・曾於郡・宮内・田布施之衆七

千餘人、軍陣尾、公將鹿兒島・谷山・加世田・阿多・

山田・吉田・帖佐・山田之衆八千餘人、進至諏訪山、遣松齡公攻馬越城、喜入季久・比志島式部少輔義基等當湯尾軍、北村・溝邊・踊之衆當横川軍、伊集院・市來・伊作・高橋・川邊・穎娃・指宿之衆、當大口及球麻・八代軍、松齡公先登陷馬越城、殺守將井手籠駿河守・兵部少輔彌四郎、斬首二百餘級、横川守將菱刈中務少輔棄城奔、其餘諸城望風而下、據大中公、賈明公、松齡公舊譜、菱刈孫太郎系圖、馬越城遺城在馬越地頭館北一町餘、係前目村、陣尾在地頭館東北里許、係田中村、諏訪山在地頭館東南三里許、係前目村、義基、義重五世孫也、據比志島軍人系圖、比志島義重見第十卷長祿三年、獨菱刈隆秋在大口、嬰城自守、求救於相良氏、二十五日、遣島津義虎、守平和泉・山野

・羽月、市來備後守家利・伊集院刑部少輔久慶等守市山城、宮原筑前守景種・佐多常陸介久政守曾木城、以距球麻・八代之兵、義虎軍人不敵、球麻・八代兵三百餘人乘之、入守大口城、乃遣又七郎家□・樺山幸久・幸久子兵部太輔忠知・新納某、守平和泉、諸所兵衆守山野、使義虎守羽月如故、據大中公舊譜、島津支流系圖家□一流譜、樺山玄佐自記、新納在京系圖、市來次左衛門系圖、時家長庶子曰家横、家利、家續九世孫、市來時家見第五卷建武四年、平和泉城遺墟在大口鄉地頭館西北里餘、係平出水村、山野鄉山野村有古城墟二所、羽月鄉下殿村有古城墟、名高殿城、市山城遺墟在大口鄉地頭館東南里許、今名入山城、係市山村、曾木鄉有古城墟二所、一曰諏訪城、一曰本城、久慶、伊集院氏支庶、久政、忠山之玄孫也、據島津支流系圖、伊集院久氏長庶子曰讚岐守久教、久慶、久教之玄孫、久氏見第六卷延文元年、佐多忠山見第十二卷文明七年、十二月七日、吉

362

田地頭寺山出羽守直久成羽月、同上、直久、島津駿河守忠信次子、出爲寺山氏嗣、見第十六卷  
 天文八、二十九日、市來家利・伊集院久慶・平田加賀守領  
 年注 步卒數人、至大口城下、陰覘形勢而還、城中出兵逐之、  
 三子死、大口兵乘勝而進、薄市山城、城中出兵擊之、乃  
 引去、爾後大口兵動輒侵市山城、乃使新納忠元守之、  
大據  
 中公舊譜、  
 劉孫太郎系圖、

以久之字

彰久

又四郎 守右衛門尉

永祿十年丁卯誕生、母北郷左衛門尉時久長女也、

363

「寺山氏系圖」

出羽守直久子

二子  
一女子

肝付雅樂助室、母島津中務太輔忠成大田氏祖、末女也、

一女子

三原神祇重行室、母同前、

三子  
久兼

364

四郎左衛門 入道定雲  
永祿十年丁卯誕生、母猿渡休覺女、

『日向記』

一永祿十年也同年ノ春、島津相模入道日新齋ヨリ、坊ノ津一乘院ヲ

使僧トシテ、御崎寺ニ着船ス、其趣ハ眞幸口ノ弓箭、

何終可申モ不相知、義祐モ隠居アリ、我モ隠居仕ル上

ハ、互ノ和談申合度候、依之、紫硯一面是ヲ進スルコ

トハ、向後此磯クホラムマテ可申合トノ使僧也、三位

入道薩广ノ計略于今始マラヌ成レハ、心中ニハ誠ニ

思ヒ玉ハネトモ、使僧ニ御見參有、其上種々馳走有テ

返シ玉フ也、當家ヨリハ安宮寺ヲ返僧ニ遣サレ、進物

ハ新古今集也、伊東大和守差出奔走タリ、伊集院申ル

ハ、御方ハ人數ノ損シ申ヲモ不嫌、或城攻或懸合ノ

軍ヲ望玉フ、島津家ハ、一人死ハ万人ノ愁故、合戦ヲ

嫌、上下ヲ着シテ國ヲ治ラル、由、新談也、「本ノマ、」夫ヨリ坊

ノ津へ案内者有之、一乘院ニ三日滞留也、其内種々ノ

寶物等ヲ見參ニ入、奔走有、一乘院竊カニ申ル、ハ、

薩州ノ武略ヲ以テ世ヲ治ント申ル、間、油断不可有ト

ノ雜談也、擬安宮寺歸リ、後飯野三ツ山ノ夏ハ作雜談

ニ成ニケリ、

365

「義久公御譜中」

「正文在加治木衆長谷場傳左衛門」

今春之御賀祥、千喜萬悦、猶以不可有際限候、多幸々々、抑此等之爲御祝儀、太刀一腰、織筋二端、令進献候、誠補

佳例計候、諸吉永日中、可得御意候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
〔永禄十年〕二月八日

〔相良義盛〕  
修理大夫頼房(花押)

謹上 嶋津殿

御宿所

〔上包〕

謹上 嶋津殿

御宿所

修理大夫頼房

366

「御文庫三番箱中」

永禄十年二月廿五日

賦山何連歌

風はおれ雨は身をしれ花盛

小蝶や露にはねしほるらん

月残る墻ほの朝氣長閑にて

寝られさりしや起いそぎする

義久

其阿

伯圍

珠玄

家久

誰となくむすひ捨たる草まくら  
野は糸すゝき穂にいつるかけ

久秀

暮る夜を妻にをしかのうち侘て

重時

やゝさむからし秋のはつ霜

昌宗

世のならひとはおもへともくるしきに

忠元

別のきハそなおうらめしき

友治

入あひの鐘にまたるゝ身の行ゑ

長總

難波江とをくいてし釣ふね

友見

月影をほのくみつの浦かけて

久治

薄霧まよひ明る松はら

重持

そゝきしハ夜のまなりつる秋の雨

昌宗

風吹すさみ空の涼しさ

喜庵

片岡や折はへせみの啼くらし

義久

宿り今ハたとふや旅人

珠玄

煙こそ遠なる里のしるへなれ

家久

よそに思ふもさそなわひしき

其阿

老らくの杖にかゝれる行かひに

政郷

みとり子ハまたむすほゝれつゝ

忠元

あさまたきかりに出しも暮る野に

家久

埋木にまかふ梯たとくし

友見

立さらぬ親のまもりのさすらへに

珠玄

あやふみ渡る憂よ世の中

昌宗

あしからしたく行す憂をまて

家久

みたれしと思ふもいさや身のおはり

珠玄

咲やらぬ花や若木のゆへならん

忠元

虫のねほそし風のした草

其阿

柳ハ露にみとりそふ色

久秀

庭もせやま萩移ふ暮さひて

重持

さまくにくはりしきぬの春かけて

久治

月さやかなり軒の玉たれ

喜庵

人をわかぬや哀ミとする

義久

はし居してそのまゝ夜をや更すらん

義久

假初にきても名残の大井河

珠玄

別れし友にめぐりあひつゝ

珠玄

むかしをかへせ松かけのなミ

其阿

祈りつるねかひも今やはつ瀬山

其阿

かけつかぬ夢の浮橋かなしきに

長總

いつをまちみん中にはけしき

久治

それも形見かみねのよこ雲

久秀

波かせもこゝろありてよとまり舟

久秀

秋はつる夜半にハ月の影もせて

忠元

まきらハさしと聞ほとときす

忠元

ほしをいたく今朝はすさまし

珠玄

五月雨のはるゝともなく音そひて

政郷

露のまもつかへぬる身ハやすからす

昌宗

ひとりもうふる民やうからん

友治

心くたかて誰か得し法

友見

君を思ふ身ハ程くのたのしひに

長總

薪こり水結ひてもすゑハいさ

喜庵

もるゝハあらし國のはこくミ

其阿

道ハあまたに岩ほさかしさ

重持

あふけ猶あまねく廣き神こゝろ

忠元

仙人や遠きも常にかよふらん

政郷

浅からましや言の葉のみち

珠玄

いたつらに日は老に送らし

其阿

海山を千里にみつゝ歸りきて

友見

見る袖もにほふ梅津の里にきて

珠玄

夢の内にも身をそなくさむ

昌宗

かすミのころもかたしきやせん

長總

里わかすあらし吹立山たかミ  
 何所もみちのちりは残らん  
 かつ氷る岩根の水の行やらて  
 塩のひたすや磯きへのみち  
 船よはふ聲もかすかにくるゝ日に  
 爰やかしこと身そまとひぬる  
 今ハたゝ思ひひとつに定めはや  
 千々にかなしきあかつきの空  
 伏かねて鴨立月の有明に  
 門田の面のさそな露霜  
 九重のうちもさひしき秋の風  
 旅にきるへきころもをくらん  
 ゆかりとハ何を心にたのまゝし  
 いつハリをのミかたるともなひ  
 道のへのたよりをなれる中宿に  
 清水に月をうつしてそ見る  
 打そよく風は秋立小篠へら  
 けに玉をなす露はことなり  
 殿つくりけハひゆたかに跡しめて  
 遠き柚木を幾日引覽

政郷	山ひこのこたへするまでよひかハし	政郷
久治	わたり船なく見ゆる一むら	其阿
友見	床しさハ身にあまるそとしらせはや	昌宗
長總	おもふかきりも筆ハつくさす	友見
友親	逢事ハ稀にも涙いかにせむ	家久
喜庵	このまゝにうき世をや經てまし	久治
友治	かけ高ミみちもあら野ノ草の庵	長總
忠元	かけひをつたふ水ほそきをと	重持
其阿	さしのほる光に氷下とけて	義久
義久	こゝろよけにもかハつなくなり	友治
珠玄	花鳥のちきりむなしき春のくれ	殊玄
家久	霞はかりや立のこるらん	政郷
久秀	市人のかたノ歸る家路まで	其阿
政郷	汲かハしつる情わするな	忠元
友治	菊かほる秋は來にけるけふことに	久秀
長總	みきりの月にまとひあかさん	家久
喜庵	義久六句 長總七	伯圍一句
忠元	友治六 珠玄十二	其阿十句
重持	久秀六 重持六	忠元九
珠玄	友見六	家久七
		友親一
		政郷七
		久治五



『阿多大日如來由緒』

一大日如來 木像 新山村之内

南瞻部州大日本國薩州阿多郡大日之尊像奉造立事

護持信心大英檀島津前相模守藤原朝臣日新、在家菩薩

信心固、御息災延命、子孫繁昌(諸人カ)快樂、現世安穩、

後生善処也、

永祿十年丁卯三月吉日

上宮寺座主

并伯宥様

同又七殿

同屋形義久

同又五郎

同兵庫寮「不詳」

同又四郎殿

同左衛門督 當座主頼鏹

當地頭安辰

佛師歌歌

「右、頭之内ニ書付有之候」

『在本田氏』

御方江長く致滞留御苦勞罷成候、万端難謝候、然ハ今月

十七日薩摩へ罷着候、其御方之調略御入魂之通、始終申

達候、公私喜悅不過之候、近日御使僧可有御下之旨、其

御倍可申入候、就中眞幸境目、近年伊東殿押領之分、別

紙書付進上候、飢肥境之事遠方候之間、追而可申上候、

永祿十年甲子卯月廿貳日

使者神力坊

「最上長門守入道」  
宗檜

櫻井入道殿へ

(本文書ハ二九二号文書ト同一ナルベシ)

(本文書ハ二九一号文書ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ二九四号文書ト同文ニツキ省略ス)

「御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

態染筆候、先刻者就談合急速御越、祝着之至、其後可申

通之處、菟角無沙汰相過候、仍一ヶ條之儀、從其堺者遠

路之樣候之欵、左候ハ、可被廻せ之間、内々其分別專

要候、將又小瘡氣之事、頃弥散々之間、步行不快候、於

今分者、譜茂祭礼社參之儀難閑目候、自然一途之企六月

中相延候之者、名代ニ社參可憑入候、委細之段、以使節

可申達候、爲納得先々如此候、恐々謹言、

「朱カキ」

「永祿十年秋」七月八日

義久(花押)

(上輩)  
兵庫頭殿

義久

龜山氏祖、

372 永祿十年丁卯七月十二日、當大安居士一七回忌、供養大

乘妙典一千部經於帖佐郷、經塚在東餅田之内、經塚之銘曰、

爲心翁大安大居士者也

奉讀誦大乘妙典一千部 孝子敬白

永祿丁卯七月十二日

戰國十六人

374 「正文在樺山源三郎久清」

起請文

「一承候三ヶ條之趣、得其心尤神妙候事、若此旨於違犯者、〔牛王〕奉始 梵天帝釋四大天王、惣日本國中大小神祇、別而

當國鎮守新田八幡大菩薩 大隅正八幡 霧嶋六所權現

當所諏訪上下大明神 天滿大自在天神御部類眷屬御爵

可蒙者也、仍起請文如件、

永祿拾年丁卯七月十三日

義久〔花押〕

樺山安藝〔義久〕入道殿

〔此御書、樺山善久入道玄佐ノ譜中ニ在リ〕

373 勝久公長男

忠良 良久〔永祿五年ノ場ニ記ス〕

女子

永祿八年生、

女子

男子二人

正圓

永祿十年丁卯、於日州廣原誕生、

鹿兒島大乘院五代住持盛秀僧正之爲弟子、薙髮如斯

云、後有龍伯公命、還俗稱久右衛門尉忠恒、一本作久恒

始號藤野、後改忠恒、稱忠秀、又改稱秀久、名齋於

恕世、

忠辰

375 「御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

先刻如申通候、就一ヶ條紛之儀、犬追物之企候、依夫近

日中可被成御越之段、其表へ早く被仰散、越着者可有停

止候、爲心得染筆候、恐く謹言、

〔永祿十年〕七月廿九日

義久〔略押〕

兵庫頭殿〔義弘〕

〔上書〕  
兵庫頭殿

義久

376

〔御文庫四拾八番箱中〕「義弘御譜中正文有之トアリ」

此節働之事、先々被差延候て可然之段、先刻白坂彦左衛門尉へ委細申聞せ候、定而可相達候、然者御存分同前示預候之条、不能細筆候、恐々謹言、

〔朱力字〕  
「永祿十年秋」九月七日

義久〔花押〕

兵庫頭殿

〔上書〕  
兵庫頭殿

義久

377

『一乘院文書』「義久公御譜中」

龍嚴寺一乘院頼忠法印爲御遺言、後住可爲舜覺房典瑜之事、并門徒眞俗道具等、守代々掟之旨、不可有相違之狀如件、

永祿拾年丁卯拾月吉日

修理太夫義久〔花押〕

進上 一乘院頼忠法印

御同宿中

〔右ノ上包ニ有之〕  
進上

一乘院頼忠法印

御同宿中

修理大夫義久

〔裏ニ〕  
嶋津

378

〔在高山高崇寺〕

雖未申通候、用一書候、就中其方御歸依之高崇寺、於根來寺住山之砌、法流之儀令約諾候、然者愚僧老魅之条、急度御越、法流可有御相承様、御冥見所仰候、恐惶謹言、

神無月十六日

頼忠印

肝付三郎殿

御宿所

379

『年代記』

一丁卯 永祿十年霜月七日ノ夜、福昌寺直歲寮計燒、同廿四日、伯圍齋・義久有發足、攻落菱刈馬越、翌日、本城ヲ始メ八ヶ所捨去ル、横川ハ儀ニ成テ、五六日シテ渡、

380

〔貴久公御譜中〕

菱刈氏者當家累代之臣、而與澁谷氏・那答院氏・蒲生氏等俱、所以背當家有年於茲矣、然而有其罪、先是永祿五

年壬戌之夏、陷橫川城、而後畀其地於渠矣、不顧其厚恩與相良氏、又爲讎敵、以故不得已、而欲伐彼之黨徒、永祿十年丁卯十一月廿三日、伯圍及義久父子自將、發於栗野到於湯尾、忠平發於飯野、直趨於馬越之路頭、不意有烽火訝、念是隱謀相顯者乎不進人馬、少焉視之、則奇哉、所以狐火之照暗也、士卒共有喜色、合掌以祈勝利者也、其翌廿四日朝、伯圍率新納氏・樺山氏・大隅州清水・曾於郡・宮内・薩摩州田布施士卒共七千有餘、而進馬越陣尾舉旗、義久率左衛門大夫歲久・又七家久・又四郎征久・大野治部少輔忠宗及薩摩州鹿兒島・谷山・加世田・阿多・山田・吉田・大隅州帖佐・山田士卒共八千有餘、前于馬越揚旌旗於諷方山肩、使加世田・阿多・山田士卒前大手城門致鬪戰也、兵庫頭忠平爲今日攻口將前向、相從士卒飯野・馬關田・吉田・簡羽野、征久之旗下鹿兒、肝付彈正忠之旗下加治木士卒川上左衛門尉・新納刑部太輔共七千餘員、而爭先競前、教伊集院・市來・伊作・高橋・川邊・顯娃・指宿士卒七千餘員、屯馬越花立尾、對大口・球麻・八代之敵、於彼地亦有合戰矣、使喜入式部太輔・比志島式部少輔・同姓美濃守及蒲生・栗野・佐多又太郎旗下知覽士卒共五千有餘對湯尾城、又使北村・踊・溝

邊士卒三千許對橫川城、今日巳時、令鎌田尾張守作軍神勸請吐氣、終其吐氣則忠平忽攻於馬越城戌亥方、敵兵防禦不緩、而士卒或被傷、或中矢石死者雖有數多、任運於天各以攻登、敵兵數百有本丸中、定必死相支者甚矣、忠平彌魁諸兵合戰碎手、獲敵首施譽名、丁此之時、伯圍之從軍差大隅士卒於其戰場、增勢各致粉骨、于時村田右衛門尉・町田新左衛門尉・寺師某・藺牟田某、不去一足遂戰死也、田布施之士辻大藏左衛門・有馬軍彌左衛門、阿多之士大寺刑部少輔・谷山某、加世田之士久富軍兵衛、飯野之士迎帶刀左衛門等欲超城壁之際、城主井手籠駿河守・同兵部少輔・同彌四郎已下忽然前出、屠殺件數輩、忠平惜士卒之墜命、自提三尺直前斬戮數多強敵、財部傳内左衛門尉・東郷兵部少輔・阿多掃部助・宮原右京亮・新納刑部太輔・伊集院美作守・有馬奉膳兵衛尉、各已勵氣攻破門壁、斬首并手籠父子、且屠殺數百之敵、得首者二百餘員、切捨不知其數、申時悉退治畢、諸士軍勞譽名不可勝言、酉時作勝吐氣、俟夜暗唱太平吐氣、其凱聲響轟菱刈・牛屎兩院、而今夜上下共在馬越矣、翌日有告於諸所來曰、畏我之武威也、昨夜迨深更平、曾木城・平良城・湯尾城・羽月城・山野城・平和泉城・青木城・一山城

委而退散、横川城菱刈中務少輔獻于 太守而去矣、雖然  
爰有菱刈彈正者、據牛屎院大口一城、請救於相良氏、同  
廿五日、入守兵於本城・曾木・市山也、平和泉・山野・  
羽月之城使島津薩摩守義虎守件封疆、其守兵等警衛不堅  
固、故相良氏之援兵球麻・八代凶徒三百餘騎、入守大口  
城相支者堅矣、

381

「義久公御譜中」

菱刈氏者當家累代之臣、而背 太守者有年於茲矣、然而  
有其罪畀新恩之地、不顧厚恩與逆徒爲讎敵、以故不得已、  
而永祿十年丁卯十一月廿三日、太守貴久公及義久自將、  
發於栗野到於湯尾、忠平發於飯野、待夜中之佳期、直踰  
於般若寺山到於馬越、翌早義久率大軍、進譟方山揭旗於  
高地、令鎌田尾張守勤勸請吐氣、則各爭前攻登、不顧身  
死相戰、自城主井手籠氏父子至士卒、斬首二百餘員、切  
捨不知其數、申時悉以平治畢、諸士功勞譽名不可勝言、  
酉時揚勝吐氣、俟夜暗唱太平吐氣、所以其凱聲之轟菱刈  
・牛屎兩院、宛如疾雷、今夜上下共在馬越也、翌日有告  
於諸所來曰、畏我之武威也、昨夜迨深更乎、曾木城・平  
城・湯尾城・羽月城・山野城・平泉城・青木城・一山城

382

「義弘公御譜中」

共八個所委去矣、横川城主菱刈中務少輔獻夫地於 太守  
而去也、此以下詳記 貴久公之譜、故略于此矣、

夫菱刈氏者累代之臣、而屬那答院氏・澁谷氏・蒲生氏等、  
以背守護之令、然而有其罪、去永祿五年壬戌之夏、陷横  
川城、則畀其地於菱刈氏、不顧其厚恩、未經十年、又  
與相良氏爲寇敵、是以永祿十年丁卯十一月廿二日、太  
守伯圍齋・同 義久主發栗野逾湯尾矣、忠平發飯野到馬  
越、翌朝 義久主揚旗於譟方山、 伯圍齋屯德邊、而使  
忠平爲前鋒攻馬越城也、辻大藏左衛門尉・有馬軍彌左衛  
門尉・久富軍兵衛尉丁欲超壁之時、城主井手籠駿河守・  
同兵部少輔・同彌四郎直前、屠殺辻氏・有馬氏・久富氏  
等三輩、我之從卒歎惜之、欲乘城、忠平亦提三尺劍斬強  
敵者數多也、財部傳內左衛門尉・東郷兵部少輔・阿多掃  
部助・宮原右京・新納刑部大輔・伊集院美作守・有馬奉  
膳兵衛尉各勵勇氣攻破門壁、井手籠父子既被斬戮、其外  
討殺數百人、得大利唱凱歌、其響轟于菱刈・牛屎兩院、  
由是同廿四日之夜暗、本城・湯尾・曾木・市山・青木・  
山野・羽月・平泉・横川等委、而退牛屎院大口城矣、由

是菱刈大膳亮降秋滅威勢之際、得援兵於求麻、警衛大口堅矣、詳記 伯圍齋譜中、故略于此也、

菱刈大膳亮當家累代之臣苗裔、而屢起叛逆爲 太守之寇、是以永祿十年丁卯十一月廿二日、太守義久公及忠平主催於領土之軍衆、向菱刈院陷馬越城、因茲本城・湯之尾・曾木・市山・青木・山野・羽月・平泉・横川之城皆委、而退入牛屎院大口一城、大膳失勢請援兵於相良、而球麻・葦北之兵三百餘騎入守于大口矣、丁此之時、所入手裏之諸城悉入守兵、家久亦與樺山安藝守善久法師玄佐・同兵部大輔忠知俱、守平泉之際、忠平主令奉菱刈移居之命、家久亦賜横川城、有飯野警衛之命、故翌年戊辰正月十八日、遁長陣之勞苦、揚歸鞍之鞭於平泉矣、

永祿十年十一月、伯圍齋自將、而陷於馬越城、因茲翌夜、菱刈之諸城悉捨去、而求麻・八代之軍等退入于大口一城、于時玄佐・同兵部大輔・麿島光明寺與俱、走入于平泉、當所之警固者、中務太輔家久・新納某・愚息兵部

大輔也、各爲若輩故、愚老亦蒙警固之命、是以自十二月至翌年十一月、更無怠矣、于時日新公有病痾之聞、漸漸通路亦自由、故先候馬越、直到于加世田侍于日新公之病牀、而後爲曾木之警固者也、

十一月廿四日、辻大藏左衛門尉菱刈馬越城を不意に攻らる重之、其子兵部少輔重房・孫弥四郎重輝等と接闘し、有馬軍彌左衛門尉・久留軍兵衛尉・村田右衛門尉季久新納武久ノ弟なり、初四郎五郎云、町田新左衛門尉忠繼三郎五郎弟也、川上丹波守・寺師助八宗眞年十八、子孫、藺牟田與左衛門・鮫島隼人宗能・大寺刑部少輔大炊介迎帶刀左衛門・新納九郎常陸介忠苗ノ一弟也、鎌田大炊助年二十六、廿三、塚肥和泉以下の交名、馬越戰亡の中ニ見ゆ、峽考、立本藏人・岩下主計・圖師權左衛門・谷山主殿・同内衆三人・藥丸新左衛門・河尻新左衛門或作新五郎、十二月廿五日、佐多備中守經久曾木天堂ケ尾に戰死、年四十三、廿九日、市來備後守家利市山の成將にて、菱刈の賊と戰ひ西原口にて死之、下の列も同し、伊集院刑部少輔久慶主従五人、同内衆一人・伊集院平七久光久慶の子、後に刑部少輔と云へ誤ならん、否へ此日同死も疑あり、平田加賀守・同内衆一人・肥後新次郎盛房或作平田、年二十一、肥後與市・肥後與三以下の交名も市山

「義久公譜中」

一菱刈氏者當家累代之臣、而背 太守者有年於茲矣、然

有馬奉膳兵衛尉

新納縫殿助久時

新納刑部太輔「忠元」  
〔初忠時、藤四郎〕

『〇町田新左衛門忠繼戰死』

新納四郎次郎

『〇村田右衛門尉戰死』

東郷兵部少輔

久富軍兵衛尉「戰死」  
〔坂野住人〕

阿多掃部助

〇財部傳内左衛門尉「盛弘」  
〔木崎原戰死〕

『〇新納九郎戰死』

宮原右京亮

『〇大寺刑部少輔戰死』

伊十院弥六左衛門  
〔後兼作守ト云云〕

濱田民部左衛門  
〔敵三人切捨也〕

戦亡の末に  
あれハ埃考、紙屋越中・市來源四郎・井尻勘解由兵衛・  
上野源十郎・桂常陸・落合民部・川上右衛門尉内衆二  
人・中條左近將監・平田新左衛門・長倉新左衛門・安  
田和泉・川崎大膳、  
此年、税所篤澄〔横川に於て、十六歳、戰死とあり、俗名不詳、埃考、〕

386 永祿十年丁卯十一月廿三日、御大將忠平主・左衛門尉歳

久、馬越の城を攻玉ふ時、防戦して軍功を抽、

〇辻大藏左衛門尉「戰死」  
〔南方住人〕

〇有馬軍弥左衛門尉「戰死」  
〔坂野住人〕

388 「忠元勲功記」

而宥其罪昇新恩之地、不顧厚恩與逆徒爲讎敵、以故不  
得已、而永祿十年丁卯十月廿三日、 太守貴久公及義  
久自將、發於栗野到於湯尾、「中略」横川城主菱刈中務  
少輔獻夫地於 太守、而去也、

永祿十卯年ニ、菱刈領主菱刈重猛伊東方江一味ニ而、此  
御方より三之山城被爲攻砌、前以彼方江爲告知置候故、  
御勝利不被爲在、其上重猛死後、其子鶴千代幼少ニ付、  
同名左兵衛尉重任存付ニ而、押領之地を差上可致降參と  
之相談爲致由候得共、老臣共納得不仕、猶伊東方江致  
内應候多罪難被差置、右ニ付又々三之山可被相攻向ニ觸  
させ置れ、同年八月、 大中様 貫明様飯野江御出馬ニ  
付、同十一月、不意ニ被押寄せ、同廿四日、城攻ニ而、  
城將井手籠駿河守重之・其子兵部少輔重房・孫弥四郎重  
陣等貳百餘人被爲討取、菱刈之御手初ニ、先一番馬越城  
より御領ニ爲相成由、其節忠元抽衆相働、及數度勇功を  
振ひ、自身ニ茂爲蒙矢疵由御座候、左候處、大口地頭菱  
刈大膳亮隆秋等此御威勢ニ辟易仕、曾木・平良〔本城之事〕湯  
尾・羽月・平泉・山野・青木・市山之八城、其夜皆打捨、

「大口土濱川西市丞覺書」

大口城に爲引取候間、同廿五日、大中様 貫明様馬越城に被爲入、則御手分ニ而、本城・曾木・湯尾・市山江者夫々番手被差遣、平泉・山野・羽月ニ者、出水之義虎より可被相守旨被仰付置候、然處大口城少勢ニ而難防存、相良義陽江加勢を乞折柄、出水方不審候、山野方より球摩・芦北・八代之軍兵三百余を大口城ニ招入レ、時々市山城を侵伐仕候間、同十二月廿九日、市山守將市來備後守家利・伊集院刑部少輔久慶等於西原遂防戰、家利・久慶等致戰死候ニ付、其後市山之御番可仕者無御座、其砌忠元者馬越城江御供仕居候處、從 大中様忠元差越御番可仕、小身ニ而者難勤答と、蒲生之御藏入等拜領被仰付、尤大口入御手候上者、直ニ地頭を茂可被仰付間、段々難有蒙御意、市山城江罷移、市來・伊集院・河邊・田布施之軍衆ニ加下知、在番爲仕由御座候、

一 永祿十年丁卯十一月廿四日、馬越之城責崩爲被成ニ、兵庫頭様般若寺越より逆戸におろしよせ、馬越之城責崩被成、城ニ籠候衆五百餘騎打取被成也、其日之内横川・本城・曾木・湯之尾・羽月・平和泉・青木・市山

「新納忠元譜中」

迄、一日ニ御手に參たる也、雖然大口之城ニ者求摩より入番、八千餘騎城ニ相籠罷居ニ付、其折節御詰被成事不罷成候故、永祿十二年之五月迄ハ三年、大口之城こたへ被居たる由也、其十二年之五月六日ニ、戸神にて求摩よりの入番之内百餘騎打取被成ニ付、求广上下共ニ相良殿ニ申候者、いらさる菱刈殿へ加勢被成、此節もむねとの衆はめ被成候、今分ニ而者求广ためニ罷成間敷之通訴訟申ニ付、入番衆も引取、薩江捧城を下城申候由候、其十貳年に新納刑部大夫殿と申候へとも、武藏殿名を御給被成、大口之地頭被仰付たる也、此事御家記にも見得申候、あら／＼書寫候、其年より大口江諸所が被召移衆多々有之候、兵庫頭様其時分ハ栗野之城に御座したる由候、某親紀伊も栗野が大口ニ罷移候、おことニもつちのとのミの年大口へ移被成、衆皆以有之、但移衆、御諏訪御祭頭衆之古帳に有之、

一 十年丁卯初、公之攻三山也、菱刈大和守重猛陰黨伊東預泄其謀、故不拔退、重猛卒、同族左兵衛尉重住奉重(左)猛之子鶴千代、時年五歳、後伴謀歸 公侵地以臣事之、右衛門重慶此



「全」

老臣不聽、猶應伊東、於是八月、公如飯野、聲言起兵復伐三山、乃十一月廿三日、還攻馬越城、二十四日、忠元及新納近江守武久・伊集院美作守久宣・有馬豊前兵衛純秀飯野士人・村田右衛門尉經平・町田新左衛門尉忠繼等奮進攻城、斬其將井手籠駿河守重之・重之子兵部少輔重房・孫彌四郎重陣等二百餘級、古今戰、馬遂五百餘級、此役忠元槍戰四、顯勇功、躬蒙箭創、經平・忠繼死之、於是菱刈大膳亮隆秋等畏公兵勢、夜委曾木・平良・湯尾・羽月・平泉・山野・青木・市山八城、皆據大口城以拒公師、二十五日、公等乃入馬越城、分遣兵衆使戍本城、即此平良、曾木・湯尾・市山、而使島津義虎則分其兵戍平泉・山野・羽月、各爲外援、隆秋寡弱恐不能保、乞援於相良義陽、義陽乃募於玖麻・葦北・八代、遣兵三百餘、入大口城助菱刈氏、

一馬越詰之城にて度々鎗仕合申候、一度ハ先に新納江州と仕候、一度ハ伊集院作州美と仕候、一度ハ飯野衆有馬豊前兵衛、此人と兩度仕候、其時村田右衛門戰死被仕候、町田新左衛門との親ニ而候も、打死此軍にて候、

「長谷場越前日記」

某右之脇ニ而手負被申候、右流ウツを鷹俣ニ而射切申候、

一菱刈方御退治の事、永祿十年の仲秋之天ニ至てハ、貴久様者眞幸院殿野に御越山被成ツ、兵庫頭様のまし／＼て、御軍勢の御禮を被仰へき爲ニ御光儀有て、其儘飯野ニまし／＼て、修理太夫義久様の御發足を御待居被成ツ、世上ニ武略之物音者、小林表ニ御出勢と風聞させ、扱又横川之城籠アイニトモを數萬騎之軍兵者被打通、此事を見るよりも、菱刈方ハ伊東・求麻來ニ告知す、時を不移境目ニ注進して、今や遅しと待居たる処ニ、東邊を打て西篇をと軍勢道を振替て、般若寺越ニごふし木越へ忍ひ通りに打出て、比者永祿十年丁卯十一月廿三日の夜ニ入て、無月空と申せ共、方々御佳例の神火をともし、難處の道もさわりなく、菱刈の院中の馬越と云へる住城に諸軍兵ハ懸着テ、我先にと切岸ニ攻上り、屏涯にて先手の人衆者手負死人ニ成る處を、御太將軍修理太夫義久様の御手勢諏訪山の高上ニ指登せ被成者、陸奥守貴久様の御人衆を徳部の岡ニ御打上ヶさせまし／＼て、寄手の兵物方々より我先にと詰上り、

即城を攻落し、南方衆も一手柄仕る、其中ニ辻大藏左衛門尉・有馬軍弥左衛門尉・久留軍兵衛尉屏涯ニ詰上り、垣を越んとせしか共、城主ニ井手籠駿河入道・同兵部少輔・同弥四郎指合て切て落せハ、其手ニて空く成る、相續く兵ものニ、飯野の御人衆徒の兵もの被指合、此外諸所の軍兵も落ちあひて攻め戦ふ處ニ、御太將武庫様之御詰上かり玉ふ故、御手柄ニ敵を打せ給へハ、諸軍もきおひ申也、御供の閉目たる財部典内左衛門尉・東郷兵部少輔も一手柄仕り、高名を被逐る、した城ニ而阿多掃部助・宮原右京亮・新納四郎次郎高名被仕、扱又所々の兵ものも思ひく敵打て、井手籠父子三人を初として、數百人の打頭を詰の城ニて被取也、無比類いくさばを申計そなかりける、此下の板城戸ニて、村田右衛門尉無吳儀戦死被致也、かの御てたてを菱刈兩院の者共か見るより、難叶心得て、同十一月廿四日夜中ニ、本城・湯の尾・曾木・一山・青木・山野・羽月・比良泉八ツの城を差捨て、大口の城一ツニ取籠る、求麻の續きを待事者依兼諾也、同廿五日ニハ、本城・曾木・湯之尾・一山彼城數に御手勢を指し籠らる、山野・羽月・平出水へハ義虎より被討入、

然りとハ申せ共、此方よりの御下知也、

393

『箕輪伊賀日記』

一 去程ニ、菱刈方横川ヲ被下、此御恩を可存之處ニ、無程挾野心、横川の町口へ功者の者共ヲ出合セ、竊ニ隅薩の軍衆の歸陣すると、手負の數を日記に付る風情疑ハしき心中也、然処ニ突ニ野心の色見ユルコト多カリケレ、一揆ニ與力シテ構邪儀不思儀也、只補表儀奴原不成敗、無程彼表之殃ひと成らん、早々退治可有とそ定りける、去程ニ、永祿十年丁卯八月、伯耆入道眞幸院へ打越、兵庫頭殊成軍勢仕給ヒケル間一禮仰ラレ、暫ク<sup>(通)</sup>逗留アル處ニ、修理大夫義久去年小林ノ城ヲ攻落サル事、無念至極ニ覺ル也、此度小林立ト披露シテ御馬ヲ出サレケレハ、數万騎ノ軍兵横川ヲ打通ル、菱刈見之、時ヲ不移、此由伊東・相良ニ告知ラス、我身ノ上ト不知ケルソ愚ナレ、兵法ニ云、虎ノ泪ヲ出ル、東邊ヲ打テ西邊ニ行ト、軍勢道ヲ引替、般若寺構子木越ニ發向シテ、同十一月廿四日ノ早天ニ馬越ノ城へ押寄、吐氣ヲ動ト作りカケ、我先ニト切岸ニ攻上ル、屏際ニテ先手ノ人々大略手負打死ニナル、義久ノ御勢諏訪山

ノ高峯ニ打上セ玉ヘハ、貴久ノ御勢ハ徳邊の岡に差上セ、時ヲ不移切登ル程ニ、南方ノ住人ニ辻大藏左衛門・有馬軍弥左衛門・久留軍兵衛尉屏ヲ越ントセシ処ニ、地頭并手籠駿河入道・同兵部少輔・同彌四郎馳合セ、手痛ク防ク程ニ、皆ソコニテ打レタリ、兵庫頭攻上リ玉ヘハ、飯野ノ宗徒ノ兵、其外諸所ノ軍兵落合テ、我モト攻戦フ、飯野ノ住人財部傳内左衛門・東郷兵部少輔高名シタリケリ、下袴ニテ阿多掃部助・宮原右京亮・新納四郎二郎高名ス、伊集院彌六左衛門後美濃守、新納刑部太輔折目ノ合戦セラレタリ、下城ノ木戸ニテ、村田右衛門尉戦死ナリ、其外所々ノ軍兵思ヒトニ合戦シ、分捕シテ呼合フ、詰ノ城ニテ、并手籠父子三分頸ヲ取、敵五百人打果シ、勝吐氣動トアケニケリ、菱刈方横川・湯尾ナトコソ薩摩口ナレハ、蜜々ニ用心シケリ、般若寺・構子木越ノ逆戸下シ、思ヒ掛モナカリケル、馬越ノ一城落ケレハ、難叶ヤ思ヒケン、一日ノ内ニ湯尾・本城・横川・曾木・羽月・平泉・山野・青木・一山落去ケレトモ、大口一城ニ取籠リ、求摩ノ加勢ヲ待ケル、明ル廿五日ニハ、本城・曾木・湯尾・一山ニハ薩摩ノ番兵ヲ相籠ラル、山野・羽月・平泉ニハ

義虎ノ勢ヲ可被相籠由仰ラルレハ、出水ノ勢共打入ケル、薩廣ノ勢ヒ申計ナシ、去程ニ、菱刈方求廣ヘ加勢ヲ乞タリケリ、相良ノ頼房此ヲ聞、此度菱刈ヘ合力セデハ叶マシ、求廣・八代・芦北ノ者共不残ツクヘシト觸渡セバ、其勢六千余騎ハヤ大口ニ馳籠ル、迸散タル地下ノ者共モ、爰ヤ彼所ニ馳集テ大口ニ楯籠ル、地下總之旅都合一萬余騎トソ申ケル、城ハいよ強ク成テ、左右なく可攻様そなき、

394

「榊山玄佐自記」

一菱刈天道ニそむく故歎、天眼死去、無程當菱刈も早世、其脇菱刈左兵衛尉と云者、玄佐迄云様、菱刈童男有天麟光隆秋ナラシ、龍千代、后ハ伴右衛門重広也、五歳ニテ父ヲ喪ヘリ是を菱刈と召立可給、新知行之所々皆可奉上、大口之人衆ヘ未談合、彼城求摩堺之間令用心、大口人躰其外菱刈之老名敷者共心底逼となれ者、能々申調可致御奉公、以神判談合之折節、菱刈老名敷之者共猶三之山ヘ云合せ、又栗野山内にて落すを見付、從栗野進上す、扱へと伯圍様飯野永禄十一年八月御發足、先在御千句、其内兵庫頭殿・新納武藏守・肝付彈正忠以談合菱刈ヘ召向、玄佐雖其人敷、菱刈ヘ初内談之事故各々被成隔心、玄佐も

大口之城を先不被召取者、即時ニ求摩・八代之人衆可走

籠と内心に思故、被成二心之者、扱御出張馬越之城を、

伯圍様御大將ニ而、兼日先忍仕役とて寄付候得ハ、忍

衆俄心替候欵、無其儀に指寄各々碎手合戦、高名共無

比類、城を切取、伯圍様・太守義久様其夜彼城へ御在

陣、從求摩・八代衆馳籠、雖然、羽月・平泉・山野を

最前從此方至御覺悟者、大口之通路求摩成間敷を、

此三ヶ所義虎御番衆を被成、敵方を和けらる故大口は

手強なる、かくて彼羽月一所を御給也、〔義虎六〕最前玄佐・同

兵部太輔・鹿兒島光明寺致御供、平泉へ走入其儘なら

ず、又平泉江中務太輔殿・新納殿・栂山兵部太輔御番

之由被仰付、山野へハ所々方々之衆、此時玄佐も平泉

へ可罷籠承、難成申上、義久様・中書・新納・栂山兵

部太輔若輩也、玄佐御頼之由直ニ被仰付候間、領掌仕

罷籠、其後大口手強成て、羽月籠柙へ皆仕拂候時、薩

州御驚候欵、羽月も御進上と也、羽月へハ肝付彈正忠

御番、兵庫頭殿菱刈へ御移と而、中書ハ横川御賜、飯

野へ御番とて正月十八日歸、同廿日、馬越衆依打亡敵

成勢、山野・平泉・羽月絶通路、然ハ諸人者在番替、  
玄佐前之十二月〔十一年カ〕次之十一月迄終無歸事、

『日向記』

一 同丁卯年十月、菱刈ヨリ使ヲ以テ三ツ山へ申越、島津

家中ニ夜泊リノ陣支度ニテ相待由風聞アリ、菱刈ノ上

共、又伊東家三ツ山堺共不相知、御用心尤ト注進ヲソ

シケル、三ツ山城内其用意稠敷相調ル所ニ、使不歸内

ニ早敵大勢三ツ山着寄、稻麻竹葦ノ如ク取巻、只一責

ニト攻上ル、比ハ十月廿五日、城内ヨリモ宗徒ノ猛勢

敵味方互ニ氣ヲハケマシ數刻相戦、双方手負死人不知

數、城内ヨリモ米良弥九郎ヲ始トシテ、宗徒ノ勇士進

出テ、敵ヲ鎗ノ先ニ掛テハ落シ、虎ノ怒リ獅子ノ齒カ

ミヲナシ戦ケルカ、間堀一重ハ死人ヲ以テ埋ミケル、

大手ノ寄手ハ島津金吾、水ノ手ハ同兵庫頭・同中務太

輔、荒手ヲ入替々責シカトモ、詰ノ城迄引受テ若干

敵ヲ打伏シカハ、此勢大ニヘキエキシテ叶カタクヤ思

ヒケン、終ニ退散セラレケル、去ハ三ツ山ハ上城一ツ

ニ成テ運ヲ披カレン事古今無双ノ誉也、是偏ニ菱刈ヨ

リノ注進故トノ風聞也、島津家此憤リヲ散セントテ、

早速菱刈へ發向トソ聞ヘシ、

〔寺山出羽守直久譜中〕

補吉田地頭職、故移其地居住之際、永祿十年十二月七日、爲羽月守兵到其地爲軍務、翌年三月九日歸陣之路、求麻之衆潛出大口城設伏兵、于時吉田之士數多、家臣廿人許遂戰死、直久亦被深傷、歸入吉田本城、則以死去畢、法號壽山源棟居士、

397

〔貴久公御譜中〕

永祿十年十二月廿九日、市山城守兵等到于大口城下、闕見間隙、則凶徒見知、而鳴刀鎗來者殆乎一千有餘、于時市來備後守・平田加賀守・伊集院刑部少輔不去西原川涯、盡筋力致防戰、雖然、強敵多勢故三輩共不逃戰死、由是步卒等曳兵奔去、凶徒乘勝追來于市山、則騎步悉出城門、爭先前向、而發鐵炮飛羽箭防禦不緩、以故凶徒退散也、尔來凶徒屢侵來于市山、而有難警衛者、丁此之時、俾新納刑部大輔忠元守市山城也、

398

〔新納忠元譜中〕

十二月二十九日、市山戌將市來備後守家利・伊集院刑部少輔久慶等、及隆秋師戰於西原皆死之、時忠元從公戌馬越城、乃公遣忠元戌市山城、且賜采邑於蒲生

399

〔全〕

口、自命之曰、大口陷則以汝爲地頭、汝其勉之、於是忠元從馬越徙市山城、市來・伊集院家利、河邊・田久慶、布施兵屬焉、

一 菱刈崩之時、大口一城持こたへ候処ニ、相良衆走籠り手堅く寄騎被仕、手に餘りたる時分、市山之御番を新納武藏ニ被仰付候、其時者如何ニ茂少分限ニ而候得共、伯圍様重疊忝御意迄を以、如形之御奉公相勤候、蒲生ニ候ひき御藏を被下、心易く御奉公申候、馬越より頓而市山ニ罷移候、

400

〔全〕

一 馬越於城、一度へ新納江州宮内之桑波田同心仕候、又伊集院作州、其後飯野衆有馬奉膳兵衛、此人とハ兩度寄合仕候、拙齋ニ之肢ニ狩候ニ而手を負候つれども、そこをはつさず被相閉目候、於彼城殿同四度馬越被召崩候得共、大口之城持こたへ、求摩之衆三百程入番仕候、其時大口之地頭へ菱刈大膳殿、市山之城市來・伊集院・田布施・川邊衆御番難成之由被申候ニ付、武藏

守御番可仕之由、於馬越 伯圍様以御意御番仕候、其刻於蒲生知行被下候、大口御手ニ參候ハ、武藏守に地頭可被仰付之由御定御座候、以其首尾多年地頭被相勤候、

401 『長谷場越前日記』

一 去程ニ、一山口の足輕衆、十二月廿九日、無兵儀して大口の城麓ニ指懸る処ニ、求麻・大口衆者衆儀をして、四五手計り打出て、太刀を取て雲霞の如く攻懸る、西の原河口ニハ市來備後守・平田加賀守・伊集院刑部少輔一同ニ指勘<sup>サ</sup>へ合戦を致といへ共、敵大勢ニ懸負て一枕ニ討死す、其儘ニ攻崩し、一山の城麓に寄來る處を、弓鉄炮にて大手負ニ射成す故、大口へ引退く、是を寔ニ安すれハ卵を以石を打か如く也と、人々申相ひにけり云々、

402 『箕輪伊賀日記』

一 一山口ノ足輕共、同十二月廿九日ニ無評議大口ノ城ノ麓へ差懸ル處ニ、求廣・大口ノ勢共モ三千計打出、黒煙ヲ立テ攻來ル、西原川口ニ市來備後守・平田加賀守

・伊集院刑部少輔一同ニ差忍へ合戦ストイヘトモ、敵大勢ナレハ打負テ一ツ枕ニ討死ス、其儘ニ攻崩し一山ニ寄來ルヲ、鉄炮ヲ以大凡手負ニ射成シケル故、皆大口へ引退ク、

403 『日向記』

一 同年十二月下旬ノ比、肝付ヨリ額娃九郎左衛門ヲ以申越レケルハ、此度菱刈ニ弓矢出來仕、比上ハ薩州ヨリ肝付ヲ可被責トノ風聞也、伊東家ノ夏ハ眞幸兩口共ニ手堅キ御格護ノ由候、肝付家ノ夏ハ要害三十ヶ所ニ及也、何茂番手入間敷城ハ一ヶ所モ無之、然間、肝付家ノ爲ハ加勢鉄肥口カ、不然ハ眞幸口カ、一方ニ御働可給由ノ使也、其比三位入道野尻表ニ發向有テ滞留也、然間肝付ノ使者ヲハ中途ニ留置、案内者計野尻ニ參上、此旨ヲ伺ケル、義祐急キ佐土原歸館有ル云々、

404 『國史』卷十 大中公 貫明公  
八 松齡公

十一年戊辰春正月十二日、伊東義祐軍篠ヶ峰、與肝付氏攻島津忠親於鉄肥城、北郷時久將兵數千、軍於酒谷、以爲鉄肥外援、據島津支流系圖北郷氏譜、島津内膳家譜、篠ヶ峰在鉄肥酒谷村、島津内膳家譜、以肝付氏爲有釣、按肝付甚

兵衛系圖、省釣者河内守兼續法名、兼續死於永祿九年、公與 大中此云肝付氏、當是兼繼子左馬頭良兼、良兼或作義兼

公 松齡公次於馬越、二十日、大口軍屯堂崎可四五千、

公與 松齡公督兵擊之不勝、退保曾木、據大中公・貫明公・松齡公舊譜 麥刈孫

太郎系圖、羽 此戰也、川上左近將監久朗還鬪甚力、身被

七創、數日而死、年三十三、久朗、忠克子也、久朗年十

八、時 公命以國老、固辭不許、乃就職焉、據島津支流系圖、川上忠克

見第十六卷 梅岳君貼久朗及新納忠元、鎌田尾張守 門尉左衛

大永七年、大永七年、政年・肝付彈正兼寬姓名於看經所壁、以祈永年曰、

島津家不可無此四人、據川上久國雜話、肝付典膳系圖、肝付兼寬

日久朗死、梅岳君貼四人姓名於看經所壁、蓋在去歲以前矣、就使在去

歲、則兼寬甫十歲、若使兼寬為甘羅・項彘之儔則可不然、口猶乳臭、

云當是兼盛、而錄其語者誤為兼寬耳、二十一日、北鄉時久與島

津忠親約期、夾擊伊東軍大破之、據島津支流系圖、北鄉氏譜、二月、公

以曾於郡坂上門十二段為霧島社領、據實明、八日、足利義

榮任征夷大將軍、據將軍 家譜、二十一日、北鄉時久遣兵送糧於

飯肥城、伊東義祐邀擊敗之、乘勝圍酒谷壘、據島津支流系圖、北鄉氏譜、

島津內膳家譜、壹、二十八日、公遣島津又五郎忠長・肝付

兼盛、詣新納忠元、與謀攻大口、忠元親導忠長・兼盛、

使覘城、送至小苗代原而還、過藥師堂操筆題壁、忽有呼

而走至者、曰寇至矣、君何不去、乃家臣久保勝八也、忠元題壁自若、徐書年月日訖、而大口兵適至、忠元且戰且

走、斬敵五人、身被六創、會市山兵來救乃免、公遣三

原右京・長谷場織部勢問、且視其創、據島津支流系圖尚久一

孫太郎・肝付典膳系圖、支流系圖、新納左京、流譜、新納左京・麥刈

盛作兼寬、今從肝付典膳系圖、蓋作兼寬者誤、其說見上、長谷場助六系

圖、六郎久純五世孫曰越前守慶純、慶純次子曰佐渡守匡純、匡純子曰

後守純辰、純辰初稱織部佐、長谷場久純見第五卷建武四年、小苗代原在

大口鄉地頭館東南、據島津支流系圖、島津尚

三月九日、寺山直久自羽月還、路遇大口兵、家臣二十人

死、直久被創、歸吉田城而死、據島津支 流系圖、二十三日、麥刈

氏・相良氏與澁谷氏合兵攻曾木城、宮原景種・佐多久政

閉城固守、三家引去、還襲市山城、新納忠元裹瘡臨陳、

遣吉田治部・西田主馬守白坂、本田掃部兵衛・長谷場彌

四郎宗純等守永福寺、三家引兵而去、據新納左京・麥刈孫太

系圖、下野守親尚弟曰九郎親年、親年之孫曰親廣、親廣稱掃部兵衛尉、

長谷場源助系圖、宗純、越前守慶純之曾孫、長谷場純見上文注、市山

城西有白坂口、永福、夏琉球太平島運組船飄流至加世田片浦、

寺在市山城西南四町、據實明公舊譜、琉球三司官水保十

具舟送還之、二年正月十一日遣鹿兒島奉行中書、五月、以山野

與相良氏以和、梅岳君之謀也、曰、爭地殺人、吾不忍也、

據大中公・實明公舊譜、伊東義祐圍酒谷壘、北鄉時久僅能自守、不能

救飯肥、飯肥被圍數月、糧食不至飢困益甚、據島津支流系圖、北鄉氏譜、

六月八日、島津忠親奔櫛間、伊東氏・肝付氏追而攻之、據島津內膳家譜、北鄉氏譜、公聞忠親急、遣北鄉紀伊守忠徳、令忠親謀

據島津支  
流系圖 秋七月十九日、忠親奔莊内、據島津内伊東氏取飯

肥、肝付氏取楢間、據島津支流系八月、大口凶徒變約營於

堂崎、伊東義祐應之屯桶比良、將攻飯野城、加久藤・馬

關田農夫揭竿從伊東氏、松齡公戒嚴、據大中公、松齡公舊

大口凶徒變約無所見、始末不詳、伊東義祐屯桶比良、喜岐彌四郎家藏

文書在八月二十日、松齡公舊譜、大崎原合戰記皆在八月九日、未知孰是

大中公舊譜無日、今從之、桶比良一名、義祐陰使間使之球麻告相

田原、在飯野城南一里有餘、係原田村、義祐陰使間使之球麻告相

良氏曰、近屯桶比良、將攻飯野、無間可乘、竊觀形勢先

下加久藤、後飯野可圖也、因移軍於柿木故壘、請君軍於

大明司壘、庶幾共成掎角之功、使者宿於球麻人皆越氏、

私語主人六郎左衛門、六郎左衛門者大河平隆次之姊夫也、

密遣多志田某、告遠矢下總守、下總守以告 松齡公、乃

遣中野越前守・伊尻神力坊守大明司壘、相良氏竟不敢發、

據松齡公舊譜、大河平隆次見上卷永祿五年、遠矢伊右衛門系圖、下總守

可山堅、莫彌氏支庶、舊跡見分帳、柿木壘在加久藤城南二十町許、大明

司山屬、皆越六郎左衛門遂降於我、與之大河平以爲隆次

飯野城、後、改稱左近將監名隆俊、據松齡公舊譜、大九月、征夷大

將軍足利義榮薨、據將軍冬十月、足利義昭任征夷大將軍、

同、伊東軍在桶比良、十一月、松齡公遣遠矢下總・黒木

播磨、將兵伏於本地原、出兵數人僞捕鶉者、以誘伊東軍、

乃保之左仁遠比乃由留左與、據本崎原御合戰記、本地原在飯野

之辭、麻左幾謂眞幸、遠計比良謂桶、郷原田村、伊止字謂伊東、女指斥

比良、伊比乃謂飯野、遠比謂飯野、梅岳君有病、大中公罷師

之加世田、留 公守馬越、據大中公、十二月十三日、梅岳

君薨於加世田、梅岳君始居田布、年七十七、法名梅岳常潤

在家菩薩、稱梅岳寺殿、亦稱日新寺殿、據島津石塔在日

新寺、據寬政四年中條二郎右衛門・滿富郷右衛門從死、

其外願爲殉者十餘人、遺言弗許、據梅岳初伊作善久求子

禱於金峯山、還遇白衣祝、告曰、當得佳兒、言訖不見、

内子新納氏夢金峯山化作白飯入懷中、有妊生相模守忠良、

實梅岳君、梅岳君身體長大、容貌跌麗、眼如明鏡、鬚如櫻

葉、同上、金峯山相 大中公、撫民人、平寇賊、功勞居多、

叙之、非專據一書也、在田布施郷好讀大學及六韜、據川上久著伊呂波歌

四十七首、准三宮爲跋、每首有宗養法師批語、其一日、

伊仁之江乃美知遠幾比天毛止奈江天毛和加遠已奈比仁世

寸波加比奈之、其餘皆言脩己治人之道、事天敬神之意、

據梅岳君舊譜、諸家知譜拙記、天文四年、平生嘉言善行、具在日新

近衛禰家准三宮、此云准三宮即禰家也、去君之薨僅三十年、所見所聞宜得其實、於今欲考君之言行者

菩薩記、日新菩薩記、日新寺八世住持泰圓所著、其書成於慶長二年、

亦頗有此、但其言主於佛耳、三男、長爲大中公、次忠將、季

尚久、忠將稱右馬頭、是爲垂水領主島津美作祖、尚久稱

左兵衛尉、是爲宮城領主島津圖書祖、據島津初梅岳君以



相州家後、兼主伊作家之祀、梅岳君卒、大中公以大宗後、兼主伊作・相州二家之祀、自是公家世掌伊相二家祭祀及菩提所修葺事、百世不廢、

據島津系圖、島津略系圖、按梅岳君自伊作家出爲相州家嗣、則伊作家卒也、故梅岳君兼主伊作家之祀、大中公自相州家升爲大宗後、及梅岳君卒後、則伊作家並無祀主、故大中公兼主伊相二家之祀

此二家者雖亡後、而其祀猶有存者云、三國寺社記、祠堂要覽、伊作家菩提所在伊作者四、曰多寶寺、曰天徳寺、曰善勝寺、曰西福寺、在加世田者三、曰日新寺、曰常潤院、曰淨福寺、在伊集院者一、曰梅岳寺、相州家菩提所在田布施者一、曰常殊寺、在阿多者一、曰大年寺、凡此十寺修葺、日新寺・常潤院係營造司、其餘皆係寺社司、而二家先祖年忌輒各命其菩提所修葺事、連使上香如大宗法事例、詳見國史館帳簿、其位牌影堂塔廟等事、又見廟堂要覽、和俗喪祭、一依浮屠氏法、於是年忌法事、謂小祥忌日爲一周忌、大祥忌日爲三年忌、自此以上爲七年忌、爲十三年忌、爲十七年忌、爲二十五年忌、爲三十二年忌、爲五十年忌、爲百年忌、爲百五十年忌、爲二百年忌、爲二百五十年忌、推至千年、皆以五十年爲期、然行五十年忌以上法事者、惟諸侯以上爲然、士庶人之於其先也、已過三十三年忌、則不復行法事矣、噫、

「正文在華水邸」

追而、先刻菱刈表今月二日御立之儀雖申候、求麻部内へ逆乱竿突世間、乍御太儀、典既様御自身勢へ与被召烈、不移時日飯野江被成御越着、彼境之様子可被聞召、片時も被急せ候之様堅可申旨候、敷祢殿・肝付彈正忠彼兩所へも同前申渡、爲御心得候、恐へ謹言、

正月三日

本田下野守 (親貞) 親判

平田美濃守 光宗判

「貴久公御譜中」

永祿十一年戊辰正月廿日、大口凶徒殆乎三千許發出堂崎、則義久・忠平已下若武者、不及時日干支孤虚王相之考、偏好對敵前向其地、已追一戰、而被懸立敵之多勢、我軍敗、而或被討殺、或被傷者其數多矣、于時忠平殿、敵兵爲勇邁前後左右、欲討殺忠平、忠平去敵僅一二間、然而

遙久無音之条、被飛脚候、然者備豐府被存、爲使長へ逗留候、雖然、可然様林御調之由承候、心案候、既肥之立柄、雖當時伊東手裏入候、不和候、又北原方大略知行之趣候、是非此砌出張候者、可爲不知行候、當時其方雖被属候、向後必へ可爲御怨敵候、當家之殊者不申及候、唯へ御遠慮專用候、此等之趣、倍宗綱申候之間、定可被申述候間、今又不能書認候、恐へ、

「永祿十一年之比」 宗綱へ 案文

川上出羽守殿 (忠光) 忠房 町田周防殿 御宿所

伊集院右衛門太夫 忠棟判

不亂一足、返合相戰者不知度數、由是我之軍漸渡大河、退入曾木、謂是非人天也、

永祿十一年戊辰正月廿日、守大口城球麻・葦北・八代之凶徒殆乎四五千許發出城外、定行伍窺佳期、在馬越之諸將見之則曰、徒見凶徒之出城外空之可乎、速前彼地不可不決雌雄時也、義久・忠平許焉、貴久公兼無評議、楚忽出張不叶軍法、使川上左近將監久朗留之、然而先陣已接兵刃、後陣不前、則前輩不得遁去、各進發、敵兵各解甲右袖、勵武威進來、我之先陣士卒失利退去、久朗返駕定必死向強敵、支飛田渡瀨、忠平主亦返駕爲殿、敵之銳兵別符安藝守・内田傳右衛門尉・岩崎六郎兵衛尉各言姓名、今三人不名、共六人爲前鋒、率三十餘人突來、忠平彎弓發矢、其矢莫不中凶徒矣、爰久朗之陪臣有福島筑後者、元來勢兵也、番大鏑所發之之矢、中安藝守之眉間倒伏矣、久朗被七個所之深傷、爲家人被扶持退其場也、忠平丁將渡羽作瀨之時、遠矢下總守・財部傳内左衛門尉・入來筑後守不遠忠平之傍、抽戰功也、伊集院右衛門兵衛尉久治馳到其場、遂田頭之合戰之際、從千阿弥堂徑路、數

多敵兵突進、欲較勝於一戰、於此之時、長野仲左衛門尉・下島甚右衛門尉不去一足遂戰死矣、只伊東右衛門尉・有川雅樂助從忠平其功甲諸將、由茲、忠平不死將逃其場、見此急難、則義久馳馬前其地增勢、太守貴久公亦不得已、而率旗下數千騎馳而見增其勢、懼其軍威也、敵兵不追跡進來也、貴久公旌旗之役梶原氏臆而不進、所以鳴其罪而追放也、

永祿十一年戊辰正月廿日、兵庫頭忠平僅率銳兵、三百人、欲侮大口凶徒、設伏兵發馬越也、于時所進來之凶徒數百、其中卒將六人爲先鋒、稱姓名別符安藝守・岩崎六郎兵衛尉・内田傳右衛門尉、今三人不名、自謂島津兵庫頭忠平奮威、川上左近將監久朗因轉守久國之祖父也臨飛田瀨之際、會別府安藝守、盡筋力以相戰、則彎弓發矢、其矢中安藝守立死畢、久朗於其戰場被數箇傷、故渠之家臣數多戰死也、我之軍失利丁引退之時、忠平殿焉、將渡羽作瀨之際、遠矢下總守・財部傳内左衛門尉・入來院筑後守等抽戰功被傷疵、忠平惜之、欲全諸軍、所近來者追之、屢難退之、強敵逼左右、我軍斬斃、濺戎衣於血、是誠血滴濺梵天

之謂乎、于時在義久主從軍島津左衛門尉歲久・伊集院右衛門兵衛尉久治聞此戰場之不利、驅馳來、則會強敵盡筋力挑戰移刻、又千阿弥陀堂徑路步卒數十突出合干戈、此時長野仲左衛門尉・下島甚左衛門尉遂戰死矣、伊東右衛門尉・有川雅樂助貞眞伊勢兵部少輔貞昌之父也、甲諸兵、以故忠平漸退入曾木城、於茲凶徒亦悉退散也、此日伯囿齋亦爲增勢、率旗下騎步忽以馳馬、爰有梶原某者、臆以不進、太守追之、耻其臆、所以誠後來也、

## 410 「左衛門督歲久譜中」

永祿十一年戊辰正月廿日、兵庫頭忠平率銳兵二三百、發於馬越城、欲侮大口凶徒、進向城下、凶徒之進來者數千、其中卒將六人爲前鋒、稱姓名曰、別府安藝守・岩崎六郎兵衛尉・内田傳右衛門尉、今三人者不名、於是忠平亦稱姓名奮威、川上左近將監久朗臨飛田瀨之際、會安藝守挑戰、則忠平彎弓發矢、其矢中于安藝守、立死焉オトリコロヒ、久朗亦被數箇傷、死于其戰場矣、陪臣西鄉新八見之、則衝入凶徒遂戰死也、忠平之軍失勢丁引退、忠平殿焉、丁此之時、敵軍競來高聲旬曰、使 兵庫頭疾走屠殺、以不得退去、其聲喧于慈之耳、於茲以戈擲之不刺、故不被干戈之傷、

聞此戰不利、歲久及伊集院右衛門兵衛尉久治發於 義久之旗下、騎駱馬驅馳至、而會強敵挑戰之際、不計從千阿彌陀堂徑路步卒數十突進合戈、由是長野仲左衛門尉・下島甚左衛門尉戰死焉、伊東右衛門尉・有川雅樂助貞眞甲于諸軍、是以忠平入曾木城、而後凶徒亦悉退散矣、此時 太守賜感牘曰、歲久駕川原毛馬、其働甲于諸軍、珍戴以藏置、至于子孫不計會回祿、悉失却焉、

## 411 「北郷時久譜中」

永祿十一年戊辰正月十二日、伊東氏陣于篠ヶ峯、以數千兵圍本城、城主 依之則遣北郷左近大夫忠增・同藏人久盛・同出羽守久藏其外宗徒之兵、陣于酒谷、同月、時久將數千騎陣于酒谷、同二十一日、本城與酒谷大冠期、挾擊伊東之軍大破焉、伊東臣落合右衛門太夫及谷別府新三郎・阿滿彌太郎・同彌九郎・荒武帶刀・小山田將監・馬渡長門守戰死、其外士卒死者居多也、同二月二十一日、欲納糧於本城、伊東修理進率精兵數千相迎篠ヶ峯、兩陣相接劔頭散火、縱橫突戰、味方敗崩、北郷圖書頭忠俊・同八郎久周・本田藏人親豐・土持攝津守賴綱・和田民部少輔・同息助六・財部權頭盛稔・島參河守・宮原福泉坊・

伊地知新左衛門・財部勘解由・落合將監・新納民部少輔・瀬戶山兵部・池上新左衛門・椎屋主水左衛門戰死、其

外兵卒死者不遺枚擧也、伊東之臣戰死者、落合又三郎・石野田與太郎・弓削吉次・同新七郎・松岡藤太郎・岩本

千十郎、其外兵卒不知數也、依之酒谷城亦雖危、時久極

自殺、以財部權頭爲介借、雖然權頭戰死故、以長井參河

守定介借矣、左衛門尉自扣刀指揮兵日夜警衛、而經同六

月、以故敵不得犯、時本城穀米單竭、而至割死人之肉、

依之島津右馬頭將多勢至于酒谷、雖議後援、前日伊東大

捷故、不得進兵、太守貴久公召北鄉紀伊守忠徳曰、無

奈忠親之危急何、請汝以計策議和、退飢肥・福島兵云云、

紀伊守受其命、乃至須木相議米良筑後守、同六月六日、

筑後守至酒谷調和謀、附飢肥於伊東、昇福島於肝屬、同

七月、泰心及息男朝久號豊後守朝久、母豊後守忠廣女、時率諸久他腹弟也、後移肝屬院平房也

兵退都城、其後時久留和田入道起雲家老於酒谷城、而退

都城、時法藏寺・鎌田駿河守附酒谷城於伊東、而歸都城

矣、

「川上因幡守久國自作之文也」

相良修理大夫義陽爲救菱刈大膳、大口城籠衆、貴久主

義久主馬越有同座、永祿十一年戊辰正月廿日、求麻手勢

三千餘自大口城打出、設備窺機、馬越諸將見之、敵偶出

城外者不幸乎、忽遂合戰可決雌雄云、義久主 忠平主

許之、然 貴久主召久朗曰、敵廻籌策可出張、味方無評

議日方不考、今日之出勢不爲甘心有嚴命、義久主已出

城門、久朗伸 貴久主之命、伊集院右衛門太夫忠棟瞋目

勵聲曰、先驅之勢敵間已近、無後軍者難逃、不性成人者

被停置、早速可有御出馬云、久朗曰、不性成者指某被仰

哉、於今日者參會隨分可致合戰、義久主馬廻步隨之、

敵見御旗解鎧右袖與僕、揚凱歌競來、我先手之勢失利敗

北、義久主進馬欲懸、久朗謂近臣曰、勢轡如本城可令

打入、某返合可死闘向敵、忠平主同返向敵、義久主

下馬步以爲殿、敵方別府安藝金鹿角爲打赤熊シヤククマ青進先鋒、

織田八郎右衛門・内田傳右衛門・園田日蓮・的場後藤・

丸目藏人、爭先三十許突懸、久朗捕鎌鎗、勵勇氣盡筋力

挑戰、忠平主窮養田術放矢、敵數輩中矢、久朗陪臣福

島筑後元來勢兵也、番大鎗射之、安藝中冑眉間倒伏、西

鄉新八打死、大迫郷右衛門被切左臂、久朗被疵者七个所、

依此戰、兩君無恙本城打入、敵爲除安藝騒動、得其隙久

朗負肩如本城逐入、久朗歸宿麿島、兩君使比志島宮内少輔所感軍功、久朗謹拜謝、又曰、忠棟所遂合戰乎否問、宮内少輔曾不爲見聞云云、久朗於將前堅申合間、定可爲合戰云、二月三日隕命、于時三十三歲也、法號隨岳岳良順、

413 「朱カキ」 「川上因幡守久國自作之文也」

其年孟蘭盆、伯圍主渡御久辰私宅、祭亡靈有連歌發句、トケン名ヨ入テノ後モ秋ノ月 被遊下、誠施遺榮者也、

414 「朱カキ」 「石同」

菱刈至治平、義久主命新納刑部太輔忠元、建立寺大口麓、號兵順庵、爲久朗菩提寺、寺社領欠落之時、此寺廢却、

415 「殉國名載抄」

永祿十一年戊辰

正月二十日、川上左近將監久朗 松輪公馬越城より菱刈氏を大口城に伏給ふに従ひ、公の師利あらず、本城さして退かせ給ふに及て、飛田の瀨に返戦し蒙深創、因て二月三日に死す、年三十三歳、 西郷新八 久朗臣にて、同しく死之、 長野仲左衛門祐爲・下鳥甚左衛門尉・蒲地越中守・有馬又次郎 以下三人、淨福寺戦亡牌ニ載す、 中島竹太兵衛・松

山三郎五郎・御中間十郎三郎・小倉利左衛門 以下の交名か末にあれば、此に置いて候考、 竹内十郎兵衛・小濱萬左衛門・杉本甚五郎・野畑拔太兵衛・大河平七郎左衛門・杉本源五兵衛・安藤千左衛門・前田彌七・吉岡五郎四郎・鎌田兵部 正月廿四日、馬越に於て戦死ト淨福寺戦亡牌ニあり、

416 「殉國名載抄」

永祿十一年戊辰

二月廿一日、或作正月、北郷圖書頭忠俊 時久の一族にて、酒谷城を成るを、時久の援兵に合て、伊東師と妖肥の條か、峯に戦ひ死之、下も皆同し、 中島善左衛門 忠俊の從兵にて、同しく戦て死之、 村萬左衛門 兵にて戦死す、 北郷八郎久周・本田藏人親豊・土持攝津介頼綱 或作守、 曾我弥九郎 親豊臣にて、坂元與市或亦兵衛とも、 和田民部少輔匡郷・和田助六匡望 匡郷の嫡親豊從兵也、 和田民部少輔盛稔 系圖に、此年二月廿一日、妖島三河守清則肥阿田城ニ於て討死とあり、 手塚玄蕃 本田親豊從兵、 松山助之丞 同上、 神崎丹後 或作丹波、同上、 園田源三郎 或作玄蕃、 宮原福泉坊・伊地知新左衛門尉 二月廿一日、隅州末 財部勘解由・落合將監・新納民部少輔忠藏 此年二月廿一日、隅州末吉戰死とも、 瀬戸山兵部・池之上新左衛門尉 或作池山、此年二月廿一日、末吉戰死とも、 椎原主水左衛門尉 或作榎屋、 財部湛盛・樺山大炊介・白谷宮内、

三月九日、寺山出羽守直久、寺山氏始祖越後守光久ノ養子なり、相良方伏兵に逢ひ羽月白木川原に戦死、自體には年月ナシ、吉田本城戦死とあり、

廿三日、佐多備中經久、佐多久政一族にて、宮原景種等と曾木拒ぎ、天堂か尾に戦て死之、に城守し、相良・菱刈・澁谷か攻るを

八月十九日、川上丹波守、伊作士にて、馬越の田中に戦死、堀之内二郎左衛門・是枝大膳坊鹿兒島去、同、

十二月十九日、中條次郎右衛門政義十三日、梅岳公御逝去により、此日市來にて

殉、満富郷八左衛門忠實同し、殉死、

417 永祿十一年戊辰正月廿日、忠平主羽作か瀬と云所にて

御合戦之時、戦功を抽つ、

遠矢下總守『良堅』  
○印、朱ナリ  
○財部傳内左衛門尉『盛弘』

入来院筑後守 伊十院右衛門

同時、義久主の旗下馳來防戦、

△島津左衛門尉歳久 伊集院右衛門兵衛久治

伊東右衛門尉 有川雅樂助貞眞

同年二月廿八日、大口小苗代原にて凶徒ニ會し防戦、

島津又五郎忠長 肝付彈正忠兼寛

新納刑部太輔忠元『拙齋』 新納右衛門佐久饒「初五郎右衛門」入道遊甫

鎌田尾張守政年『寛栖』  
市來住人  
面高眞連坊

い十院住人  
○田實右京亮「永祿十二年五月長野城戦死」 川畑藤七兵衛尉

春成外記『弓の上手』 鎌田壹岐守

税所右衛門兵衛尉 四本源太兵衛尉「太兵衛トモ作る」

久保筑左衛門「久保勝八行重トモ有之」 尾崎能登

同時、忠元江 大中様より御使者被遣候、

三原右京亮 長谷場織部助純辰

永祿十一年辰三月廿三日、相良・菱刈・入来院・祁答院

・東郷凶徒等、曾木の城ニ攻來ル時防戦、

○宮原筑前守景種「天正十五年三月三舟戦死」 ○宮原越中守「高原城攻戦死」

○佐多常陸守久政「山城守トモ」

凶徒不利、馬越城下を過、市山ニ到り白坂ニ防戦高名す、

新納刑部太輔忠元 吉田治部少輔

西田主馬允

「同年三月也」 永福寺に到り、凶徒の兵を防禦の人数、

本田掃部兵衛尉「親廣カ」 ○川野文蕃允「早崎陣戦死」

石神左吉 鬼塚源三

○間世田刑部左衛門尉 鎌田外記

長野民部少輔 濱田右京亮

上床源六兵衛尉 日高甚五郎

伊地知新三郎

## 『庄内平治記』

一 永祿十一年戊辰正月月上旬、伊東か一族詮議して、飢肥・酒谷兩陣之往來を絶んと宗徒の勢を催促するに、一族ニハ伊東入道喜運を始、加賀守・相模守・掃部介・大炊介・彈正忠・修理進・右衛門佐、年寄には稻津・落合・湯地・川崎・山田・荒武・津留・木脇、彼等を股肱の臣として、飢肥之本城・酒谷・市來・南郷、四の城を一ツニ合て、伊東の領地と成へしと競ふ、軍勢貳萬餘騎、同九日、首途の其日は水の丸ニ付て、十一日の酉刻ニ鬼ヶ城ニ着ニける、明けハ十二日、諸勢の手賦相定め、卯之刻ニ飢肥・酒谷の間成篠ヶ峯ニ陣取て兩陣の往來を絶、五重に塙を構えて、猶本城を圍攻んとぞ議したりける、去程ニ、本城にはかくてハ始終悪かりなんと、日置周防介忠達敵の城下を忍通りて酒谷の城ニいたり、北郷圖書頭ニ相議し都城ニ急ヲ告る、左衛門尉時久父の危急を聞ニ不忍、北郷左近太夫忠増・同姓藏人忠盛・同出羽守久藏曰下宗徒の勢を差遣し、酒谷に陣を張る、同月時久も數千の兵を引卒して酒谷ニ打越、飢肥の後攻を議せられる、同月廿一日、伊東勢三百餘騎伊東新六大將にて永吉口ニ責近く、吐氣

を三度そ揚たりけり、本城の勢是をみて、五百餘騎を魚鱗ニ備へ、眞鷲ニ切て掛り、追つ返つ戦ひたる、酒谷の味方はを見て、兼て相圖を定しかは透をあらせず、此方より同呼て掛り、本城の兵勢氣を増し、前後より攻けれハ、勇誇りし伊東勢忽ニ切立られ、山東ニ名を得たる落合右衛門太夫を始、谷刑部新三郎(別府)・阿滿弥太郎・同弥九郎・荒武帶刀・小山田將監・馬渡長門守、其外士卒の討るゝ者計るニ縦なし、去共、本城糧盡て軍兵甚苦む、故數千の兵を催し、土持攝津介頼綱を大將とし、同廿一日、糧を本城ニ入んとす、伊東修理を進、是を聞て、數千の兵を引卒して篠ヶ峯ニ相迎へ、味方の勢を支へらる、攝津介頼綱ハ糟毛の馬ニばれん鞍置、厚ふさ掛てぞ乘たりける、伊東が軍兵競進て味方の勢ニ入交り、劍頭に火を散し縦横ニ挑戰ふ、味方の土持攝津介・北郷圖書頭忠俊等、人は一代名は末代そ、命ながらへて名こそ惜しけれ、引な者共、と衆兵を勇て挑戦ふ、敵ニも木脇越前守荒手にて入替、猛卒の氣を勵し阿多越ニ切て出れハ、味方の勢四度路ニ見ゆ、敵軍彌勝ニ乘、揉ニもんで攻けれハ、味方の兵切負て悉く討れにけり、北郷圖書頭忠俊も打死也云々、本田

藏人親豊・土持攝津介頼綱・和田民部少輔等も討れぬ、和田か嫡子ニ助六と云ふ者拾八歳ニ成けるか、父と一所ニ軍陳ニそ趣ける、民部討れけれハ、今ハ何をか期すへきと五町計りを掛入ける、郎等壹人鎧の袖にすかつて、平に命を全して亡父の遺跡をも立らるへしと、様々に制しけれども、今此時ニ至て誰か一人逃るへき、十八迄齡を經る社目出度けれと、振切て馳出、敵の中へ突て入、和田助六と呼て、忽ニ打死す、壯年ニも足ぬ身の勇々敷も又哀れなり、其外財部權守盛稔・島三河守・宮原福泉坊・伊地知新左衛門尉・財邊勘解由・落合將監・新納民部少輔・瀬戸山兵部・池上新左衛門尉・椎原主水左衛門尉を始、味方の戦死敷をしらず、伊東か勢ニも落合又十郎・石野田與太郎・弓削吉次・同新七郎・松岡藤太郎・岩元千十郎を始、士卒許多打れる、故ニ酒谷の城危とへいひながら、左衛門尉時久再び露命を存へて故郷ニ歸らん事を思わず、今度伊東勢ニ對して、屍を山東の土に晒し、名を勇士の譽ニ残さん物をと堅く自殺を相究、兼而は財部權頭を介錯と定らる、權守打死せしかは、長井三河守を以介錯す、定て自分刀拔掛て日夜の警衛緩なく、同六月を過る、

本城いよ／＼糧盡て如何とすべき様もなく、口中に食絶れば、死人の肉を刻より外命を継へきやうハなし、故ニ嶋津右馬頭多勢を卒して酒谷之城ニいたり、本城の後攻を議せられけれ、前日伊東大利の故、兵を進ニ便りなし、時ニ太守貴久公、北郷紀伊守忠徳召て宜く、今忠親か急難を如何ともしかたし、願くハ汝等方便を廻し和議を調へ、飢肥・福島軍兵を恙なく退へしとの高命を承て、忠徳即須木にいたり米良筑後守ニ相議して、和融の行相調ひ、永祿十一年六月八日ニ飢肥を伊東ニ付屬して、福島院を肝付ニ与へ、同七月、豊後守入道泰心齋、息男朝久を相携へ、福島兵を引て都城ニ退去せらる、左衛門尉時久も家老和田越中守入道起雲を酒谷の壘ニ留て、都城ニ退去せらる、豊州の家臣瀬戸口源三郎秀安・塚田大隅某を飢肥の本營松尾城ニ、関鎖の役人と定らる、伊東か一族相模守・同右衛門尉・壹岐四郎左衛門尉相向て是を請取、酒谷之城壘をハ宝藏寺并鎌田駿河守にて、伊東ニ付与して曳退く、哀哉、豊州と伊東と相支る事三拾年、名惜ミ命を輕んす勇士と骨を山東の土ニ埋て、恩を泉下ニ報ル事數ふるニ幾そや、數年の軍勞一時に潰て、飢肥を伊東に付



属せしかは、死残たる者共ハ再ひ故郷ニ歸れ共、義を重んずる輩は先立て屍を晒し、佛たニも残らず、蝸牛の角の争の墓なかりける理りを今こそ思ひしられける、出立シ粧ハさしも優々敷かりしニ、歸來りし本意なきハ類ん方も非りき、さりとて存命せしものハ、吾身一ツ事ならず、討れし妻や子の嘆き悲むありさま、理りせめて哀也、

## 『年代記』

一 戊辰 永祿十一年六月八日、伊東エ飢肥渡、福嶋肝付へ渡、泰心都城ニ退、極月十三日、嶋津日新逝去、法名常潤、道号梅岳、年七十七、先公房様御舎弟一乘院御入洛、尾張織田彈正忠馳走、

## 『長谷場越前自記』

一 永祿十一年戊辰正月廿日、馬越之軍兵打出て、大口に懸野伏をさせらるゝ、敵勢ハ四五手程出合て、矢師稠敷仕る、敵方こわく見及て、味方の多勢有る中ニ進ミ出て、河上左近將監と名乗て、飛田の瀬ニ指勘へ、粉骨の合戦を被致て、一足不去ニ戦死也、懸りける処ニ、

敵ハ猛勢切着といへとも、御大將軍武庫様之御指勘へ被成ツ、矢たばねをときくつろげて御征矢を被遊、先手大手負に成しかば、少か程を引退く、此時ニ御方の人衆を御助け、其儘ニ御尻拂ひ被召てハ、羽作り瀬と云へる難所の大河を御渡し有りけれハ、遠矢下總守・財部典内左衛門尉と入来院筑後守御邊の御供被申、此外餘多の兵ものも御供ニ被參、鹿兒島衆も少々續き軍勞を被致、其中ニ伊集院右衛門兵衛尉と名乗ツ、でんどふの合戦し、相續武者衆迄及難儀處也、懸りける刻ニ千阿弥陀堂の小路に兵ものを被指せ、是を見て味方衆ハきおひを成てそ戦ひける、亦爰ニかたき猛勢懸來り勝負を決する處ニ、御大將軍兵庫頭義弘様の御指勘へ被成てハ、御太刀を被打せ、求麻・大口衆つき相ひ、世ニ無隠レ長鎌をつかひ懸け奉る、もろ手五尺ニ余る天月の御甲ニ、無隙打て乘せけれハ、御一大事と見得しかど、元來御面を振り給ず向ふかたきを討留て、逃る物ニ者手を負せ、敵數十人被討せ、御側ニて長野仲左衛門尉・下島甚左衛門尉無咎儀戦死を被遂、伊東右衛門尉・有川雅樂助御供を被閉目、誠ニ一騎當千と者懸る事をや可謂と、諸軍兵被申也、此趣を御

太將軍義久様ハ御覽て、由來御馬ハ逸もつ也、一文字ニ懸ケ付させ玉へバ、御供之軍兵も我も〜と防戦す、懸る處ニ、貴久様の御手勢數千騎を御見次被成者、各軍勢を被任、彼を見るより敵方ハ恐を成てぞ着留る、其日ニ御旗之役人ハ梶原名字の人なるが、御邊の御供ニ未練して、永代御内を被拂は、

## 『箕輪伊賀自記』

一同十一年正月廿日、馬越ノ城ヨリ打出シ大口ニ野伏セ懸ルニ、敵猛勢打出シ、敵モ味方モ差合テ烈シキ矢軍シタリケル、敵方強ク成ケレハ、慈ノ勢の中も河上左近將監ト名乗テ、飛田の渡瀬ニ差忍へ、合戦手を碎クト云へトモ、敵大勢なれば難儀の処ニ、兵庫頭差忍へ給ひ、矢だばねを解きくつるげ、少しも不動居給へハ、大將討せしと兵共立塞て戦へは、夫々敵も少し引退く、慈も相引ニコそ退ニける、忠平の今の武勢に多の慈助りける、其儘殿し給ひて、羽作が瀬といへる難所の大川を渡し給ひける、御供には財部傳内左衛門・遠矢下總守・入來院筑後守、其外究竟の兵とも數々参りける、鹿兒島衆も數人軍勢セラレケル、其中ニ伊集

院右衛門と名乗て纏頭の合戦セラレタリ、何レモ難儀ノ戦功ヲソ遂ラレタリ、斯ケル処ニ、又其後千阿弥陀堂ノ小路零陣士ヲ伏置て、慈競ヒ惱てミセケレバ、敵猛勢掛來り決勝負、零陣士をも軍トモセズ蹴立て防戦ける間、味方難儀ニ及ケル、兵庫頭差忍へ給ひ、合戦比類なかりけり、敵ハ大勢攻入〜戦へハ、慈躁乱ニナリ引退ケハ、忠平モ無力引玉フ處ニ、川涯ニ追詰討んとす、忠平の着玉ヒタル四尺余の天月の甲ニ鏑數多打懸ケレハ、大事限トミヘシカト、面モ不振戦テ打死セント宣ヒケル、久保・吉井十「本マ」など云勇士ノ者忠平ヲ引退カシ、カタニ引カケ河ヲ負渡シ退ニケル、長野仲左衛門・下城「マゴ」甚左衛門無比類防キ戦ヒ、即打死シタリ、伊東右衛門尉・有川雅樂助一命ヲ輕ンシ軍勢セラレケル、義久是ヲ見給ヒテ、元來馬ハ逸物ナリ、一文字ニカケ付サセ給へハ、軍兵不劣ト連ヒテ防戦フ、又貴久三千余騎ニテ見續玉へバ、慈競ヲナシテ防キ戦へハ、其ヨリ敵モ引退ク、其日ノ旗ノ役梶原ノ何某ナル者が其期ニ及未練シテ、永代御内ヲ被拂ケル、其場ノ烈シキコトトモヲ以テ今推察計リナリ、

422

「友野甲斐入道元眞奉公覺」

斐刈馬越之城詰之時合戰仕候、敵四人切出申候、内壹人討申候、證跡人四本越中守殿、

貳段

松の木田

壹段

田中園

壹段

萩原

以上

423

「正文在曾於郡花林寺」「義久公御譜中ニ在リ」

霧嶋領

大隅國曾於郡之内坂上之門之事、令寄進訖、猶坪付別紙有之、仍爲後代狀如件、

永祿拾壹年戊辰貳月吉日

義久(花押)

425 陽春之喜兆千喜萬悅幸甚々々、於其表永々滞在、殊更老

躰一段御辛勞令察候、就中此表往還不通之条、一入氣遣

之事、此方同前候、此旨則新納殿・兵部太輔殿・比志島

美濃守其外諸所人衆江可被仰舍候、餘無音之条、志計染

筆候、佳事、恐々謹言、

義久判

424

「正文全上在御譜中」

「上包ニ有之」  
霧嶋社領寄進狀

修理大夫義久

二月十六日

(權山善久)  
玄佐

霧島領  
坪付

大隅國曾於郡

一坂上之門

五段

於き田

貳段

岩尾田

壹段

池田

426

「大河平氏藏」

一所

日州眞幸院之内  
大河平

「上包ニ」  
玄佐齋

平和泉へ  
まいる

「うらニ」

永祿十一年戊辰

馬越より

永祿十一年二月吉日

(川上) 忠智  
(有川) 貞則

皆越六郎左衛門尉殿

427

「貴久公御譜中」

「正文在本田助之丞親長」

今年之御慶賀不易萬幸々々、抑舊冬以菱刈御知行御在軍之由承及候、千勝萬勢目出、就此等之義言上候義、後代ニ申談候、旁以同心忠貞不可有余義候、仍弓五張進上候、併奉表御吉例計候、宜預御披露候、恐惶謹言、

〔朱力平〕  
〔永祿十一年〕貳月廿一日

麟泉(花押)

嶋津入道殿  
(貴久)  
御奉行中

志岐兵部少輔入道

麟泉

〔上包〕  
嶋津入道殿  
御奉行中

428

「圖書頭忠長譜中」

永祿十一年戊辰二月廿八日、忠長及肝付彈正忠兼寬自馬

越城至市山城、議陷大口城之謀於新納刑部大輔忠元、而歸去之路有稱小苗代之原、忠元慕送于此、以將相別之際、步卒等馳窺大口城、則自城裏凶徒數百爭先發出進來、忠元・兼寬・忠長指揮、而進向相對、新納右衛門佑巳被傷矣、鎌田尾張守政年會于凶徒牧野次郎右衛門尉者挑戰、我兵眞運房放鉄炮伏牧野某、則田實右京亮衝入凶徒、斬獲於牧野之首、而後欲退入市山城、而敵強慕來、故忠元臨于白坂、會八代之勇士的場五藤之際、球麻之兵竹添丹後守者刺忠元之左脇、陪臣合力、以遁其難入城中、于時球麻之兵東藤左衛門尉・愛甲助三郎・佐牟田等欲越城壁、鎌田壹岐守・税所右衛門兵衛尉・四本源太兵衛尉、共以發向討殺三輩、由是凶徒退散者也、

429

「忠元勲功記」

一永祿十一辰二月廿八日、上様馬越城に被成御座、嶋津忠長・肝付兼寬を市山ニ被遣、大口城可被相攻御相談忠元江被仰聞、被罷歸砌、中途伏兵茂念遺敷、且兩城敵城之物見茂可被致ニ付、忠元小苗代原迄送り參り、互ニ相別候、以後忠元儀者藥師堂江立寄、暫致徘徊、徒然ニ、牡丹花下睡猫心在飛蝶与申文句を壁板ニ樂書仕

折柄、敵不意ニ駈出、物見之兵を追立、就中竹添丹後  
 与申者杯、一番間近く駈參候ニ付、忠元家來久保勝八  
 行重馳來、早々覚悟仕候様申聞候得共、右文句可書取  
 合ニ而、忠元少も不相動、尚靜に書終候を、丹後者幸  
 にして堂下に駈付、直ニ鑓を以左脇を突詰候故、勝八  
 側より見兼、則忠元を引落し爲申由、夫故右之樂書筆  
 先引捨候なりニ而、其板藥師堂江相納有之候処、先年  
 出火有之、燒失爲仕由御座候、其節忠元初而刀を抜キ、  
 忽向敵を切拂、別而防戰仕砌、川畑藤七兵衛・春成外  
 記等馳續、抽衆相救候得共、敵多く相増候ニ付、能程  
 ニ相戰可引取与見計申内ニ、市山江留主仕居候鎌田壹  
 岐・税所右衛門兵衛・四元源太兵衛等迎として馳來、  
 相共ニ抽戰功、其節忠元敵三人を打候、其内壹人者東  
 藤左衛門与申有名之士杯討取、又於上之原も貳人討取、  
 自身ニ茂六ヶ所爲蒙疵由、此日忠長・兼寛茂於中途敵  
 ニ出會難儀之躰ニ候処、馬越城より新納右衛門佐久饒  
 ・鎌田尾張守政年等人數召列させ迎ニ被差遣、皆能爲  
 被引取由、左候而、此度忠元戰功并數多蒙疵候事共  
 大中様被聞召上、則三原右京亮・長谷場織部佐兩使を  
 以、右之御褒美且手疵之御尋共、難有爲被仰下由御座

候、其後菱刈・相良之大將共、澁谷方江茂加勢頼遣、  
 同三月廿三日、澁谷方より多勢を曾木城に差遣攻掛候  
 得共、宮原筑前守景種・佐多常陸介久政等在番仕居、  
 手強く相防候ニ付引取、直に市山城江寄來る、其比迄  
 者忠元手疵未タ平愈も不仕候得共、則甲冑ニ而進出、  
 吉田治部・西田主馬ニ士卒相付、敵を白坂ニ爲押置、  
 且本田掃部兵衛・河野玄蕃・間瀬田刑部左衛門・鎌田  
 外記・長野民部・濱田右京・上床源五兵衛・日高甚五  
 郎・伊地知新三郎・長谷場弥四郎等を永福寺江差遣、  
 爲致在番候處、本田・河野・長谷場等段々防禦仕、追  
 却け爲申由御座候、

430 「在忠元譜中」

菱刈四郎との曾木就被差上、當時在所等無落着候、就夫  
 即達 上聞候、然者從最前抽被成御奉公候、爲其忠、花  
 北一所先々可被差遣之由被仰出候、早々可被仰達候、追  
 而御加扶持者從 上意候、聊疎儀有間敷候、恐々謹言、

十二月廿日

(伊集院)  
 忠金(花押)

(川上)  
 意鈞(花押)

(三思)  
 重秋(花押)

同二月廿八日ニ、馬越より大名衆一山へ見廻とて被打越、此次ニ敵の手振を見ん爲ニ、小苗代原を見切ツ、足輕衆を被差出処ニ、大口衆ハ是を見て、四千計を二手に分て懸け来る、去程に、小苗代原表を馬衆と加治木衆ニ市來・河邊・伊集院衆の請留て手を碎き矢師す、其中ニ肝付彈正忠諸軍兵に下知を成して辛勞を被致、於爰ニ新納右衛門佐疵を蒙り引退ク、然處ニて鎌田尾張守ハ河原毛馬に鞭打て敵相ひ、左右ニ懸分て下知をくわうる處ニ、敵方ハ是を見て射落させんとせしか共、運ハ天ニ有りけれハ、矢前を拂ふ計也、此事を無念にや思ひけん、肥州八代の住人に牧野次郎左衛門と名乗て、奥指の征矢ヲハケツヒける處ヲ、市來衆ニ山伏眞連坊と名乗て、鉄炮を取合せまん中打て伏せたりけり、此由を見るよりも、伊集院の住人ニ田實右京亮と名乗て、するくと走せ入て頸を取て指上る、求麻・八代・大口衆ハ、今日ニ手柄之程を見せんとて、一山衆ニ目がけして我先にともミにくゝんてそ攻來る、一山の城地頭新納刑部太輔とて、名譽の

武兵を被召置る、のかるまし處を兼て思ひ切れと、御先聖日新様の御詠歌なりとて、白坂口に指勘へ、肥後八代の住人に的場五藤と名乗て、眞先ニ切て懸る処を、新納刑部太輔請留て、栗田口作の太刀三尺一寸抜ひらき、鏢本をくつろげて、南無愛宕や八幡と引重てそ打たりける、さすかにこふ成る五藤方も打散れ、痛手負ひて退きぬ、續く兵もの落合てさんくゝに合戦す、新納刑部者表に見得る太刀疵を數ヶ所迄蒙らる、此場にての脇鎧者河畑藤七兵衛尉仕らる、春成外記者射通の征矢を被仕、去間求廣衆にハ、鐘前と聞得たる東藤七左衛門に相續きし若武者の愛甲助三郎・佐牟田名字同心にて、城戸の口に切入るを、鎌田壹岐守と税所右衛門兵衛尉・四本源太兵衛尉指合て打留る、夫が大手ハ引退き、搦手口に攻來る處を、矢爰作りて射る程に、手負ニ成てぞ開きける折節ニ、馬越が爲御使者と、三原右京亮并長谷場織部佐被指越、其時之上意ニハ、新納刑部太輔軍忠之御感也、亦一山ニ在番被致軍勞ヲ御礼ニテ、彼是以て忝覺得ける、

「イニ月」  
一同三月廿八日ニ、馬越ヨリ一山へ宗徒ノ人々見廻トテ

打越レケル程ニ、此次テニ敵ノ手姿ヲ見シタメニ小苗代原へ打出、足輕雜兵ヲ大口表へ差出シケル処ニ、大口ノ城ヨリ、是ヲ四千余騎ヲ二手ニ合テ驅出ス、一山ヨリモ新納刑部太輔打迎トシテ出ラレケルガ、小苗代ニ參り、南無藥師悲願たのもしやと伏拜ミ、矢立硯ヲ取出し、堂ノ軒板ニ歌ヲ一首書ントテ、壁ノ貫ヲフマヘ軒ニ取付書ントシケル処ニ、早敵詰入ル由告ケレトモ、遂ニ歌ヲ書取ントシケルヲ、郎等ニ久保筑左衛門・尾崎能登ナト云者、和殿ハ犬死シ玉フカトテ引落曳スリ退程ニ、敵即追掛タリ、白坂口へ差忍へケル処ニ、八代ノ住人ニ的場ノ五藤兵衛と名乗テ、眞先に切テ掛ル、刑部太輔受留テ、三尺余の太刀を抜ヒラキ、南無愛宕八幡大菩薩トテ、引重テそ討レタリ、サスカ剛ナル五藤兵衛打敷れて、痛手を負テゾ退ケル、刑部太輔モ五藤兵衛ガ打太刀ニ、面トモニ疵ヲソ儲ケケル、春成外記ハ弓ヲ得タル者ナレバ、矢束トキユルメテ、引詰差詰散々ニ射タリケレハ、數多敵ヲ射伏タリ、連ク軍兵落合テ散々ニ攻戦フ、求摩ノ鎗ノ達人ト聞ヘケル東ノ藤左衛門、相連ク若武者ニ愛甲助三郎・佐牟田守念ト名乗テ、慈ノ中へ切テ入ル、鎌田壹岐守・税所右

433

『全』

衛門兵衛尉・四本源太兵衛など究竟之兵、數度差忍テそ打留ケル、寄手敵を矢差作テ射ケル程ニ、悉く手負ニナル、夫々敵も引退ケル、

一偈又、一手二千余騎ヲハ、馬越・加治木・市來・伊十院・川邊ノ勢ヲ以請留メ、肝付彈正忠諸軍ニ下知ヲナシ、軍配ヲ調へ散々ニ攻戦フ、互ニ射合矢軍無隙も、於爰ニ新納右衛門佐手ヲ負テそ引退ル、然處ニ鎌田尾張守ハ河原毛ノ馬ニ鞭ヲ打テ、敵味方ノ間ヲ駈分ノ下知ヲカル処ニ、敵射落サント矢先キヲ揃ヘテ射ケルトモ、時ノ運ヤツヨカリケン、矢先ヲ拂フ計也、余リノ無念さにて、八代の住人ニ牧野次郎左衛門ト名乗テ、眼近ク蹈ヨリ奥差取テツガフニ、已ニ能引ケル処ニ、市來ノ住人面高眞連坊鉄炮ヲ取合セ、眞中打テ伏セタリケリ、伊集院ノ住人ニ田実右京亮ト名乗テ、スルノト馳出、首ヲ取テ指上ル、無比類コソ見ヘタリ、其日モ已ニ傾ケバ、互ニ相引ニコソ引レケル、

434

『長谷場越前自記』

一永祿十一年三月廿三日の事成に、求廣・大口に入來院

・ 那答院と東郷衆ハ、兵儀をして曾木の城を攻れ共、國中ニ無其隱兵物宮原筑前守とて、城地頭被差迫メ、同名ニ越中守とて是も劣ぬ武兵にて、大手搦手面ニ請取て粉骨を被致、御太將者佐多殿にて、若武者共を相具して澁谷黨之者共が攻來る處を散々ニ防戦し、手負死人さしすて、切り岸ニ詰上る處を、御方の兵もの懸相ひて、こゝかしこにて太刀打し、下知を成てそ勇ミける、城内衆を見るよりも難叶や思けん、澁谷衆を押へ勢ニ指置て、求廣・大口の軍兵者馬越の遠見を追拂ひ、城麓ニ鉄炮數を打こみて、無指る事引退き、一山城江寄せ來る、新納刑部太輔者あら手にておはせしが、敵の手立を見るよりも、疵養生ハ依時ニとて、物の具對て城戸口江被討出、其日の遠見來吉田治部少輔・西田主馬首にて有りけるが、若手の兵もの同心して軍させんと進出で、白坂口ニ指合て、吉田治部少輔、ニ西田主馬首者傳等ニ合戦す、續く兵もの各致手柄者、於此表も利有間敷と見切ては、永福寺口へ一手ニ成てそ懸りける、御方の軍兵我もくと進ミ出てソ矢師を致しける、其中ニ茂本田掃部兵衛尉・石神名字・河野

玄蕃允相徳と鬼塚名字同心す、市來衆ニ間世田刑部左

「イニ五」

衛門尉・鎌田外記・長野民部少輔・濱田右京亮・上床源六兵衛尉・日高甚五郎・伊地知新三郎同心す、懸りける處ニ、求摩衆と名乗て五拾騎計り之其中ニ、赤毛のかさに三か月打たる若武者が眞先に懸りける處を、各鉄炮取構へ、爰を専度と被打せ、然りと申せ共、永福寺へ攻入て彼大將ハ稠敷矢軍せらるゝ處を、本田掃部兵衛尉・川野玄蕃允・長谷場彌四郎進ミ出て防ぎ戦ひける程ニ、彌四郎の鉄炮にて敵の眞中打て伏たりけり、是を見て御方衆ハ打取らんとせしか共、後の多勢を入れ替へて、手負ハ取て引退けて、箱崎の八幡馬場ニ衆泊りす、慈の兵物相引ニそのきニける、かくて云々、

435

『笑輪伊賀覺書』

一同十一年三月廿三日ノ事ナルニ、相良・菱刈・入來院・東郷・那答院内談評議ヲ示シ合セ、曾木ノ城へ押寄ル、地頭職ニ宮原筑前守ヲ居へ置ル、同名ニ越中守トテ劣ン勇士アリ、相加へ置ル處ニ、一揆ノ与黨寄來ル由聞ヘシカハ、「此時家臣佐多彌中堅久戦死也」佐多山城守ヲ大將トシテ軍兵ドモヲ相込らる、澁谷黨ノ者共押寄、時ヲ作て攻懸る、慈モ思



ヒ儲ケタルコトナレバ、待受テ相戦フ、敵モ手負死人ヲ事トモセス切岸ニ攻登ル、城中ノ兵矢彘ヲ作テ、一人モ遁さしと散々ニ射タリケル、澁谷黨ノ者共悉ク手負ニナル、城ノ兵手痛ク防戦フ間、難叶ヤ思ヒケン、攻悪ンテそ引退たり、宮原カ殊成粉骨ナルトモ申ケル、澁谷ニ後見シテ居ケル求摩・大口ノ軍兵共、馬越ノ遠見ヲ追拂ヒ、城ノ麓ニ鉄炮ヲ打込せる、仕出たる事無クシテ一山ノ城ヘ寄セ來ル、刑部忠元也太輔先日ノ軍ニ手を負ひ養生の時分ナルガ、敵の行を見るよりも、物の具取テ堅メツ、城戸口ヘ打出ラル、其日ノ遠見番吉田治部少輔・西田主馬允若武者共ヲ相具して白坂口ヘ打出、勇リ雄ノ敵ノ先カケシタル者共ニ馳合テ相戦ヒ、各手柄高名セラレケル、敵養福寺ヘ攻入ケルニ、市來衆馳速ク、本田掃部兵衛・石神左吉・河野玄蕃允・鬼塚源三・長野民部少輔・日高甚五郎・伊地知新三郎ナト馳合防戦ケル程ニ、次第ニ慈馳重レハ、烈キ矢軍暫クシテ漸ク敵モ退ニケル、皆々辛勞是非ナカリケル次第也、

永祿十一年戊辰六月八日四月、去鉄肥於伊東、去福島於肝付、而與息男朝久俱退于莊内都城來、居于此者年久矣、

437 態染筆候、仍鉄肥ヘ遣候使者罷歸候、然者志布志可被去事者有間敷候、北郷殿ヘ末吉を遣候ヘ、左候ハ、志布志之番をも從北郷殿可請取候、鉄肥さか谷之番者、從此方請取候様にと、彼方談合ふし候て、返事承候、所々人衆召寄申聞せ候、各々不及之由申候、大事之思儀にて候儘、致相談候、一兩日以御越待居申候、恐々謹言、

卯月七日

貴久(花押)

(横山善久)  
安藝守殿

玄佐齋

平和泉へ

まいる

馬越より

永祿十一年戊辰

438

『正文在一乘院』

一乘院當住之後者、尊宿無是非可爲彼院主之事、遂閑談候了、仍爲後日之鑑札令献之處也、頓首謹言、

永祿十一年

卯月廿四日

(忠忠)  
日新(花押)

今泉寺  
寶生院

參

〔此御書、日新公御譜中正文在伊地知淨眞坊トアリ〕

439 〔貴久公御譜中〕

永祿十一年五月、山野・平泉・羽月之守兵等當欲相換之時、凶徒等設伏兵、聽欲討歸兵之策、則慮衆兵之遠急難、求和諧於球麻曰、昇山野於相良氏、而袋弓矢、相良氏諾矣、

440 〔長谷場越前日記〕

一かくて月日も過行者、同年の五月上旬ニ、山野・羽月・比良泉御番替ニ成りけらし、此刻を見切宛、大口よりハ懸野伏をぞ仕る、彼行を日新様者聞食及び玉ひて、先く山野を相良方ニ被遣、一節和睦を被成召、天慮を報る事有らハ、負て勝べき道理有り、御方を多く殺してハ、弓箭の御行悪かるべしと頻に被仰出て、如上意事成て、相良へ山野を渡さるゝ、然処ニ云々、

441 〔箕輪伊賀覺書〕

一五月上旬々、山野・羽月・平泉番替ニソ成ニケル、此刻ヲ見切ツ、大口ノ城ヨリモ野伏ヲソカケタリケリ云々、

442 〔義久公譜中〕

〔本文ハ四六〇号記事ノ前半ト同文ニツキ省略ス〕

443 〔全〕

一其後、相良氏・菱刈氏憑出水感應寺、請和諧、

444 起請文

一一如承候、世上何様ニ雖爲轉變、向後聊疎儀有間敷事、  
一就善惡、讒者讒言毎々有之習候欵、決実否可爲一味之心緒、最頼母敷候、此旨同意之事、  
一雜説之時者、互可被披合事、

若此趣有違犯者、

〔牛王〕

奉始上梵天帝尺四大天王、下堅牢地神大日本國六十余州三千余社、殊者當國鎮守等、開門正一位 諏訪大明神、別者隅州惣社正八幡宮 霧島六所權現 稻荷大明神 天滿大自在天神都類眷屬等可蒙神爵冥爵者也、仍

起請文如件、

永祿十一年六月十五日

義久(花押)

北郷左衛門入道殿

〔時久一雲〕

445

〔正文在國分衆東郷五郎兵衛〕

令入洛、柳營之儀申付候、然者殿料事、到諸國申遣候、

馳走可喜入候、猶藤孝可申候也、

〔永祿十一年カ〕

六月十六日

〔義久〕  
〔花押〕

嶋津修理太夫とのへ

446

〔義久公御譜中〕

依 將軍家義昭卿入洛、有殿料之催、去年六月十六日高

書、茲歲永祿十二年己巳正月三日到着、仍記左、

447

〔日新公御譜中〕

〔日新記ニ有之〕

永祿十一年戊辰七夕、

名高きもくたれるもなし七夕に

けふはかすてふよもの衣手

448

〔庄内平治記〕

〔永祿十一年也〕

同年八月、泰心齋北郷与肝付与和融の計策を運され、

同月八日、時久の一族北郷右衛門尉并土持美濃守、泰

心之使者餅原越後守入道、一路末吉ニ趣く、肝付家よ

り一族肝付左兵衛尉・渡邊隠岐守國合假屋本堂の邊ニ

て和融已ニ相調、同月廿日、肝付刑部少輔和議の賀祝

を告ん爲、都之城ニ來りけり、西之丸ニ而饗應し、同

廿四日ニハ、北郷彈正左衛門尉久藏返礼を告ぬ爲、串

良ニ到て礼謝せり、

449

〔在雜抄〕

伊東めか眞幸の陣ハをけひらに

いよのほしさにをひのゆるさや

右一首ハ、永祿十一年八月九日、伊東氏合心於相良氏、

一陣ヲ飯野邊地桶比良ニ設ク、或稱之於田原陣也此ノ時加久藤・

馬関田百姓ヲ心ヲヘンジ、爲仇敵欲欲犯飯野城、是以忠平

主彌堅其地御守被成候、時侮伊東氏、右ノ狂歌ヲフタニ

カキテ、密カニ往陣下立之云々、

450

〔貴久公御譜中〕

永祿十一年八月九日、大口凶徒變違於前約、築一陣於堂

崎邊頭、伊東義祐入道亦合心於大口凶徒、構陣柵於飯野

桶比良、以爲後攻、於茲乎、加久藤・馬關田之百姓等忽

以變心爲讎、欲侵飯野城、忠平聞此變事、則警衛彌以堅

固也、馳驍勇兵欲追捕比良之凶徒、而綿々霖雨未一日止、

以故不得遂其計策、與其徒經數日、不若先歸私宅各修兵

器、伯圍揚歸鞍之鞭矣、我之旗下銳士侮伊東氏、往桶比

良陣下、榜一首之狂歌曰、

伊東めか眞幸の陣はをけひらに

いゝのほしさにをびのゆるさよと、

451 「義弘公御譚中」

永祿十一年戊辰八月九日、伊東氏合心於相良氏、設一陣

於飯野邊地桶比良、或稱之於田原陣也丁此之時、加久藤・馬關田

百姓等忽變心爲仇敵、欲犯飯野城、陰謀已露顯、是以忠

平彌堅守其地、未嘗驚動、旗下之士侮伊東氏、書一首狂

歌於榜木、密往陣下立之曰、

伊東めか眞幸の陣はをけひらに

いゝのほしさにをびのゆるさや

永祿十一年八月十日之夜、球麻之士皆越六郎左衛門者、

渠之妻大川平九郎姉嘗嫁之、使多志田氏及佐渡丞者、通達遠矢下總守曰、

伊東氏忍間路遣使於球麻、有達相良氏之謀略密事、彼价

使寄一宿於皆越之屋、語曰、伊東氏已築陣於田原、即桶比良

犯飯野城未迄窮困自若、相良氏者進大明司可陣之、伊東

氏者進柿木古壘定之於陣營、先陷加久藤城、而後可設間

牆於飯野、遠矢氏即告之於我、是以同十二日、俾中野越

前守・伊尻神力房守大明司古壘、所以敵人之空謀計也、

是亦皆越氏之懇志非遠矢氏嘗運謀略者、豈得告報之如此

乎、

太守貴久公欲催精兵攻亡桶比良之凶徒、而綿々霖雨未有

止時、因茲所以籌策之不疾成也、

有告者、忠平聞之曰、球麻之士皆越六郎左衛門者、依妻

之有催促通心於薩摩、仍我潛俾一价達渠曰、汝屬我之旗

下、則昇大川平地、且後宜九郎之爲後嗣、六郎左衛門諾

焉、定參越之期日、皆越氏夫婦出山境河原口、則遠矢下

總守・田實伊豫守・橋口出羽守領鉄炮之士六十人、到于

河原口迎得皆越氏、而無恙來于飯野、不變兼約即昇大川

平地、爲九郎之後嗣改名稱左近將監、主彼古壘矣、

452 『長谷場越前日記云』

一同八月十九日、致手替趣者、大口より打出て堂崎之通  
道ニ陳取構へ支ける、同日ニ伊東方よりも、飯野の内  
桶比良と云へる處ニ陳取て、加久藤・馬関田表の百姓  
村放火シテ緩急を仕る、此由を聞召し、貴久様 義  
久様者御遺恨ニ思召し、菱刈表の諸陳より兵ものを撰  
んで御加勢をそ被成ける、就夫釣り仕し方をたくませ  
られ、伏勢をさせられて足輕衆を被差出処に、大雨降  
り來て更ニ手立も不成成、打續き霖雨にて、菱刈諸陣  
之軍衆も徒ニかへさるゝ、彼折節を見及んで、大口よ  
り打出て、田中河内に伏仕方をとくミつゝ、伊作衆の  
番替り、川上丹波守・堀之内名字を被打取者、馬越も  
も續き相ひ、鹿兒島衆ニ大膳坊致手柄戦死也、其敵  
も引退く、角て年月移り行、求廣・八代より大口ニ加  
勢とて、太山を打越してくだけたる難処也、長陣につ  
かれ宛、薩州出水の住僧ニ感應寺の西堂ニ頼ミ入り、  
和平の佐を言上す、度々ニ及ひける間、御憐愍有る處  
ニ、如何なる子細ニよりけるや、永祿十二年三月十八  
日云々、

一同八月十九日ニ大口ヨリ打出テ、堂崎ノ通路ニ陣ヲ取  
構へ、深水三河守ヲ大將トシテ、菱刈カ家來ニ足輕司の  
板橋半助・二宮囚獄介ト云者共ヲ案内者トシテ相込、  
折々野伏ヲカケサ、ヘタリ、同日、飯野ノ内桶比良ト  
云所ニ伊東勢ヲ打出シ陳取、加久藤・馬関田表ノ百姓  
村ヲ放火シテコソ居タリケル、其時イカナル者仕タリ  
ケン、落書シテ伊東陣ヘ立タリ、

伊東陣糧ハ盡タリ桶カ比良飯ノほしさに飢肥ノユル  
サヨ

伯圍入道殿仰ケルハ、兵庫頭ハ先飯野ヘ歸リ、眞幸の  
固メ仕候得ト有ケレハ、忠平ハ眞幸ニソ歸陣被成ケル、  
菱刈表ノ軍ヲ少々相分ケテ、飯野ヘ加勢トシテ遣サル、  
其ニ依テ伊東陣ヘ僞引陣士ヲ巧ミ、伏兵セントテ足輕  
共ヲ差出サル処ニ、大雨降り更ニてだても不成成、夫  
が打連ぎ降ケレハ、菱刈ノ軍衆も徒ニシテ少く被歸処  
ニ、其折節を見及て大口の城が打出、馬越・田中の河  
内に伏兵をそ仕たりける、伊作衆番替シテ通ケルヲ眞  
中ニ取込、川上丹波守・堀之内二郎左衛門をそ討取け  
る、聞之馬越より馳つゝ鹿兒島の住人は枝大膳坊無  
比類打死なり、夫が敵も退にける、日新入道敵の行度

々の仕方を聞シ召シ、此弓箭なからへへ、人へ多く滅

て後の爲あしかるへし、於長陳へ陳のつかれ人も退屈

あるべきに、敵其隙を打と云事あり、先一ヶ所をも相

良方へ相去、「与へた、又去渡カ」一節和睦して時刻を待玉へ、天慮宜キコ

トアラハ負テ勝へき道理也、能く談合仕給へと仰ける

處に、求摩・八代・葦北の大勢共難所を打越、長陳に

退屈して私語ケル、相良頼房も如何とおもひける処ニ、

伯圍入道日新の仰に隨ひ、先和平セラルへきのよし仰

出されけれへ、薩摩守義虎嚙として野田の感應寺の和

尚ヲ以、山野を相良ニ渡され相去、和儀の調法ヲ仰ラ

ルレハ相悦ヒ、和議とそ成ニケル、

454 『伊作善勝寺由緒』

一 鎮守水天

右、菱刈・大口江御出馬之節、日新公御勸請、須

川之水天之由申傳候と、旧記ニ相見得申候、

奉勸請、水天願主島津藤原朝臣日新、右意趣者、菱刈

先陣之時、洲河水深人馬不得渡、日新馬上閉眼奉誓願

神、一夜水浅處燈不知其數和光、渡軍士菱刈城絶落、

其誓願之力弘世於三國依然、水神於伊作善勝寺仁奉崇

當家後々末代之守神、島津兒孫堅固可奉守護者也、

永祿十一年戊辰八月廿二日 日新

右、日新公御筆棟札之由申傳候事、

455 「貴久公御譜中」

「正文在蒲生新十郎清貞」

態用一書候、仍去年以來無替之沙汰、番御閉目無比類存

候、就者頃替之儀承候、屋形江以談合可致其校量候、

然共此刻之事者、被差延候之様御分別可爲肝要候、猶巨

細從馬越可被申達之条、令省略候、恐く謹言、

九月十二日

(貴久)  
伯圍(花押)

「上書」  
蒲生美濃守殿

伯圍

456 「北郷時久譜中」

永祿十一年戊辰十月、泰心調北郷家與肝屬氏和謀、此由

達 太守公賜御内書、有正文、左記之、

457 其境、与肝付和融之企有之由示給候、尤肝要候、然者對

此方可有鬱憤之由、彼方被存候へん、至當家向後於眞実

之入魂者、聊以雀執之儀有間敷候、此旨爲御納得候、恐  
と謹言、

十月二日

義久(花押)

北郷左衛門尉殿(時久)

「上包」  
北郷左衛門尉殿

義久

458

「御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

任兼約、今度祇答院繰替之儀頻雖承候、此節依難成、來  
歲迄延引之段納得尤肝要候、來秋移之事、聊相違有間敷  
者也、仍後證如斯、

「朱力事」  
「永祿十一年秋」拾一月十九日

義久(花押)

(義弘)  
兵庫頭殿

459

「貴久公御譜中」

牛屎院大口之凶徒漸増勢之際、老父日新齋罹病痾逐日重、  
由是太守義久主在馬越城、使諸將不忘諸所警衛、伯圍十  
一月去菱刈到加世田、侍病床獻良藥禱爾于上下神祇也、

凶徒窺得其間隙也、發出騎步侮我師旅、以屠殺川上丹後  
守・堀内某、此變事達馬越、則勇銳之士殆乎五十騎許馳

460

「義久公御譜中」

到其場、已對凶徒兵刃相接、悉筋力以挑戰、丁追退逆徒  
之時、大善房遂戰死矣、其相良氏・菱刈氏憑出水感應寺、  
求和陸者再三、雖然未成之際、十二月十三日、日新齋逝  
去、享年七十七、法號梅岳常潤在家菩薩、愼終葬之以禮、  
而後日日期來期辰巳時、詣影堂備香花、致莊嚴讀經致不  
怠也、翌年正月、迎四七日忌、折一朶梅花獻之於靈前、  
詠一首和歌曰、

春またきたくひはあらしたをれとて

ほとけのためにさくやこの花

貴久

在大口之凶徒漸増其勢、屢逼我陣城也、丁此之時、祖  
父日新公曰、動及合戰銳士之遂戰死者多矣、是亦不憚我  
心、許少地於渠、爲和睦者可也、由是界山野於相良氏、  
和平既成矣、雖然永祿十一年戊辰中秋、匪畜變意築一陣  
於堂崎通路、所以平泉守兵之絶通達也、且復設伏兵於田  
中川内、屠殺伊作之土川上丹後守・堀内氏之往平泉也、  
我之士卒發於馬越到於其場、追退逆徒矣、其後相良氏・  
菱刈氏憑出水感應寺、請和諧者迨再三、而未許之際、十  
二月十三日、日新公逝去也、伯圍齋欲侍 日新公病

床勸湯藥扶起臥、先是十一月、去菱刈到加世田矣、

「日新記ニ有之」

永祿十一年戊辰迄十二月、罹病痾有少惱、而起居不安、以嘔詠矣、

いそくなよまたとゝむるなわかこゝろ

さたまるかせのふかんかきりは

聞此歌、近臣等拭淚伏地痛悲無言、雖然每日政行不怠、

自當初至今日迎父母之忌日、則請龍護山保泉寺之現住及

伴僧共十口、正衣冠候手長、每月一日、迎故養父大年道

登月忌、七十七歲之老病身不違威儀、為近臣得扶助、候

牌前為手長矣、同十三日時天、備立花燈明香爐闕伽水於

几上、近臣等如例置我前、則燒香奠水収身心觀念觀法、

而後召良臣、唱辭世之一頌曰、不來不去、四大不空、本

是法界、我心如同、渠則示之於群臣、各低頭流淚、少焉

雖進良藥不得嘗、掉頭辭焉、吟和歌曰、

くへはくふくハねはくハすもるともに

たかなやかふや犬や木のきれ

と吟詠者勵矣、雖然、滿座男女惆悵、而不覺之、以又哺

良藥、即吐哺吟曰、

ゑんどんのしにいたらんとするものを

物くはんくくとゆふ人は誰そ

及此之時、太守伯圍舉赤面搗痔子曰、男女共去其側、仄

聞問曰、其言何乎、群臣報曰、太守曰、男女共去座側、

於茲半死半生曰、各勿去、生死二度大事、人皆有之、勿

歎勿辱、忽卒、實永祿十一年戊辰十二月十三日也、享年

七十七、法號梅岳常潤、稱在家菩薩、號梅岳寺殿又日新

寺殿、

同月十九日寅時、世續奠文已始、而未時赴茶毘場、其莊

殿甚以美麗、龕寄佐多殿・北郷殿也、諸佛事既終、而後

導師俊安雄和尚拈火云、富潤屋蓮經壽身、文經武緯愜天

眞、心頭性火發明後、打一圓相拋擲云、三教功名屬一人、

次念誦諷經了後、師拶云、百骸俱潰散、一物鎮長靈、作

麼生是一物、為万物之根源、為天地之太祖、

「日新記ニ有之」



家臣欲追跡殉死者有十有餘人、雖然、太守加禁遏者孔以嚴重、若有犯制禁者、可斷絕其後嗣、立高札於道路之巷、因茲各止殉死、唯中條二郎右衛門自殺于市來、滿留郷右衛門自殺于加世田、法名光隣道心、共叙上座也、件之兩輩達于 賢君之聞者二十年來、故非制之限、而許渠等之死、同火葬于加世田也、

464

日新公祭文

代賢和尚

〔考攷〕

維永祿十一年著雍執除大品中旬之始、先孝日新寺殿梅岳常潤在家菩薩久罹（天災）微室、唱無聲三昧於國府之甲第、越同末闕逢敦牂、依法闡維孝子藤原貴久就于駄都場處、備陽茗蔬果之奠、致賽祀於龕帷之前、其文曰、  
嗚呼哀哉

儒門君子

皇家耆英

太王臺迹

至德至誠

季歷勳位

惟一惟精

無亡世孽

有與邦禎

移風易俗

立家顯名

嗚呼哀哉

童蒙及十有三之甫

先君讓薩隅日之令

不父誰迴謀略

莫公誰調清平

寒知松栢

亂見忠貞

選退不肖

厚進聰明

戀夷齋遜

聞虞內爭

嗚呼哀哉

雖粘病席

不紛眞正

夜禪達且

朝誦闌更

賢孫賢子

難弟難兄

挑得佛祖法燈

照破有無妄情

生前積善運命唯計天上白

玉京

沒後冥福

覺位必遂西方寶樹城

雪覆奕葉

雨催花榮

嗚呼哀哉

尚亨

465

〔日新記二有之〕

一七日之中陰牌前殿飾以錦繡綾羅、請一百八十餘口之比丘、看讀大乘法華頓寫禪話善助既畢矣、如追悼詩歌不知幾百千、所以不遑記之也、

466

〔日新公御譜中〕

〔正御影川邊玉泉寺有之〕

辭世之高韻云尔

菩薩眞贊奉次

梅岳常潤在家

三教成

一同 通達玄々理

釋部竅空々

儒門君子翁



「朱カキ」

「右ノ尊影、高サ壹尺四寸六分計也、右リニ御向候也」

「張紙」

「儒門君子翁、釋部敷空ノ、通達玄々理、三教成一同、トヨムベシ、

梅岳常潤在家菩薩、風餐率次辭世之高韻云尔、トアルベキ也、明治

四十三年六月六日記ス、新編島津氏世録支流系圖忠良第三ヲ参照ス

「本ノマ、一」

「樺山玄佐日記」

一頃日日新様御不例以之外、其上羽月之通神殿と云樟、

弓箭少靜なれハ歸馬越へ參、其時霧島法印へ玄佐申旨

ハ、今度御弓箭落着、差霧島へ曾於郡御預進候なれ共、

不被成御便、小くほ名を可致進定此等之儀守護爲御進

宮可有御祈念、以後者奉頼候由を申定、加世田へ參、

後又宗儀「曾木」へ御番、其内永祿十一年雪月十三日、日新様

御遠行、伯圍様者就此儀、十一月の加世田へ御越云々、

「御文庫三番箱一卷中」

「日新公御譜中正文在加世田  
衆河村覺右衛門秀屋トアリ」

梅岳常潤在家菩薩と申ハ、祖父相模守忠良公文武二道

の理明らかにして、薩隅日を掌に、治世の風をふかせ、

年ひさしく榮花にさかへ給ひ、内にハ御心さし直にして、

諳禪道に心「本ノマ、一」入道日新齋號御名、和尚の位、世に隠れな

し、予またいとけなかりし時より、おほふはかりの袖も  
はたはり、廣く夏冬をはくくみ、朝にハ□の窓をひら  
き、夕にハ弓馬の道を教へしなど、みな夢のやうにて、  
二もなく三もなきに、肥後國堺在陣暇なく、遠路を隔し  
に、暮秋の比より病床に臥給、雪月十三日、薩州加世田  
といへる所にて、燈のやうに消果給ひぬと告しらすに、  
空を踏心ちいへはさら也、おもひのあまり愚なる心みし  
かき筆の海ハ汲盡しかたきを、けに五牀のかたちと聞よ  
り、一首をつらね手向たてまつるものに南、

修理大夫義久

けさは日のあらたなりつる影もはや

西なる空に雲かくれつゝ

永祿十一年拾二月廿一日

「右正文ノ儘写ス、参照スヘシ」

（本文書ハ四六八号文書ト同文ニツキ省略ス）

今日ハ日の新なりつる影もやハ西成空に雲かへれつゝ

「雲かへれす」本マ、一

尚々飢肥福嶋堺、當刻無替儀候、然共福嶋浦於都井  
勝利候、敵七十人ニ及討捕申候、爲御心得候、

先度者、以一翰申入候之處、其後預御返札候、令拜領候、

前陸奥入道伯圍

仍御屋形様此方御光儀候条、爲可得貴意与風參上申候、

然者弓箭之御相談最中候、爲御心得申通候、隔遠方之事

候、毎事可被添御心事頼存候、猶期後音時候、恐惶謹言、

〔永祿〔六年九〕

五月二日

〔北郷時久〕

一雲〔花押〕

喜入式部太輔殿

御宿所

471 昨日爰元へ參着候、其後あまりく不通罷過候間、令啓

候、今程何条子細候哉、御隙之時分□□くおほした

ち候へかし、ふるき物語共申候たく候、仍見來候条、乍

輕微にくのえた二令進之候、誠く無御隔心儘之儀ニ候、

猶期面謁□時候、恐く謹言、

三月十一日

忠平〔花押〕

喜入攝津介殿

御宿所

472 「貴久公御譜中」

梅岳常潤在家菩薩は、永祿十一年十二月十三日、はかな

くならせ給ふ、あらたまりぬる正月の末の比四十九日な

りけれハ、南無地藏菩薩を句の上に置奉ならし、

なミたこそことハりしらね世中に

さらぬわかれのなからましやは

昔みし面影はたゝそれながら

それといへんもさすかなりけり

千代もとて祈りし親の別より

なにをよすかの我身ならまし

扱も春かけて難面しら雪の

のこるを見ても無そかなしき

移りゆく跡の日數に浅からぬ

おやの恵ミそ猶しられける

程そなき昨日けふかと思へとも

三十四日に餘りぬるかな

更にたゝそこともしらす終もなき

けふりそ人の行末のそら

つくくと思ふにすこし慰むは

みたれぬ人のをハリなりけり

473 梅岳常潤在家菩薩ハ、永祿十一年戊辰十二月十三日、は

かなく成らせたまふ、新玉ぬる正月の比四十九日なりぬ

れハ、南無地藏菩薩と句の上ニ置、手向奉るものならし、

前陸奥入道伯圍

涙こそ断りしらぬ世の中のさらん別れのなからましやハ  
むかし見し面影ハたゝ夫なからそれといはんも流石成け  
り

千代もとて祈し親の別より何を我身のすすかならまし  
「イよすかの我身ならまし」

さても春かけてつれなく白雪の残るを見てもなきそかな  
しき

うつりゆくあとの日敷に残るらん親のめくミそなおしら  
れけり  
「イけき」

程そなき昨日けふとハ思へとも三十四「四十二」によけしにあまり  
ぬる哉

更になゝそこともしらす終もなきけふりそあらす果もなき  
つゝくと思ふにすこし慰むはミたれむ人の終りなりけ  
くん

「昔年写し置たるは異同多きニより、御譜中より此に写して参照に供  
す、伝写の誤あること如是類多し、推察あるへし、季通記」

474 「國史卷之十八補注」

永祿十一年過藥師堂、小苗代原今有  
藥師堂、土人相傳以爲自古有之云

(表紙)

後 舊記雜錄 卷五

貴久公 自永祿十二年  
 義久公 至同十三年  
 義弘公

475

「國史 卷十 大中公 實明公 八 松齡公」

十二年己巳春正月十一日、琉球三司官遺鹿兒島奉行中書曰、去年夏、太平島運租船、因風勢不便飄流、至加世田片浦、貴國厚加存恤、送還人口、感激不盡、爰遣天龍寺拜謝、據實明 相良氏・菱刈氏因出水野田感應寺求和、二十日許之、據大中公・實明公舊譜、菱刈孫太郎系圖、感應寺在野田郡、其後分置野田郡、在寬永五年三月十八日、蒲池越中守往平和泉、至大口城下、相良氏臣深水頼兼殺之、及其從者十有七人、由是和議復敗、據大中公・實明公舊譜、菱刈軍攻羽月城、破其外郭、島津義虎權請代、公遣肝付兼盛・新納忠元代之、使又七郎

家□守市山、據大中公・實明公舊譜、新納左京・肝付典膳系圖、大膳系圖、其兼盛・忠元至羽月、與家□謀攻大口城、同夏四月十四日、公使喜入季久領菱刈院花北名、賞功勞也、

據島津支流系圖、郡村高辻嶮、五月六日、兼盛・忠元遣大野駿太良院有花北村、今屬大口郷、

河守□宗・宮原景種、伏于戸神尾及稻荷山、家□傳于大口城下致師而還、城中出兵逐之、至戸神尾西、家□還住拒之、二伏並興、夾擊敗之、據大中公・實明公舊譜、島津支流系圖、戸神尾在大口郷地頭館西北一里餘、今大野□宗者島津忠悟稱戸神岡、係平和泉村、羽月郷有稻荷山、

之孫也、據島津支流系圖、永祿元年以後公族各以其邑爲氏、不復稱島命□宗、改島津氏、爲大野氏是、諸將攻那答院長野城、那答院新兵衛尉禦之、二十五日、城陷、伊東軍聞之懼、秋七月十四日、棄桶比良壘而去、據大中公舊譜、木崎原御合戰傳云、永祿十二年、那答院長野城陷、伊東軍失其後援、七月、茨田原而去、田原即桶比良、一說聞伊東修理大夫死而還、修理大夫、義祐嫡子、壹岐彌四郎家藏文書、永祿十二年七月十一日、伊東義益卒、伊東軍棄壘而還、改撰諸家系譜、義祐嫡子名義益、稱左京大夫、而木崎原御合戰傳、作修理大夫者、蓋傳聞誤、伊佐郡曾木郷長野村有古城城、名松尾城、在地頭館西、

南三里餘、土人相傳以爲那答院新兵衛尉所守即此、八月十八日、公與 大中公攻大口城、據大中公舊譜、初相良氏國老以兵八千成大口城、死於戸神尾之敗者一百三十餘人、乃相與謀曰、今日之事、所以爲人則善矣、非吾之利也、且島津殿者頼朝公之後胤也、鎮西之大國也、波久世宇之戰、微島津殿

之力、相良氏安能得八代、今者縱不能酬德、而爲之仇乎、

朝公之後胤也、鎮西之大國也、波久世宇之戰、微島津殿

於是遣使乞和曰、願以大口獻君、且使菱刈氏領平城足矣、

公許之、據大島盛太夫家藏文書、大中公舊譜云、球麻、八代兵三百人入守大口城見上、此云國老以兵八千成口、則非止三百人也、夫以八千人成之、而死於戶神尾之敗者、僅一百三十餘人、今據乙和者、蓋在於相與謀曰云云而已、未必懲於一戰之敗也、波久世字之戰別無所考、平城依原文、蓋二十六日、賜菱刈鶴千代本城、曾木、據實明公謂平院之城邑、 衛譜、菱刈孫太郎系圖、二邑皆、衛譜、菱刈孫太郎系圖、二邑皆、 平院即太良院、鶴千代、重猛之子也、據實明公謂平院、平院即太良院、 九月十日、相良氏以相良帶刀長、深水太郎左衛門尉爲質、

公以鎌田刑部左衛門尉政廣・本田新介爲質、十八日、

二公入大口城、以新納忠元爲大口地頭、使鎮牛屎・菱刈

兩院之地、據大中公・實明公舊譜、新納左京系圖、島津左衛門家藏年

代記、相良氏以東帶刀、深水太郎左衛門尉爲質、本田新助

系圖、本田兼久次子曰親信、親信子曰兼恒、兼恒第三子曰彌次郎、彌次

郎孫曰親良、親良始稱新介、後改甲斐、兼久見第七卷永和三年、舊譜、

忠元與彌禮氏盟書、尚稱刑部太輔、則任武藏守非是歲事也、

年之子也、政年見上卷弘治三年、 此行也、松齡公將發、夢

所乘馬折足、使替者眞成占之、賀曰、克矣、公問其故、

對曰、所乘馬折足、則加知矣、果克、據木輪原御合戰記附錄、

徒字、克字、和訓皆曰加知、故扭

冬十月九日、公賜肝付兼盛曾於郡上三臺堂名、

賞戰功也、據實明公舊譜、肝付典勝系圖、伊集吉左衛門家藏文書、

三臺堂六町、下三臺堂六町屬桑東郷、郡村高辻帳、桑原

郡兩郷有三體堂村、按三體堂村與曾於郡接界、 十一月十三日、公以向島赤生原塩

屋一間、爲妙谷寺領、據實明公舊譜、郡村高辻帳、向島郷有赤尾原村、 十五日、以曾

於郡小窪名爲霧島社領、同上、 是歲賜樺山幸久横川、以代

小濱堅利、據島津支流系圖、

476 永祿十二年己巳

正月三日、上野源十郎市山口に於て戰、桂常陸守内衆一人死、以下同し、 川上右衛門・平田新左衛門内衆一人、

三月十八日、蒲地越中守主從十七人平泉にて戰死、三月十三日、堂崎とも作る、 兵部左衛門景次菱刈亂ノ時平和泉戰死とあり、年月なし、此に置換考、

五月廿三日、伊地知四郎左衛門尉重次數根にて戰死、年三十六、

二十五日、貴島源五郎那答院長野城を攻之、仲俊坊なり、市來士

稅所宮内少輔・深野平六・村原新介・村原左衛門五郎介

弟、吉田備前守清正・有馬山之丞純喬豐前兵衛字也、 上床源六

兵衛尉或兵衛作、加治屋新左衛門尉・岩下主殿助或玄、尾

上五郎・田實右京亮伊集院士、 宇都彌左衛門宗時子孫藤、肝

付權介兼致兼演弟にて加治木士なり、 有馬千次郎千或作與、新、河上次

郎左衛門尉年家人道舟伴子孫高岡士なり、 新納兵部左衛門尉・

安樂兵部左衛門新納五郎右衛門久饒の臣、 勝目宗左衛門下

の交名長野戰死の中に有り、此に置て考を竣、 長山源三郎・福崎越中・山田源弥

左衛門・木場清左衛門・築地新五郎・弭田帶刀、

十一月廿七日、種子田奎之助秀經入來川床城主にて蒲生新

留越に於て戰死、公室の

敵方歟、

歟考、

「新納旅庵譜中」

少之時已薙髮爲時衆、名長住、永祿十二年己巳十七歲、出加世田赴上方、爲遊行上人之屬從、經歷諸州者實十有七箇年、上人感數年之順行、補肥後州八代之莊嚴寺住持職、而看當寺矣、

478 「御文庫拾六番箱三卷中」

御尊札髓令披見候、先以新春之吉兆萬福多幸、猶以不可有休期候、隨而去年初夏之時節、當邦太平嶋之百姓等、就年貢々物之儀渡船刻、被放逆風失方角、貴國加世田片浦津江致流着之処、被加御憐愍、忝蒙撫育、剩遠遠之海上、彼流人等無相違于球國被送届之段、大慶每度御懇之至、誠往古之堅盟有連續者也、弥々兩國可申通事所希候、依然爲使節差天龍寺僧官令渡船候、并勅書此等之趣、禮儀之通具御披露所仰候、將又中紙九束髓受用候、從是茂鹿綿九斤令進之候、表祝儀計候、恐々謹言、

大明隆慶三年正月十一日

〔朱イン〕

三司官

鹿兒嶋

御奉行中

御宿所

追而申候、雖輕微之至候、從國王綿織物六端被進之候、聊祝礼計候、恐々謹言、

隆慶三年正月十一日

三司官

鹿兒嶋

御奉行中

參

鹿兒嶋

御奉行中

御宿所

琉球

三司官

〔日本永祿十二年ニ當レリ、義久公御譜中正文有之トアリ〕

479 「貴久公御譜中」

相良氏・菱刈氏舊冬請和諧者再三、然而老父逝去之際、諸般紛紜、是以未成、翌年永祿十二己巳正月廿日決定、應和睦之求、然則士卒往還不可有障導、此年三月十八日、蒲池越中守當往平泉之時、相良氏之臣稱深水頼兼、有守大口城者、見蒲池氏之經過、則變前約忽指揮、而屠殺蒲池氏及從者十有七人、尔來件封疆往還更不自由也、羽月城者去々々許島津薩摩守義虎、而令爲警衛矣、去年大口凶徒襲至、而悉破却外郭、由是義虎懼爲凶徒所陷、返羽

月於我、以故遣肝付彈正忠兼寬・新納刑部大輔忠元守彼城、凶徒增奢恣慾、所以欲掠取羽月城者及數度矣、於茲乎、忠元・兼寬爲設伏兵之計策、以問是非於島津又七郎家久、家久欣然許諾焉、撰五月六日、定吉日良辰、令大野駿河守・宮原筑前守爲伏兵將、伏一之兵戶神尾、二之兵稻荷山、僞引敵軍、所入伏兵中之將家久也、是以家久驅馳大口城下、而窺間隙、凶徒未發出、于時家久向城裏、飛羽箭放鐵炮、侮凶徒者頻也、於茲凶徒發城門出、而追來者宛如雲、家久欣々然、佯走以退去矣、凶徒乘勝到戶神尾之西、則家久交接馬上遂斬得其敵首、迄此之時、忠元・兼寬指揮、而衆兵發起、討凶徒於四面、前田豊前守先衆兵有首功、因是凶徒等忽以敗走、追亡逐北、斬獲敵首者一百三十六員、且虜一人、大口凶徒因今日敗北、所以滅其勢也、

480 「義久公御譜中」

永祿十二年己巳正月廿日、容守大口凶徒之有其求、既決和陸矣、然則及士卒往還之時、無自他之障導、念後來自由乎、因茲三月十八日、蒲池越中守當往平泉之時、有相良氏之家臣稱深水頼兼守大口城者、見之則忽變前約、指

揮守兵等、而屠殺蒲池氏主從十有七人、由此又相爲水炭矣、羽月城島津薩摩守義虎雖曰警衛、爲凶徒見逼迫難支辭退、於茲遣肝付彈正忠兼寬・新納刑部大輔忠元守羽月也、

481 「全上」

永祿十二年、兼寬・忠元慮設伏兵之計策、而問是非於島津又七郎家久、家久欣々然許諾焉、以五月六日定吉日撰良辰、俾大野駿河守・宮原筑前守爲伏兵將、伏戶神尾・稻荷山兩所、計佳時、家久進大口城下、而欲窺間隙侮凶徒、而凶徒未發出、於茲乎、家久飛羽箭放鐵炮、侵侮城裏、于時凶徒發出城門、而欲屠殺者、如雲如霞、爭前進逼、家久欣然佯走以退去矣、凶徒乘威、追到于戶神尾西、則家久返轡斬獲強敵、見其佳期、忠元・兼寬指揮、則伏兵發起、進戶神尾麓、遮凶徒後各戰四面、栗野之士前田豊前守抽衆兵、爲太刀初、於其場屠殺數多敵、則凶徒軍敗、追亡逐北、斬敵首者一百三十六員、且虜一人、其外切捨不知員數、是以凶徒所滅其勢也、

482 「箕輪伊賀覺書」



〔全〕

(本文ハ四八〇号記事ノ後半ト同文ニツキ省略ス)

〔全〕

(本文ハ四八〇号記事ノ前半ト同文ニツキ省略ス)

〔義久公譜中〕

一同十二年己巳正月廿四日ニ互ニ出合、和談ニ成ケル、於馬越現形し、相良方ヨリハ東・深水・犬頭、其外宗徒ノ人々數多出合、此方ヨリモ宗徒ノ人々出合て、和談の祝言アリ、薩摩方ハ謡ヲ上て歌ひけるは、一張の弓の勢ひたり、東西南北の敵を安く平くと唄ひければ、相良方の又〔人カ〕と氣色損して見へけるを、鎌田尾張守是を見テ、坐敷の興を催し、東爲伯も參河守頼兼も、其外相良家之人々、尾張守殿御坐の興尤畏入タリ、斯こそ有度事也とて、暫くしてそ立れける、一張の弓謡も折ニよるへし、敵を退治シ、或ハ城ヲ受取て、太平の吐氣ニコそ彼唄も□是ハ禁口成へしとてそ笑けるか、無程手替して深水三河守手切の證據を出しけり、

〔全〕

(本文ハ五〇六号記事ノ後半ト同文ニツキ省略ス)

勝久公 忠良

三男

忠辰

號龜山 初忠親 又七郎 兵部大輔 又兵衛尉 如雲齋

永祿十二年己巳三月十三日、於日州廣誕生、〔原脱カ〕母福永氏、兄二人爲僧、由是雖爲末子、連續父家、始號龜山、寛永十三年死去云々、

〔歳久一流系圖〕

男三人  
女一人

忠隣

三郎次郎

永祿十二年己巳三月十三日、誕生於出水屋地、歳久依無男子、婚合於嫡女、連續於當家、實薩摩守義虎二男也、

「忠元勲功記」

一 永祿十二己巳三月、去々年羽月城之誓固者義虎ニ被仰付置候得共、大口城より敵兵度々寄來、外曲輪等攻破リ候ニ付、番手御断被申上、致在番人無御座候故、忠元并肝付兼寛江被仰付、市山江者中書様御在番ニ而、忠元等者、羽月城江被召移候処、敵兵猶相侮、却而掠取企相聞得、忠元・兼寛申合、伏兵ニ而不意ニ討勝外者無之と市山江參調、中書様ニ茂示談仕置、同年五月六日、大野駿河守忠宗・宮原筑前守景種者人數召列、未明より打立、稻荷山と諏訪山ニ相伏罷在、忠元者戸神ヶ尾ニ忍ひ居、兼寛者白木河内ニ相扣、いづれも相圖を待合罷在候、左候而、中書様釣手之人數被召列、市山城御忍出、數百之人馬等兵糧を付させ、堂崎より平泉江付越躰ニ被爲下知候處、如案大口より足輕共罷出、道を相遮り候付、中將様御打出被追拂候得とも、<sup>(備カ)</sup>敵も爲可相救、大軍駈續候儘暫被爲相戰、能時分ニ僞

りて被爲走候處、敵弥勝ニ乘、戸神尾之西迄追掛參を見計り、中書様御返し戰有之、忠元螺を吹せ、是を相圖ニ忠宗・景種一時ニ起り、互ニ鬨を合せ候塩合ニ、忠元横より切出、兼寛も又突出、前後より挾て相撃、敵首百三拾六討取、大口城茂此敗軍より余程兵勢爲相滅由御座候、左様ニ成立候故、同八月十八日、猶大軍を被遣、大口城被爲攻圍候処、菱刈・相良も必至と困窮仕、和睦之願申出、御許容被爲在、九月十日、相良帶刀・深水太郎左衛門兩人を質として差出候付、同十四日、團茂被爲解、玖摩方之軍衆茂退去仕候故、同十八日、上様皆城中江被爲入、鎌田政年江被仰付、勝吐氣取行ひ、左候而、御兼約且是迄多年之軍忠至極之御感賞ニ而、忠元江大口地頭職且菱刈兩院之惣押迄被仰付、四拾餘年爲相勉茂、此日より之事に御座候、

但右之相良方菱刈加勢として、大口江爲馳籠節者、誠ニ一大事之御難戰に成立、義虎番手之御断爲申上時分、山野者喜入攝津守季久江在番被仰付、其節季久被存候者、此度於無御勝利者、夫限 御家者可被爲絶、然者、貫明様茂 大岳様之御血脈ニ而、其儀者季久茂同前候間、若禿申事候ハ、何卒 御家者御永

續被爲在、其替喜入家御禿可被下旨趣、伊勢并愛岩(名)社江誓願被申上、右通御勝利被爲在候ニ付、其上願之一筋を以、則季久者私領喜入四拾町、其外諸所掛持迄茂皆御物ニ差出、嫡男龜次郎者爲致出家、老母妻子者鹿兒嶋唐湊江爲致借宅置、元龜元午六月より打立、伊勢と愛岩江致參詣被罷歸候處、貫明様立願成就被仕候、御感賞不斜、如本御家老被仰付、私領も本之通り被成下、直ニ嫡子龜次郎も還俗ニ而、三郎四郎と名義爲被下趣、季久子攝津守忠政書留ニ相見得、是ニ而其比之御難戰恐察被仕申候処、前件之通忠元等雄略を以御勝利有之候間、右通爲被仰付御感賞之程茂被奉恐察事ニ御座候、且忠元市山城江在番仕候砌、諏訪之鎌一刃自何方共不相知飛來、軒ニ繫居、大口城御領相成節茂亦同様ニ飛來、旁之奇瑞ニ者忠元茂別而感悦仕、本より麓江諏訪社立居申候、其側ニ右之鎌を勸請候而、飛諏訪大明神と崇敬仕、毎年七月廿五日、祭方爲仕事、代々例祭にして、今以内藏家より年々不忘祭來事ニ御座候、扱又麥刈兩院と申儀者、本城・馬越・湯尾・曾木を太良院と相唱、則隅州麥刈郡之事ニ御座候、又大口・市山名

山、羽月・平泉・山野を牛屎院と相唱、是ハ薩州伊佐郡之内ニ而、其餘ハ祁答院ニ相付罷在候間、太良と牛屎ニ付居候地を麥刈兩院と唱來候筋ニ御座候、左候而、其院と申譯者、上古一郡之内ニ而山川等有之、百姓共便利不宜處江者、郡司共役所を双方ニ相立、年貢等收納仕、其役所を某院と相唱、其支配ニ相付爲申場所、右通相分レ候間、只今何方組と藏付郷を被分置候仕來共、此遺風ニ可有之と申事ニ御座候、

490

『長谷場越前日記』

一永祿十二年三月十八日ニ、蒲地越中守比良泉江被打通處ヲ、深水頼金在番、陣衆出合テ手功ヲ致、證據ニハ主從拾七人討果シ、既ニ弓箭を取出す、扱平泉之御格護一大事にそ成ニける、後ニハ山野有り、前ハ大口崎陣也、何れを見るも不安ヲ、道者不通ニ成る間、平泉の在番衆可被繰取、其爲ニ羽月迄迎勢をぞ被遣、彼の在処之御番衆ハ肝付彈正忠、城地頭ニ者新納刑部太輔被指廻シテ、御意趣段々承り御返事ニ言上也、平泉を於御指捨者、羽月一城計リニテ、大河を相隔テ持間敷

『箕輪伊賀入道覚書』

如なり、如何ニも手堅く御持せ可有と申上る、彈正忠并刑部太輔ハ、先手ニ平泉江百日御番を可致、此外の兵ものを可有御勸メと、夜中ニ諸勢を指返す刻也、御兩殿様聞召、御感を被仰出で、御側衆を諸外城ニ皆以て被遣、御頼と有りければ、忝き上意とて、數千騎計り進ミ出で、御番替りの日限を被定、扱社云々、

一三月十八日ニ蒲地越中守平泉へ通ラル、如ヲ、主從十人打果シ、已ニ弓箭取起セリ、去レハ於今平泉の御格護も一大事と成ニケル、後ニ山野と弓箭は大口さき陣也、通切れて通路不輒、無了簡ソ思ハレケル、然ハ先彼平泉ヲモ相去て相良カ情欲ヲモ補ヒ、後日其仕合ヲ以追伐ヲ加ヘハ必御利運アルヘキカ、先一節御有候ヘガシ、善ヲ急ニして、悪をは延よと申事の候得者なと評議區々ナル處ニ、肝付彈正忠・新納刑部太輔同心して申サレケルハ、敵を退治スルニ武略様々也、然ニ彼相良カ跡ヲ見るニ、心驕て貪欲不道者也、山野一所ヲ相去て、無事の調法アリト云ヘトモ、未タ百日ヲモ滿タスシテ又蜂起セリ、彼兩所ヲ賜フ上ハ、無程横川

迄奪シコト疑ナシ、左モアラバ、坂ヨリ上ラ領分トシテ、加治木・帖佐ヲ眞下ニ見下シ、弥以情欲やマジ、如此ナラバ眞幸モ自ラ相良領分トナラン、大ヲ以小ヲ制スルハ易シ、小ヲ以大ヲ制スルハ難ト云、求摩・八代・葦北ニ今又牛屎・菱刈・眞幸迄モ持連ケ、分限たらハ加追伐トモ輒退治シガタシ、其上平泉ヲ差捨ラレハ、羽月一城ニテ大川ヲ隔持テマシキ所也、於今ハ平泉在番シカタキ所ナレトモ、此兩人ニ於テハ是非二百日ノ在番仕ベシ、必百日ノ中ニ勝負ノ安否ヲ決スルコト必有ん、兵ヲ御頼給ヘト申サレケレバ、太守聞召、誠ニ神妙ナリトテ御感アリ、諸軍勢ノ中へ仰出サレケレハ、數百人ノ兵進ミ出望申ケリ、依テ平泉在番ニソ定ケリ、彈正忠兼寛・刑部大輔忠元番大將トシテ、三月ノ末ヨリ在番ヲソ務ラル、斯テ月日ヲ送ケル、其頃相良家ノ者共ハ、過半黒革威ニ黒毛ノ笠大敷波ニ大立拳、三間かゝりの長柄の鍮眞中取て、鍮先ヲ揃ヘ突カ、ルニ面ヲ向ベキヤウナシ、幾程もなく、慈の足輕利ヲ失ヘバ、勝ニ乗テ恐ル、心平ナシ、然ニ薩摩方功者ノ人々是を見て、勝に乗驕ル敵ヲハ滅シ易シ、能々伏兵ヲ謀て、是ヲ討ニ何ぞ難き事のあらんやと申ければ、大將此儀

ニ同し玉へへ、宗徒の人々評儀して、伏兵をそ企ル、

原口權太夫

492 「正文在喜入家」

494 「参考ニ供ス」

大隅國菱刈院之内花北名之事、依勲功所号給分也、速可被知行之狀如件、

永祿拾貳年己巳

卯月十四日

義久(花押)

喜入式部太輔殿

尾・稻荷山等ニ伏兵いたし、敵の出るを待防戦、御大將大中公 貫明公 又四郎幸久

新納刑部太輔忠元

嶋津圖書頭忠長

嶋津中務太輔家久「傳引之 大將也」

肝付彈正忠兼寛「初三郎五郎」

大野駿河守「○印ハ朱ナリ」

前田豊前守

比志島宮内少輔國守「國守弟」

「上包」  
喜入式部太輔殿

「此御書、喜入季久譜中ニ在リ」

義久

同廿五日、祢答院長野城攻ニ勇功を抽つ、

比志島宮内少輔國守

比志島彦四郎「國貞後宮内少輔」

新納右衛門佐久饒入道遊甫

493 坪付

鎌田尾張守政年

祢答院新□尉

一七段 霜月廿日祭 和田名 たへた  
一二段 正月十五日祭田 さくら田

一五段 修理田 此内福元名ニ卷反 和田名ニ四反

一壹段 五月五日祭田 せまくし

一壹町 和田名 九日田

以上貳町六段

495 「長谷場越前日記云」

一永祿十二年己巳五月六日ニ、一番の伏草者鳥神の尾ニて、御大將軍家久様そ被成ける、二番の伏草者稻荷山

ニ、大野駿河守・宮原筑前守三千騎にて被伏を請ケ、

伏草を羽月の表町口に被備へ、角て番衆ハ如毎被打通

永祿十二年五月吉日

如ニ、大口と求摩陳よりハ是を見て、思ひくニ懸出

て、足輕余黨の者共が荷物取んと悦びて、我先ニと勵まして、鳥神の尾ニとく遅く懸上たり、家久様者御覽して、所好の幸哉、皆打取れとの御下知ニ而、狼烟の螺を立させらる、如急儀ノ走せ合て、一合戦を被致、栗野衆ニ前田豊前守太刀始仕る、其太刀下ニて敵余多被討せ、其より敵を切崩し、追討ニ被討取懸る頸百卅六、此外ニ生捕一人被搦メ、打捨頸ハ數不知、をぐる大口ひそめ宛泪の露ハ置増り、哀れ催す計りなり、御方の軍兵悦ひて勝吐氣ニ勇ミけり、こゝにおひて、家久様無比類御合戦を被成てハ御高名を被遊、御太將軍義久様之御裝束、肌ニハ何をか被召けん、こき紅の御帷ニ糸緋綴の御着せ長ニ、同花の五枚甲ニいちやう打たるを被召宛、びやくだんみがきの御籠手ニ、すね當迄もかゝやきて、六具をつめてそ見得給ふ、金子ンドウノ御ハかせ三尺計り候ひし、是を長に給てさげ、金作りノ御太刀をゆゝ敷ハかせ玉ひて者、世ニ無類ニ御威光なり、御馬ハ長け七キ計りなる市來野の月毛の駒、金覆輪の鞍置せ、御身輕氣ニ被召たるは、誠ニ大聖摩利支天もかくやと申計也、

496 『箕輪伊賀入道覚書云』

一同十二年五月六日、一番ノ伏兵大將ニハ、新納刑部太輔・肝付彈正忠富神ニ三千騎ニテ伏レケリ、二番大野駿河守・宮原筑前守羽月ノ麓ニアル稻荷山ニ三千余騎ニテ伏レタリ、請兵ハ町ノ今ノ所ニテハ此ハ註ナルカ、ナシ、塔崎ト大嶋村ヘノ下リ口井木ノハツレ右ノ方島ナリ、羽月ノ町口其往々ニ伯圍入道・義久・歳久・又四郎幸久・圖書頭忠長其外一門宗徒ノ人々、其宵ヨリ打寄テシツマリキツテ居タリケル、偽引ノ大將ニハ中務太輔家久、雜兵四五百人ニ兵糧運送ノ風情シテ、糠俵ヲ馬ニツケ、或ハ人ニ背負セテ軍兵三十余騎ニウツ驚固サセ、平泉サシテ通ラレケル、大口の城ヨリ是ヲ見テ、今日平泉番替ナルソ、追落シ荷物を取んと、足輕雜兵トモ思ヒくニ馳ツ、ク、先き陣ノ大將深水參河守モシ武略ニテモアルカト制シテケレトモ、吾不劣ト宗徒ノ人ヲ初トシテ、數千騎馳來て、家久の勢を追かけたリ、家久所好の幸とおもひ、差忍へく防き戦ふ程ニ、栗野の住人に前田豊前介太刀初とそ名乗ける、一合戦しては退き、一防ぎ防きてハ退れる程ニ、各軍勞申モ愚也、一ツの伏兵近くニてハ、家久已ニ打れ玉ふへ

く見へけれハ、伏兵ところをすゑ兼て、一度に動と起むとしけるを、彈正忠・刑部太輔未可起と怒り迫て、団を以て横扇して下知スレハ、今起らんとシケル三千ノ伏兵、又はツたりと伏潜む、彼兩人の武威の程ヲ後ニ感せぬ人ソ無リケリ、家久色々會釋て偽引玉ふ程ニ、眞中ニ引入タリ、三千ノ伏兵一度ニ吐と起せば、逞兵精兵一度ニ動と起合、眞中ニ追取籠攻打程ニ、相良・菱刈が勢悉ク敗北シテ、宗徒ノ者切懸ル頸百三拾六人、雜兵の首八百余人、其外切捨ハ數不知、家久の功名是非に及ハぬ処也、伏兵ニ遠くと引入ケレドモ、足かるきものハ辻のひぬ、或ハ老躰或ハ身濕くして、宗徒の者求ル・八代の名を云へる人と皆悉く打れたり、前四年は度々勝利ヲ得、勢ひ以の外なるが、遂には斯て滅シケル、去レトモ討モラサレタル者共、大口城に馳籠て、漸く城ヲハ持堅メテソ居タリケル、

『大村重頼古戦書附云』

一五月六日、菱刈平和泉之戸神カ尾之一戦ニ、相良衆貳百余騎打取被成候而、菱刈・大口ヲ御知行候旨、其後新納武州被召移候事、但菱刈鶴壽殿御旗下ニ被入、知

行少々給候事、

『雜本ニ云』

一番之伏草ハ鳥神カ尾、大將中書家久、二番伏ハ稻荷山、大將大野駿河守・宮原筑前、三千余騎也、大口・求广衆敗軍ニテ、追討に百三十六首ヲ被取ト有、八月十八日、大口ノ城ヲ卷一戦候、敵降參候故、菱刈方命ヲ助ラレ、九月 日大口ノ城内ニテ、大平ノ吐氣被行ト也、

499 「中務太輔家久譜中」

肝付彈正忠兼寛・新納刑部太輔忠元守羽月城之際、大口之凶徒増奢、以匹夫之勇、欲掠羽月者幾度、由是忠元・兼寛設伏兵之計策、問是非於家久、予亦實應諾、而後議于諸將、永祿十二年己巳五月六日、選良辰成其道、伏一番之兵戸神尾、二番之兵稻荷山、其帥大野駿河守忠宗・宮原筑前守也、家久襲到于大口城下、欲偽引出於凶徒、而凶徒未一人之有發出者、故放鉄炮侮城裏孔頻也、於茲乎、凶徒出城門追來者如雲雨矣、家久欣然佯走而退、凶徒乘勝、到于戸神尾之西、則家久交接鞍上、遂獲其敵首

也、今也爲得佳期、忠元・兼寛指揮而諸軍起發、從前後左右爭先屠殺之、斬獲一百三十六員、又虜一人、故凶徒甚失勢也、

500 「樺山玄佐自記」

一 菱刈者義久様馬越ニ御座有而、御分別ニ而、次之年中務太輔殿平泉戸神の尾の合戰被得大利、敵之頸百六、切捨不知數、其後大口之城も渡上、求摩堺和平になり、入来院・祇答院・東郷・千臺御存分之御知行也、就日新様御病氣、長濱すミ御參之時、加世田庄しらかいかた東塩屋御賜、是は日新様御存生之内之事也、其以後方々所々移替、中書様從横川千臺隈之城御地頭串木野を御賜、横川者樺山給、小濱堅利にかへる、堅利小田六町名ハ蒲生垣内中島ニ替、濱田ハ鹿兒島御園之門に召替、玄佐へ三町五段給、此沙弥從爰一方に休弓箭、雖歌道に傾、無指儀、伯圀様御隠之後ハ、舟流したる海士の袖しほたれかちのミ云々、

501 「友野甲斐入道元眞奉公覚」

一 菱刈外神か尾ニ而中書様御合戦之砌、伊集院善左衛門

殿主取ニ而、佐敷表江兵船六七十艘申遣候處ニ、連々舟持申候ニ付申遣候、四本越中守殿同心候、佐敷計石破申候、辛勞仕候、船一艘取申候、夫よりふくらと申所ニ而分捕申候、四本越中守殿御中間郷八と申人被存候事、

502 『庄内平治記』

永祿十二年五月十日、河野筑前守・大岩根河内守を以再串良ニ差遣し、太守公与肝付家との和睦の方便を運されけれ共、事不叶してかへりぬ、同月廿二日、太守公の命ニ隨ひ、菱刈ニ兵を遣す、北郷小次郎を大將として、同九月、菱刈已ニ降參して一命を助られ、平城を安堵せり、

503 『年代記』

一 己巳 永祿十二年、此年五月六日、羽月・大口ノ堺於戸上尾軍戰、屋形衆切勝、敵百六人打取、自初秋比、守護・相良和平ノ相談アリ、九月十日、互ニ人質ヲ取替也、先自相良東帶刀・深見太郎左衛門尉出、自守護方鎌田刑部左衛門尉・本田新介被出、同九月十八日戊子巳ノ時、大口城ニ兩殿打入、太平吐氣有之、役者鎌田



## 尾張守

504 「貴久公御譜中」

永祿十二年五月廿五日、攻祁答院長野城、敵亦不臆、而互防戰、實以嚴毅也、比志島宮内少輔・同彦四郎勳勇氣將登城、鎌田尾張守政年相挑之際、祁答院新兵衛尉突出、合戈較勝於一戰、于時仲俊房・貴嶋源五郎・税所宮内少輔・深野平六・村原新介・同姓左衛門五郎・上床源六兵衛尉・加治屋新左衛門尉・岩下主殿助・尾上五郎・田實右京亮、加治木之士肝付權介共遂戰死矣、雖如此、各不顧死露勇氣抽戰功、所以得勝利也、從蒲生境亦斬得凶徒數十人而來矣、伊東氏傳聞其威風、生長懼心也、七月十四日、委飯野桶比良陣、而退散也、

505 「公御譜中」

永祿十二年八月十八日、圍大口城攻凶徒逆儻、凶徒兵器既竭勢衰、則求和諧請降參、吾聞此言以為、武豈久汚乎、許焉、故九月十日、相良帶刀長・深水太郎左衛門尉爲質來屈矣、是以令鎌田刑部左衛門尉<sub>政年</sub>之子、本田新介爲質往凶徒、而後同月十四日、逆儻悉向球麻退散也、由是同月

十八日<sub>子戌</sub>巳時、伯圍及義久入大口城、令鎌田尾張守政年唱凱歌也、牛屎・麥刈兩院豫有約新納刑部大輔忠元、故所大口之爲地頭職也、且改官任武藏守、是又前日忠功甲于衆人之所致也、其功業豈下於李郭哉、李光弼・郭子儀共唐肅宗之時、中興功臣也、中興頌云、功勞位尊忠烈名存、是又指件之兩臣也、

506 「義久公御譜中」

永祿十二年八月十八日、圍大口城、東西南北拂除作毛、凶徒等亦雖曰防禦、漸々矢竭弦絕、勢亦衰微、以求和諧請降參、伯圍公聞此言曰、武豈久汚乎、許焉、是以九月十日、相良帶刀・深水太郎左衛門爲質來屈矣、故俾鎌田刑部左衛門尉・本田新介爲質往大口、而後同月十四日、凶徒悉向球麻退散也、

同月十八日戌子巳時、伯圍公及義久入大口城、俾鎌田尾張守政年唱凱歌矣、依有兼約、使新納刑部大輔忠元補大口地頭職、且改官途任武藏守、其外諸城悉入守兵、警衛不敢怠慢、麥刈氏以降參宥其罪昇平城、而後散軍者也、右、自攻馬越之時、至于此、詳書 貴久主譜、然而此譜亦粗記之也、

『長谷場越前日記云』

【永祿十二年】

一 同年五月廿五日ニ者、祇答院の内ニ長野と云る在城を攻させられ梟る間迫り悪ク、敵者大勢取籠る、究竟の射手共さし合て防ぎ戦ひかけ廻ると云へとも、下夕城迄攻破り、比志島宮内少輔・同彦四郎合戦を被致、押並て鎌田尾張守・祇答院新兵衛尉ニ渡し合て太刀打す、此外の兵物も、我もくと勇ゝ宛合戦を被成也、又爰に市來衆の仲俊坊・貴島源五・税所宮内少輔・深野平六・村原新介・弟ニ左衛門五郎・上床源六兵衛尉・加治屋新左衛門尉・岩下主殿助・尾上五郎、伊集院衆ニ田實右京亮・宇都名字も戦死也、加治木衆ニ肝付權介、此外所々の人々も無余儀討死被致、於蒲生口者、敵をほく被討取、義久様を始奉り、諸軍衆以下ニ至迄て、各在所ニ打歸りて喜ぶ事そ無限、澁谷黨か逆心は天の攻ニ當るへし、行末久ク可見とのゝじる人多かりき、天ニ時有り、地ニ時有り、計り事ニもあらざるや、指勘へは不成して、眞幸ニ取りし桶比良の伊東陣も引崩す、爰社勝利の時刻とて、比者永祿十二年八月十八日より大口城を取巻て、東西南北走廻り、秋き作りを被拂せ、三日中の御出勢、諸大將衆ニ至まで手自作をそ

508

『公記』

ながせらる、求戸・八代衆と大口衆指相ひてふせきのけんとせしか共、つり付てハ被射殺、又寄せ付てハ被討取、敵方の者共はしほりはてゝそ見得にける、數ヶ度の軍ニ仕負宛、相良・菱刈迷惑に罷成り、頻に佐を言上して、菱刈方の命を被助下て、同九月中旬、大口の番衆を引く求麻・大口の者共が心の内ぞ哀成る、慈の兵ものきをひつゝ、勝て甲の緒をしめて慶事ハ無限、同九月廿日ニ者、大口の内城ニて太平の吐氣を被作、鎌田尾張守の仕寄之段々者、一入殊勝ニ見得ニけり、扱負てかつへしと上意有りける、日新様之御事を恭敬禮拜申ス也、菱刈方ニ平の城を被下て、其余りの外城江者地頭を堅く被指置、國家太平なりけれハ、御大將軍貴久様ニ義久様を奉始メ御開陣ましゝせバ、諸軍兵致供奉、蒙御感計也、

一 川内御手裏ニ入る事ハ、鎌田尾張守・宮原筑前守・猿渡大炊入道蜜談し、東郷方を方便付ケ、入來院・祇答院を同心ニ、同十二月廿八日ニ訴訟ヲ言上させつゝ、可然取成て、永祿十三年午正月五日云々、

『箕輪伊賀入道覚書云』

一永祿十二年五月廿五日ニ、祇答院の内長野ノ城ヲ攻ラ  
ル、太守方ノ軍兵押寄攻戦ふ程に、下楯ヲ攻敗ル、爰  
に比志嶋宮内少輔・同彦四郎・鎌田尾張守・祇答院新  
兵衛尉合戦セラレケル、其外所々ニ分捕高名ノ人々多  
カリケリ、市來ノ住人ニ忠俊坊・貴島源五郎・税所宮  
内少輔・深野平六・村原新助・上床源六兵衛、伊集院  
の住人田實右京亮・宇都弥左衛門、加治木に肝付權助、  
此外所々に討死の人多カリケリ、かの長野城廻り悪く  
して、澁谷の者共大勢馳込る、究竟の射手共多相籠り  
ケレハ、烈シク攻戦ふと云へトモ、慈悉ク手負死人に  
成にける間、下楯ヲ相破たるを手柄ニして、先々引陣  
セラレケル、蒲生口へ敵多く打取て慈の勝利と聞へけ  
る、斯菱刈表も大口城大滅つしたる由聞へけれハ、伊  
東眞幸ニ取りし桶平の陣も引崩てそ退ける、是そ勝利  
の時刻よとて、同八月十八日ヨ三日出勢シテ、大口の  
城へ押寄せ、東西南北馳廻り、秋作をそ拂れける、郡  
司・郷司の大名ニ至迄、自ら鎌を手取てそ薙レタリ、  
兩家の者共防んとシケレトモ、前の勢ひニ劣リタレハ、  
外ニ打出防ク事不能して、凋り終てそ見へにける、其

時相良老名諸事談合して申ケルハ、頼房よしなき人々  
に与力して、多くの侍を失ふ事、相良の家滅却ノ瑞相  
ナリ、此弓箭長クハ如何程の者か滅へき、殊ニ嶋津殿  
ハ國の太守分限と云、旁以無益也、其上文明の比相良  
爲續の時、大口には嶋津出羽守久遠、平泉に同伯耆守  
豊久御坐ヲハ、爲續互ニ相防戦と云へとも、遂に和談  
して御恩力を以、無程八代の郡を知行して、今迄も如  
此し、その古をおもへハ、不忠いたすへからすと、遅  
くもおもひ知レタリ、仍テ和平ノ嚶トナル、同九月十  
四日ニ求摩ノ如ク引入ラル、同廿日大口ノ城ヲ受取、  
於同城泰平の吐氣ヲソ作ラレケル、相良申サレケルハ、  
菱刈ノ家ヲ本城へ残して賜り候へ、頼房ガ三年大口在  
番シタル其證シニ、哀レ於此ニ面目ヲ取セ玉へト詫ラ  
レケル間、去ハ對相良かの家を残し玉んとて、本城一  
所菱刈ニユソ下サレケル、其時大口ヲ新納刑部太輔地  
頭職ヲ給て、即チ武藏守ニソ成ニケル、眞幸・菱刈・  
牛屎皆御退治アレハ、此度マイリタル所々の城共皆地  
頭ヲ被仰付、大將歸陣シ玉へハ、諸軍勢皆陣を引、御  
分國のゆゝしざ申計はなかりけり、

一去程に、此五六ヶ年の秋に至迄ニ、眞幸・菱刈の退治セラレ、相良も多の兵を滅し無力引入、一揆の黨類如此成行ハ、澁谷黨の人々、今は早頼もなくおもひ、太守方へ可申入欵、如何すへきと取々におもひける処ニ、去年の冬の比々鎌田尾張守・宮原筑前守・猿渡大炊入道蜜談を以、東郷弥左衛門尉重尚ヲ方便付レハ、那答院能重・入來院重豊同心ニテ、悪心を翻し可抽忠節の旨、可然御取成頼入のよし依被申、去年の十二月二十八日、御詫訴へられる間、前科ヲ差許され、居城計を賜て其余を皆差上らるゝ、

永祿十二年己巳、菱刈・牛屎悉入手裏之後、替小濱堅利而賜横川於樺山畢、此沙彌玄佐迄于耳順之年、止戰場之勇氣、專欲得於和歌之道、造次顛沛必於是、故每陪花辰月夕佳節遊宴之席、冒花月風雲雨露霜雪之名、綴三十一字雖爲吟詠、未離俗妄六義、其詞亦卑矣、情以所謂、鳴花鶯宿水蛙之聲、皆是自然之歌云、以人可不如鳥虫乎、雖然不得其樣、徒

薩隅日治世之聲、太守義久公之惠、普覆國家、松柏草苔共所以得雨露之潤也、

512 加世田御人衆

- 大田治部少輔殿
- 富松刑部左衛門尉殿
- 阿多助十郎殿
- 同名縫殿助殿
- 阿多助十郎殿
- 稻富民部左衛門尉殿
- 同名彦次郎殿
- 玉利玄蕃允殿
- 同左衛門五郎殿
- 奈良原狩野介殿
- 中山越中守殿
- 鹿嶋長門守殿
- 山口孫左衛門尉殿
- 同孫八郎殿
- 江村藤七兵衛尉殿
- 河崎越中守殿
- 野村美作守殿
- 同兵部少輔殿
- 岩切雅樂助殿
- 田尻荒二郎殿
- 岩下新右衛門尉殿
- 同弥八殿
- 小川監物殿
- 指宿加賀守殿
- 同名源太左衛門尉殿
- 加世田伊豫守殿
- 有間主計助殿
- 吉加江肥前守殿
- 上原加藤左衛門尉殿
- 中條右衛門尉殿
- 同六郎三郎殿



〔永十二〕  
閏五月十七日

〔實心〕  
伯圍判

桃山兵部太輔殿

〔喜入季久譜中〕

〔正文在當家〕

從匠作預御札、黄金拾兩被懸御意候、則御報申入候、仍此鞍一口小笠原家所持候、不慮拙者求置候、伊勢因幡入道相添折紙進獻之候、可然様可預御意得候、猶宗固可被相達候、恐々謹言、

〔朱力半〕  
〔永十二〕六月十一日

藤孝(花押)

喜入攝津介殿

硯左

細川兵部太輔

〔上包〕  
喜入攝津介殿

藤孝

515  
〔喜入季久譜中〕

〔正文在當家〕

匠作御女中方江御服唐織以、御内書御拜領候、尤珍重存候、此等之趣、能々以御分別、可被相達事肝要存候、恐々謹言、

〔朱力半〕  
〔永十二〕六月十一日

藤孝(花押)

喜入攝津介殿

細川兵部太輔

〔上包〕  
喜入攝津介殿

硯左

516  
〔義久公御譜中〕

〔御案文敷 在國分衆伊地知作左衛門〕

去年六月十六日、御内書、當年正月三日、謹跪以拜戴仕候訖、抑、御入浴之御祝儀、千秋万歳幸甚不易之候、爲此等之御賀祥、最前可申上之處、分國之逆徒依令押妨、剩御請被成、相似疎意存候、殊御殿祈之儀被仰付候、靜謐之刻、可奉致馳走候、此旨宜預御披露候、恐惶敬白、

修理大夫義久(花押)

〔朱力半〕  
〔永十二〕七月十六日  
進上 細川兵部太輔殿

517  
〔在薨刈氏〕

大隅國平院之内本城并曾木之事、所宛行也、永々無二抽勲功、可被守此旨之狀如件、

永祿拾貳年己巳

八月廿六日

修理太夫義久(花押)

菱刈鶴千代殿(重臣)

菱刈鶴千代殿

修理大夫義久

「義久公御譜中ニ在リ」

518 「北郷時久譜中」

永祿十二年五月二十二日、依 太守公之命、遣戍兵於菱刈、以北郷小次郎爲將、同年九月、菱刈降參、被助一命、安堵于平城、相良頼房送書、而述和融之禮、有正文、左記之、

519 菱刈方依取乱、一兩年不慮之防戰無是非候、然者嶋津殿

以御入魂、菱刈家可被相殘之由承候、大慶之至候、向後如代々可申談外、不可有別儀候、就夫、至其表御出頭之由候間、爲礼儀用使書候、猶期來信候、恐々謹言、

「永祿十二年款」  
九月七日

頼房(花押)

北郷殿(時久)  
御宿所

520

「野邊氏文書中」

御夢想歌「ツ、ミ紙」

御夢想歌

野邊宮内少輔

盛季

曇なき光をそへて月の影照すさかりや秋の夜の空

永祿十二年九月十六夜

平盛季(花押)

盛仁の御歌とおほえ申候、

521

「正文在肝付氏」

就弓箭、一身之軍忠無比類候、殊親類年來之者共數十人、曝骸或粉骨之儀誠感、心候、仍隅州そお郡之内上三臺堂名之事、所宛行也、速令知行、彌可被抽戰功之狀如件、

永祿拾貳年己巳  
拾月九日

修理太夫義久(花押)

肝付(兼盛)彈正忠殿

「義久公御譜中ニ在リ」

522

「義久公御譜中」

「正文在妙谷寺」

薩州鹿兒嶋郡妙谷寺之事、依号菩提所、向之嶋赤生原屋塩

間、令寄附畢、於後代聊不可有違亂者也、仍證文狀如件、

永祿十二年己十一月十三日 修理大夫義久(花押)

妙谷寺

〔上書〕  
妙谷寺

修理大夫義久(花押)

523

〔全御譜中〕

〔正文在笑岳寺〕

(義久)  
(花押)

薩摩國鹿兒嶋郡西田名之事、爲給分被宛行内之水田貳段、愚老爲來世、依令致寄進之訴訟、永々可蒙御免之旨申請、義久様御判者也、自然右之地雖爲轉變、於竹崎貳段者、堅不可有相違候、仍證文如件、

永祿拾貳年己十一月十三日

伊集院大和守

沙弥孤舟

笑岳寺 寄進狀

伊集院大和

〔上包〕  
笑岳寺 寄進狀

沙弥孤舟齋

524

〔全御譜中〕

〔正文在笑岳寺〕

薩州鹿兒嶋郡西田名之事、伊集院大和沙弥笑岳、依勲功被宛行内之水田竹崎貳段、爲菩提所令建立笑岳寺、可致寄附訴訟及數度之条、永々可被免許之由、以御隨喜被成御判訖、然間當職之寄合中令加判者也、雖及縱彼地轉變、於右之貳段者、永代不可有違亂之狀如件、

永祿拾貳年己十一月拾三日 沙弥意鈞(花押)

川上野

村田

越前守經定(花押)

三原

遠江守重秋(花押)

伊集院

右衛門大夫忠金(花押)

喜入

式部太輔季久(花押)

笑岳寺 寄進狀

〔上包〕  
笑岳寺 寄進狀

奉行中

525

〔義久公御譜中〕



「正文在曾於郡花林寺」

大隅國曾於郡之内小窪名之事、當家爲弓箭祈念、令寄進  
訖、殊麥刈牛草兩院屬手裏事、偏 御山之名鑑之故耳、  
弥奉仰武運長久、子孫繁昌、國家泰平之旨意趣等基也、  
仍證文之狀如件、

永祿拾貳年己十一月十五日 修理大夫義久(花押)

霧嶋社領 寄進狀

「上包有之」

霧嶋社領 寄進狀

修理大夫義久

526

「正文在笑岳寺」

(本文書ハ五二四号文書ト同文ニツキ省略ス)

527

「正文在笑岳寺」

(本文書ハ五二三号文書ト同文ニツキ省略ス)

528

「本田氏文書」

隅州姬城之城之事、先年一乱之刻、爲御奉公進上候、彼  
返地薩山谷山郡之内山田名被宛行訖、必明合境節者、城

一ヶ所仁可繰易事、相違有間敷候、此度先以、水田拾町

可被給之證文如件、

永祿拾貳年己拾貳月拾九日

川上上野沙弥

意釣(花押)

村田越前守

經定(花押)

三原遠江守

重秋(花押)

伊集院右衛門大夫

忠金(花押)

喜入式部太輔

季久(花押)

本田刑部少輔殿

「此文書、貴久公御譜中ニ在リ」

529

「正文在妙谷寺」

(本文書ハ五二二号文書ト同文ニツキ省略ス)

530

(本文書ハ五二五号文書ト同文ニツキ省略ス)

531

「貴久公御譜中」

「正文在大日衆麥刈九左衛門」

菱刈四郎との曾木就被差上、當時在所等無落着候、就夫即達 上聞候、然者從最前抽被成御奉公候、爲其忠花北一所、先々可被差遣之由、被仰出候、早々可被仰達候、追而御加扶持之段上意候、聊疎儀有間敷候、恐々謹言、

十二月廿日

忠金(花押)

意鈞(花押)

重秋(花押)

新納刑部太輔殿(忠念)

御宿所

忠金

新納刑部太輔殿「上包」

御宿所

忠金

川上上野入道「上包之裏書」

伊集院右衛門太夫

三原遠江守

「國史 卷十八 實明公 大中公」

元龜元年庚午 是年四月改元元龜、自三月春正月十一日、以大隅羽坂名松木門、爲正八幡宮領、據實明公舊譜、增勝郡清水郷經城有地名羽坂、是月

澁谷氏降、獻隈城・百次・平佐・碓山・高江・高城・水引・中郷・西方・湯田・宮里・京泊・清敷之地、公宥

其罪、仍賜入來院加賀守重嗣清敷、東郷大和守重尚東郷、賜島津義虎水引・中郷・西方・湯田・京泊、平田狩野介宗應宮里、以中務太輔又七郎改稱家爲隈城地頭、據實明

島津支流系圖家一流譜、平田新左衛門系圖、入來院重嗣、東郷重尚即

澁谷氏、舊譜云入來院氏、東郷氏、今據入來院主馬系圖、具書其名、入

來院重嗣初稱又五郎、見上卷天文二十三年注、清敷即今入來院勝地、澁

谷氏降舊譜無月、島津左衛門家藏年代記、是年正月澁谷氏降、今從之、

高城郡高城郷有西方村、重尚、重理之玄孫、據東郷總左衛門系圖、東郷重理見第

湯田村、水引郷有京泊村、十二卷文、宗應、平田氏之支庶也、平田新左衛門系圖、兼宗弟曰

明十六年、宗應、平田氏之支庶也、平田新左衛門系圖、兼宗弟曰

十一卷文明六年、公以帖佐郷住吉名平野園門爲與國

寺領、鹿兒島郡田毛水町門爲龍盛院領、據實明公舊譜、郡

有住吉村、田毛今作武、三月二日、大中公遺琉球王書曰、

去歲春、天龍寺長老來辱示華翰、極荷厚意、感戴不已、

寡人往年讓守護職於修理大夫、爰遣廣濟寺住持雪岑告示、

因獻微物、聊陳寸悃、物件具載別幅、伏願篤修舊好、永

爲唇齒、至祝至祝不宣、據大中 公舊譜、公遺琉球王書曰、我與

貴國有兄弟之約、今遣廣濟寺住持雪岑東堂、表符改之舊

例、致書座下、以修隣好、因獻不腆方物、物件具載別幅、

頓首不宣、據實明公舊譜、表符改之舊例、使國老川上入道意鈞

忠克、爲書告琉球國三司官曰、近聞商船抵貴國者、不帶本

府印文、自今以後細加查點、餘付雪岑長老、不宣、據大 中公

譜、夏四月二十三日改元、據和 事始、五月、大中公賜本田松

一 永祿十三年午正月五日ニ、隈の城を新納伊勢守の被請

『長谷場越前日記云』

533 一 國史卷之十八補注

大中公舊譜、元龜元年六月二十三日、公薨、不言其葬處、廟堂要覽云、公石塔在福昌寺、即葬骨處也、及臣正語爲此編、乃與臣正載、臣貞良俱聞舊譜、據左衛門督成久、右馬頭征久祭文皆語日新寺致祭、而訪諸加世田人、則曰、石塔在日新寺界內常潤院山中、刻曰大中公、於是臣等乃疑廟堂要覽之謬、遂注於大中公薨下曰、葬蓋在日新寺矣、既而使番格知記録奉行事本田親禮、副史相良常旭如加世田、親拜常潤院石塔、止刻大中公三字於山石而已、別無銘誌文字、又集國邑所有舊記、而參觀之、殊無大中公葬加世田事、蓋公薨于加世田、荼毗後舉、而後埋其骨於福昌寺、常潤院石塔乃灰塚云、是知廟堂要覽不繆、臣等三人乃繆、因書其說於此、俾後之人無所疑焉、時享和二年冬十月也、或曰、既知前說之謬、何爲不改書也、豈憚於改者乎、對曰、不改書者、所以旌其過也、旌其過則無過者益彰矣、

閑感狀、賞戰功也、據大中公舊譜、松岡、本田、九郎親年法名、系圖作突閑、 公遣喜入攝津介式部大輔改、稱攝津介 季久、賀新將軍、六月二十八日、遣細川藤孝書曰、比年國中多事賀儀遲緩、伏祈諒察、據實明、公舊譜 秋九月二十五日、喜入季久因藤孝、見幕府、獻太刀一腰、馬代千匹・黃金百兩、贈藤孝太刀・馬代五百匹・塩硝三十斤、同上 大中公以谷山郡福本名水田三段、爲福昌寺鎮守開山領、據大中、公舊譜 冬十月二十五日、幕府命喜入季久齋內書及太刀、還賜 公、據實明、公舊譜

取、扱又百次・平佐・高江・宮里・天辰・碓山を入來より進上也、又東郷より者、水引・中郷・湯田・西方に高城の郡ヲ進上し、清敷と東郷ニ兩家を被殘置なり、右之城内ニハ宮里を平田狩野介ニ被下て、一所衆ニ被召成、川より向へ高城・水引ニ中郷・西方・京泊迄義虎ニ被進せ、又大口の内ニも山野城を被遣、彼是分限ニ被召立、御評定も如此相濟て、 貴久様ハ加世田へ御歸院被成者、 義久様者鹿兒島江御歸宅也、

『箕輪伊賀覺書云』

一元龜元年庚午正月五日ニ、隈之城を主取として新納伊勢守打越さる、檔又百次・平佐・高江・宮里・天辰・碓山をは入來院より差上らる、水引・中郷・湯田・西方・高城郡ヲは東郷が差上らる、清敷と東郷に兩家を殘し置る、也、夫が高城・中郷・西方・京泊、川が向へを義虎ニ遣さる、又牛屎院・山野を進ラル、如此往との給分、地頭職被仰定、伯圍入道ハ加世田へ御歸アレハ、義久ハ鹿兒島御館へ歸り給ひ、出仕無障、美々しかりケル有さま也、

一元龜元年庚午、澁谷氏之黨徒獻其所押領之地、而降參也、薩摩郡隈之城使新納伊勢守受之也、百次・平佐・碓山・高江地入來院氏獻之、高城郡水引・中郷・湯田・西方東郷氏獻焉、是以宥其罪、處兩家以清敷・東郷也、宮里之地畀平田狩野介、高城郡水引・中郷・西方・京泊與島津薩摩守義虎、隈城使島津中務大輔家久補地頭職也、

元龜元年庚午之春、澁谷之黨族、去其所橫領之地、而降于 太守矣、百次・平佐・碓山・高江者入來院某獻焉、高城・水引・中郷・湯田・西方者東郷某獻焉、是以宥其罪、畀清敷・東郷於兩輩、高城・水引・中郷・西方・湯田・京泊共與島津薩摩守義虎、畀宮里於平田狩野介、補隈城地頭職於家久、且賜串木野、而移居于其地矣、翌年辛未元旦、使家臣等出仕裝束悉帶甲冑、各候座下、所犯侮仇敵者、期如此之令節、恐衆人之有怠慢也、

薩州伊集院之内谷口善福寺、城之河内寶聚寺并市來院水月寺之事、從往古雖爲廣濟末寺、世上轉變之時節中絶、仍到琉球國渡船之刻、御懇望之条、令寄附廣濟當住雪岑東堂者也、任先例、於永代可被成執務之狀如件、  
永祿拾參年<sup>庚午</sup>正月拾一日 修理大夫義久(花押)  
廣濟寺雪岑東堂

正宮寄進  
大隅國羽坂名之内  
一松木門 以上目錄別紙

載之畢、  
永祿拾參年庚午正月十一日 修理太夫義久(花押)  
「義久公御譜中ニ在リ」

泰定山 南禪寺派廣濟寺  
高三拾石  
當寺七代雪岑和尚 龍伯様御代ニ永祿<sup>【正月廿七日渡船】</sup>十三年琉球へ

渡海、同七月十四日【掃部】ニ揚帆、爲其忠賞、末寺被寄附  
證文寫、

已上一町一段十  
永祿十三年二月吉日

541 『正文在廣濟寺乎』

(本文書ハ五三八号文書ト同文ニツキ省略ス)

「御譜中ニ在之、写載置也」

542 「義久公御譜中」

「正文在興國寺」

興國寺領

坪付

隅州帖佐郷之内

住吉名  
一平野園之門

五段廿 つく田

一段廿 同所

一段 ほり町 同所

三段 同所

十 ひらき

十 ほり町 屋敷添

此内一反十ほり町

543 「全御譜中」

「正文在興國寺」

薩州鹿兒嶋郡之内

田毛名  
一水町之門

二段 はま田

四段 同所

八段 芦牟田

一町 牟田

川上野沙弥  
意釣

村田越前守  
經定

三原遠江守  
重秋

平田美濃守  
昌宗

伊集院右衛門大夫  
忠金

喜入式部大輔  
季久

十日堀町 はし路

此内十日堀町

以上二町四反十口

此外一反堀町有、

畠地

以上壹町七段

永祿拾三年二月吉日

坪付

薩摩國加世田庄

一 反 宮原名 井尻佐介之先  
榕の下

一段 的場 久木崎善右衛門尉先  
畠地 水田之代

以上二反

永祿十三年二月吉日

(廿也)  
宗茂  
(三應)  
重秋

前田八郎左衛門尉殿

545 一庚午 元龜元年、此年正月、澁谷降參、川内郡義久知行、今度依忠節、高城・水引、河向義虎へ被宛行、

546 坪付

薩州牛屎院之内

浮免  
案原名 赤崎先  
四反 にした  
小木原名 門田門之内  
二反 宮の脇  
案原名 菱刈先  
一反 大む田

龍盛院領  
坪付

544 「加世田土前田茂右衛門藏」

548

大田名 三むた先  
二段 一町一反之内 三町牟田  
以上九段

此内七反御重恩

永祿十三年庚二月吉日

内田主馬首殿

(善入) 季久  
(川上) 意釣  
(村田) 經定  
(平田) 昌宗  
(三原) 重秋  
(伊集院) 忠金

547 加久藤湯田村之内知行名寄目錄

高々六斗四舛

元和六年霜月十五日

阿多甚左衛門殿

「義久公御譜中案文寫有之」

竊聞、貴國與陋邦雖隔鯨海千里、從往昔、有昆弟之約、故今廣濟住持雪岑東堂表符改之旧例、呈一緘於 中山

549

王殿下、以修隣好之交義、伏希、自今以後、永々可爲、連綿者也、仍獻微少之方物、聊致賀忱、件々具于別幅、頓首、恐惶不宣、

日本永祿十三年季春初二日

修理大夫義久

拜呈

中山王殿下

『清水郷北辰神社ニアリ』

北辰大明神領

坪付

隅州曾於郡之内

郡田名萩原門之内

一反

寺まへ

三反之内ニ有之候、

永祿十三年

三月吉日

季久

經(定)

昌宗

忠金

意釣

御寄進

北辰領

水田 一段 さハ千代殿先 そくたう

以上

永祿十〇年參月吉日

551 『秋目九玉大明神由緒ノ内』

一九玉大明神

奉再興、大日本國南瞻部州薩州加世田村秋目津九玉大

明神社頭一字、

右、奉爲金輪聖皇、天長地久、御願圓滿、殊者護持信

心大英檀薩隅日三州太守藤原朝臣貴久并日新同女大檀

主御息災延命

元龜二庚午ハ元龜元年ニアタル、戊午ハアタラス誤カ日新公ハ永祿十一  
二月御遊去ナリ、当ラス卯月吉日

當地頭嶋津藤原朝臣尚久遷宮、導師大阿闍利大僧都政

譽、當役人鎌田治部左衛門尉藤氏政眞、當假屋邊牟木

對馬助源國門、

大工久留石見頭景述

鍛冶有馬次郎兵衛尉

552 「貴久公御讃中」

「案書有之」

去歲春、天竜寺長老、以貴命持華緘、遙航南海來至西鄙、

審說厚意、感戴々々、抑近年拙解印休官、付囑薩隅日三

州之職於修理大夫義久、因茲、廣濟住持雪岑長老爲伸更

始之儀、詣于殿下、謹捧一書、獻微物、略表陋志、件數

錄于別楮、伏願、永々自他和好共全唇齒之邦者也、至祝

々々、恐惶不宣、

永祿十三白暮春初二日

島津貴久入道伯圍

琉球國王殿下

553 (本文書ハ五五二号文書ト同文ニツキ省略ス)

554 (本文書ハ五四八号文書ト同文ニツキ省略ス)

555 謹以呈一翰、仍廣濟和尚、就于當家改職之儀、謁于陛下、

每件奏達所仰、抑近年往來之商人不持印判致私渡、非沙

556

557



558 夫務舊禮之本、廣濟雪岑東堂應尊命、持芳翰遙凌滄海、

汰之限、尚以令違犯者、船財等可爲貴國進退、万端付和  
尚之口達、恐惶不備、

季春一日

【村田總前守】  
經定判

556 準先例、爲述傳家之旨趣、雪岑東堂令渡海、仍捧短札、

表祝儀、頃聞、處々商賈不帶眞印、自由往還無其隱、向  
後如此輩者令点檢之、被處重科者所希也、餘期後育、恐  
惶謹言、

三月一日

【伊集院】  
右衛門太夫忠金判

557 「案書有之 貴久公御詳中」

爲當國改政之礼儀、廣濟雪岑長老朝覲之次、謹以呈片楮、  
蓋傳聞、比年商舶不帶當家印判、擅犯舊制者惟多、仰望、  
後日若有違背輩者、加細察究刑治、堅可被停止狼藉奸黨、  
委曲詳長老舌端、恐惶頓首、

永祿十三年暮春初一日

川上入道【上野】意釣判

呈上 三司官館下

着岸于琉陽、昭伸祝詞、吉兆々々、仍多種方物、殊修隣  
好之交儀、倍聯綿事、此方以可爲同意者也、委曲東堂可  
有演說而已、餘者別紙載之、恐惶不備、

【當日本正元年】  
大明隆慶四年庚午季夏廿有七日  
【隆慶四年庚午、元龜元年ナリ】

中山王

進献 島津修理太夫殿 【義久】  
回章

559

【廣濟寺由緒書出之内】

一雪岑和尚、琉球國御使僧首尾能相動歸朝仕候節、爲忠  
賞高百石被成下候由、右高ハ雪岑隱居領被致、當所善  
福寺へ被引移、善福寺後住を、弟子永果と申僧ニ高共  
ニ付嘱仕、被致遷化候処、善福寺永果より、右之高を  
閑縁之甥ニ被遣候由ニテ、當時無御座候、尤代々雪岑  
ガ弟子譲りと爲被申置由ニ而、當分迄も弟子譲りニ而  
御座候、

560

【六】

一義久様琉球御征代之【伏】以後、中山王爲 御目見上國有之  
候節、義久様御意ニ而、當寺末寺當所之内、大田村報

恩寺ニ中山王到着ニ而、數日御滞在有之、其後雪岑同道ニ而御出府被成、御目見首尾能相濟、歸國被成候由、申傳書御座候、其節中山國主之上國始申之由、右報恩寺只今廢寺ニ而御座候得共、王居之地与申傳候而、御免地之寺住ニ而御座候、

561

「義久公御譜中」

「案文有之」

謹言上

御慶千秋万歳、幸甚々々、抑御入洛之御祝儀、最前可申上候處、依分國干戈、令致遅々、非本意奉存候、仍御太刀一腰・御馬一疋・黄金百兩進上仕候、被伺御機嫌、執御沙汰所仰候、猶喜入攝津介申合候、此旨以、宜預御披露候、恐惶敬白、

「朱力キ」

「元龜元年」六月廿八日

修理大夫義久

進上 細川兵部太輔殿

562

「正文在高岡士本田九郎右衛門親豊」

於弓箭數度之軍忠、誠無比類、感心々々、到子孫々、永守此旨、倍可抽戰功事、末代之可爲龜鏡者也、仍狀如件、

永祿十三年庚午

五月吉日

陸奥入道伯圍在判

本田 松閑

「上包」

本田 松閑

陸奥入道伯圍

563

「帖佐士安樂五郎左衛門藏」

新當流五具足之事

其上灌頂之次第

上置太刀十三

此上御不審有間敷候、

一鹿嶋明神

一香取大明神

一八幡大菩薩

一摩利支尊天唯子一人

諸國中於何方茂御望之方江者、可有指南之事專一也、

仍證文如件、

「元龜元年也」

永祿十三年庚午

八月六日

佐藤一卜

秀家(花押)

安樂下總介殿

参

564 「喜入季久譜中」

元龜元年庚午之季夏、爲大願成就、企上都矣、丁此之時、  
太守義久公欲使我達 將軍家、八月中旬、著船於泉州境  
浦、先以參宮伊勢、其外靈佛靈社參詣畢、而後上京都、  
爲 義久主使節候 營中、見 將軍家義昭卿、匪啻匍伏  
一見之、頂戴 將軍家之酒盃、且賜寶刀、治工 康光 非亦當  
家眉目乎哉、

565 「正文在當家」

雖未申通候、令馳筆候、上洛之由珍重候、逗留中必來臨  
待入候、將又從義久音信令祝着候由、相心得可被申候、  
猶進藤左衛門大夫可申候也、

〔朱力キ〕 八月十九日 〔前久〕 (花押)

喜入攝津介とのへ

(上書) 喜入攝津介とのへ

566 「喜入季久譜中」

「正文在當家」

猶々御上洛之由、御床敷存迄ニ候、從御家門も以御

書被仰候、猶相心得可申旨候、以之外急書中如何申  
入候哉、

珎札拜見、祝着之至候、仍御上洛之由、御大儀奉察候、  
如仰先年罷下候刻、種々御懇之至、一切不忘置候、御上  
洛幸之儀候間罷越、以面申承度心中ニ候へ共、宇籠故世  
上憚、又者不得寸暇候条、乍存無其儀候、併無沙汰之様  
ニ罷成無念候、於様躰者、具大泉坊へ申渡候間、不及是  
非候、次線香一把被懸御意候、御懇之至繁難申盡候、猶  
追而可申入候、恐々謹言、

〔朱力キ〕 八月十九日 長治(花押)

喜入攝津介殿 御報

進藤左衛門大夫

(上包) 喜入攝津介殿 長治

御報

567 「喜入季久譜中」

「正文在當家」

御下の事と令推量候、此あふき一包見參入候、向後  
者細々可申通候、かしこ、

先度者始而遂面談、本望之至、誠不知所謝候、俄御下のよし驚入候、明春者必可指下使節候之際、委曲厥刻可申述候、適々事に世上之物念早々御(御カ)かしこ、

〔上カキ〕

嶋津攝津守殿

(喜入季久)

(昭尚院通世)  
〔花押〕

〔此一書年月ナシ、上落後ナレハ元龜元年ノ冬比カ、前書ノ次ニ入置也〕

568 〔在福昌寺實久公御譜中〕

薩州谷山郡福本名之内水田參段之事、福昌禪寺鎮守開山へ、依志願奉寄附訖、目錄別紙在之、永々不可及違乱之狀如件、

元龜元年庚午九月吉日

(實久)  
陸奥入道伯固〔花押〕

福昌禪寺

閣下

569 〔義久公御譜中〕

元龜元年庚午六月下旬、喜入攝津守季久有參宮之企、而首途矣、以此次稱使節、教季久上達將軍家義昭卿、九月

廿三日、從攝州中嶋陣所令歸京、信長亦供奉也、丁此之時、越前之軍衆欲侵京都、由是廿四日、信長領太軍、以發向志賀、其翌廿五日、細川兵部太輔藤孝有今日可登城之命、而候、殿中、獻御太刀一腰・馬代千匹・黄金百兩、藤孝受之各備、公座、而後見使者、高悦不少云尔、右同時、進太刀・馬代五百匹・鹽硝三十斤於細川兵部太輔藤孝也、

570 〔全御譜中〕

〔正文在國分衆濱田覺兵衛〕

爲 御入洛御礼、被差登喜入攝津介、御太刀一腰・御馬一疋・黄金百兩御進上旨、令披露候、被聞食通、以 御内書被仰下候、仍御太刀一振則重御拜領候、猶得其意可申由被仰出候、可得御意候、恐惶謹言、

(朱カキ)  
〔元龜元年〕十月廿二日

(細川)  
兵部太輔藤孝〔花押〕

謹上 嶋津修理大夫殿

571 〔全御譜中〕

元龜元年十月廿五日、召季久於 殿中、被昇所賜義久之御内書及太刀(治工)、則重、云云、

「義久公御譜中」

(本文ハ五三六号記事ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ五三一号文書ト同文ニツキ省略ス)

「北郷時久日記元龜二年九月ニ至ル」

一永祿十一<sup>辰</sup>正月十三日<sup>亥</sup>、伊東鉄肥サ、カ尾ヲ陣ニ取ル、

一同二月廿一日<sup>辛</sup>、向社門、本城へ兵糧コメ不成候て、

慈亡フ、敗軍スル、時久公御太刀持河野筑前守、其日

御親類中二人・仁代四人打死、

一同五月十二日<sup>辛</sup>、鉄肥ノ「本ノマ」伊東陣ニ取構ル、

一永祿十一<sup>辰</sup>六月八日<sup>丙</sup>、鉄肥ヲ伊東へ渡候、

一同十日<sup>子</sup>、酒谷城伊東へ渡候、

一永祿十一<sup>辰</sup>七月十九日<sup>丁</sup>水曜、忠親泰心齋福嶋ヲ肝付へ

御渡シ候て、都城へ御越山候て、北郷殿ト肝付ノ和融

ヲ泰心様ノ御取成にて候、

同八月七日<sup>甲</sup>、國合借屋衆堂ノモトにてノ御取合、北

郷殿ヨリハ右衛門兵衛殿・土持美濃守殿出合候、肝付

ヨリハ肝付左兵衛殿・渡邊隠岐守殿出合レ候、泰心公

御取成ノ使トシテハ、餅原前越後守一路入道出合候、

一同八月廿日、肝付刑部殿和融ノ爲礼、都城へ越にて候、

西ノ城にてノ會尺、

一同廿四日、其爲礼、彈正左衛門殿くしらへ御越にて候、

一永祿十二<sup>巳</sup>三月十七日、ヒシカリ口へ相良殿大口ヨリ

手カタ出し候て、守護方ノ衆以上十六人打死、皆々人

足也、かまた名字ノ人一人也、

一同年五月六日、御屋形様ヨリ平泉ノ荷コメ候處ヲ、大

口ヨリサワリ候處ニ合戦候て、相良殿人衆打取カ、ル

クビ百七ツ、其内生取一人、大將五人切ステ、以上百

七十人、八代衆宮原殿大將也、打死、

一同八日、大口ト山野ノ行來ニ、平泉ヨリ肝付彈正殿伏

野伏カケ候て、ムネトノ人衆十七人、クマノ大將アカ

池殿打取、

一永祿十二五月十日、肝付へ御屋形様ト肝付間ノ和融ノ

タメニ、河野筑前守・大岩根河内守御越にて候へとも、

事不成候、

一同廿二日、ヒシカリノ御番衆北郷殿ヨリツモリ候てハ、

始テ御立にて候、小次郎殿御立にて候、

一永祿十二五月十三日ニ、肝付方ノカゴクシマへ庄内ヨ

リユキテ、人三人カドヒ候、其内一人肝付ヘニゲテ、則松山ヨリ十五日ニ御左右候、十七日ニヌス人七人打セラレテ候、

一永祿十二<sup>巳</sup>九月十四日、大口ノ城ヲ相良殿より 義久様御請取候、

一元龜二<sup>辛未</sup>九月三日 壬戌日曜、下河内タカコバヲ陳ニ伊東取ル、

一北郷時久弓箭ノ御談合トシテ、カゴ嶋ヘ御參上、御供ハ紀州和田越中守・津曲備後守・龜澤河内守・河野筑前守・大岩根兵部少輔、

「薩州家譜中」

薩摩守忠辰

忠隣「忠隣 永祿十二年三月十三日生、天正十五年四月十七日職死、十九オトアリ」

三郎次郎

爲島津左衛門督歳久猶子、

忠清

又助 備前守

母 太守義久公長女、

元龜二年辛未、於出水誕生矣、後依于兄忠辰之罪、

與母堂及弟忠富・忠豊俱、爲小西攝津守行長肥後守都領主之預、在肥後州者有年于茲、

越前守忠榮

入來院伯耆守忠富

小七郎忠豊

「義久公御譜中」

「案文在八木主水元信」

寔改年豊州・北郷殿・新納殿・典厩・金吾、皆御之字ハ一ツ、薩州計御二、

改年之御吉兆、千喜万悦、重疊雖申事舊候、猶更不可有休期、多幸々々、抑爲此等之御祝儀、五明貳本令進之候、

倍永日中諸慶可申加候、恐々謹言、

「朱カキ」元龜二年改正月十一日

修理大夫義久

謹上 薩摩守殿

「喜入季久譜中」

「正文在當家」

旧冬者適上洛之处、依念劇之時節、不及雅興遺恨此事候、重而期在京之儀計候、細々遂面謁本望難忘候、仍三部抄

進之候、愚筆寔憚入候、猶清譽上人可有演說候、狀如件、

〔朱力キ〕

元龜二年二月廿六日

〔昭高院道灌〕

〔花押〕

喜入攝津守殿

〔季久〕

〔上包〕  
喜入攝津守殿

〔花押〕

578

〔日新公御譜中 在卷尾〕

〔加世田日新寺鐘樓堂鐘銘ニ有之〕

薩陽龍護山大檀那

薩隅日三州太守藤氏嶋津

梅岳常潤在家菩薩矣命

勸進功德衆 文質慶才大姉

山伏盛春坊 岩切可樂齋

野村岡文公 神原暗雪齋

順阿弥公投深志

令鑄於大金鐘奇進于日新寺、欽聞說、梁武帝借誌公神力、

至地獄見獄中、衆生苦惱云、何以救之、誌公云、衆生罪

業不能滅、雖然、聞鐘聲則暫若滅、帝從此於天下寺院令

鑄鐘、伏以、答成就峯 〔本、〕 蒲牢一音万里 響安樂定花鯨十

方圓通、万歳々々、珎重珎重、

龍護山日新禪寺

住持

勅佛光惠通梅安柱叟

筑後國坂東寺金屋

平井雅樂助鎮直

堂前与鐘樓兩口之金鐘

勅佛光惠通禪師梅安嬭修之、

元龜二年三月吉日

579

〔本文書ハ五五二号文書ト同文ニツキ省略ス〕

580 奉始梵天帝釋四大天王、日本國中六十余州大小神祇、惣

社新田八幡、別而當所鎮守諏方 稻荷大明神、可任各御

照覽者也、

元龜二年四月七日

義久(花押)

樺山兵部太輔殿

581 義久公三女

太守家久公籬中

元龜二年辛未四月廿六日誕生、母種子島左近大夫時堯

女也、

寛永七年十月五日、逝去於國府、年六十、持明彭窓庵主興國寺殿、

582 「喜入季久譜中」

「正文在當家」

御下向已後不申處、預御狀候、路次無事御歸國由、珍重候、御在京中細々遂向顔、祝着至候、隨而銀子十文旨給候、令喜悅候、又六かたへ御言傳具申聞候、本望由申候、次爰元之躰、先靜謐分候、可御心安候、又以一書承分注進之候、將又雖比興候、ゆかけ二具參候、又二郎殿御言傳申度候、尚以向後御用儀候者、可承候、恐々謹言、

〔朱力半〕  
〔元龜二年〕卯月廿九日 宗賢(花押)

喜入攝津守殿  
御返報

〔上包〕  
小笠原備前入道

喜入攝津守殿  
御返報

宗賢

583 「義弘公御譜中」

「正文在山田衆向并彌左衛門」

「是ヨリ前切レ」

無御座候、ニて態火ヲ出候へと、則他國ニて候、西ハ庄祈家ヲきり、東ハをきりてやけ申候、

ニて火留申候、

一山内御田地之事、由候、御上候て曲事と候ハ、

其時之事にて候由、御申候つると、御女中御物語候、

觀喜寺ニ御情人申候、何と成行可申候哉、御文御下候

ハ、我等者西原与介ヲ御服持せ下申候、早々豊後邊ニ

可有之候、それ者猶申下候、何も御登も召可申候、

一去年極月廿九日ニ參着申候、色々いき物共ニ一人之宰(辛)

勞氣遣可有御推量候、何事なく皆々届申候、御鷹ハ京

方弓矢悪様ニ申候間、土佐 一条殿ニ預置申候へハ、

則三左京兆ニ被仰而、篠原殿以馳走、正月五日ニ人を

被下差、三月十七日京着申候、又其元 一条殿より御

鷹、日向巢被相副進上候、則從貴國之御鷹ハ信長拜領

申候、やかて諏方甚兵衛殿爲御使濃州ニ被下差候、

一今度永々在國申仕合、路錢以下迷惑申候へハ、又堺に

て不慮ニけんくわ出來申、 屋形様より被下候皮百枚

被取申候、彼是我等一人之迷惑ニて候、御國より路錢



不渡申候由申上候へハ、うそを申候と被仰旨申分候、今度急罷下候へと御意候間、色々申上候故、一段忝上意にて、於御前御服ヲ拜領仕、やましなにて當秋又御ふちあるへきにて候、過分候、今度も御ふちにて、又下申候而可御心安候、ちきニ御言はを此度之事ハ是非頼罷下候へと 上意忝存候て、日向ニ下申候、

一 今度到豊後、久我殿様御下向候、紫野和堂様、藥師牧庵、狩野源四郎、民部子にて候、後藤源四郎、三郎四郎子にて候、めいじんそろへ下申候、土佐まで御供申候、

一 喜入殿御上洛、御在京内御用ニ立申候へて口惜候、我等居不申候へ共、公儀歳阿弥別而馳走申候由候、さて御物語候哉、今度あき毛利殿より銀千枚進上候、それも喜入殿程之御懇ハ無御座由沙汰候、我等罷上候も、度々 公方様喜入殿御事を御尋にて候、もうはや御下付可有なと、被仰由候、喜入殿御さはきも近比外聞能させられ候由、京都取沙汰候、可御心安候、

一 以橘隠、唐織御服之儀被仰候而、色々申調被差下候間、橘隠と申約束申候ハ、公方様へ黄金參枚、其外方々へ四枚程御上せ候ハ、私儀ハ相濟可申候、貴豊後

584

〔喜入季久譜中〕

へ御服被差下候、從豊州之御礼者、御代様へ黄金十枚、春日御局へ貳枚、ほり川殿御代さまの御局にて候貳枚、歳阿弥ニ貳枚被上差候、日本神うそなと申にて無之候、其分申候へハ、吉(備懸)るん御物語候へハ、御老中必御同心にて候由候て、右ニ申分程にて調可申候由申候、乍去本田若狹守殿を以可承にて候間、尤にて候由申、本若と申合候、雖然去年御調難成候て、我等式迄路錢以下不有迷惑及候、調候ても如何可有之かと存候へ共、太守様於惠燈院ちきに被仰候条、其分歳阿弥之申談事如此申調候、御礼物御延引候てハ迷惑まで候、自然之刻奉頼候、貴齋御挑候もの共、西原与介ニ下申候、定而相届可申候、在國中御懇志御ひいき思出多山、生々世々忝存儀難申盡候、御懇も無御座衆、其外おかしく候、存書、是も天下一道具にて候と申事候、書中恐多候、恐々謹言、

〔朱力半〕  
〔元龜二年〕五月廿一日

宗固(花押)

(中江周珠)  
意温齋  
まいる御宿所

「正文在當家」

御下國已後、兩度以便宜令啓候、一通茂相達候哉、京都儀唯今靜謐候、御在洛之刻、就念劇疎遠躰、於于今無念至候、向後於此方相當子細、無御隔心可承候、不可有疎意候、將又十一日韻懷紙進之候、聊表空書計候、恐々謹言、

「朱力中」  
「元龜二年六月十一日」

喜入攝津介殿

硯左

藤孝(花押)

「上包」  
細川兵部太輔

喜入攝津介殿

硯左

藤孝

586 「豊州家忠親譜中」

元龜二年辛未六月十二日、卒于都城矣、治號齡崗永壽居士、

586 「國史」卷十八 大中公 貫明公

二年辛未夏六月二十三日、大中公薨、年五十八、  
圖、廟堂裏寬、大中公石塔在福昌寺、位牌在南林寺、但大中公舊譜、載左衛門督歲久祭文云、維元龜二年歲次辛未、六月朔壬辰二十三日甲寅、

前太守大中良等庵主墓於本宅、越二十九日庚申、關維於日新精舍、右馬頭征久祭文云、維元龜二年歲次辛未、六月朔壬辰二十三日甲寅、大中良等庵主墓於加世田城慶室、征久不勝哀慟、今月五日乙丑、親詣日新精舍、隨備清酌庶羞之奠、寺僧相傳、以為日新寺境內釋迦堂、即梅岳君・大中公茶毘之所、又有石塔、題曰大中公、平田治部少輔純貞入道純喜由是觀之、大中公葬蓋在日新寺矣、

遍歷六十六州、以資 大中公之冥福、明年三月歸國、自

投鹿兒島海中而死、葬松原山、法名廉州淨貞禪伯、

據大  
舊譜、平田清右衛門系圖、純貞之先墓刈兩院人也、姓藤原稱平良氏、後

改稱平田、與平姓平田氏別、今世有號六十六部者、負佛厨執錫杖、足跡

遍歷六十六州、每州瞻禮知名寺社、平田純貞遍歷六十餘州、豈亦類於是乎、純貞墓在南林寺東南一町許、土女拜謁、香火頗盛、冬十

一月二十日、肝付氏・禰寢氏・伊地知氏合軍、乘閩艦百餘艘、侵鹿兒島轉攻帖佐、瀧水、平田新三郎等禦之、敵

軍引去、據貫明公舊譜、瀧水・帖佐地名、平田監物系圖、美濃守昌宗之孫歲宗初稱新三郎、昌宗為帖佐地頭、

587 「貫久公御譜中」

伯囿亦慕於亡父日新菩薩之行跡、懼於我之身體有一失、且復以色心悟佛心、二六時中手妙法華經、訓讀敢不忘、茲時元龜二年辛未六月廿三日、登于二階之持佛堂、坐佛前捧花香、敬讀誦乎法華第一卷了、又持平第二卷、已為燒香、其香烟未終盡、忽然逝去於其壇上畢、享年五十八、法號大中良等庵主、南林寺殿、

588 貫久公下垣

代賢和尚

一等家風事有因 忽然目擊道存辰  
索訶投宿五雲客 歸去來兮紅錦晨  
恭惟 大中良等庵主

不顯惟德

天下稱仁

新恩溫良恭儉澤 容黎庶無寬無狹  
胸量慈悲喜捨海 惠貧寒無慳無愆

韜略治世於居士 恩寵慈愛

文道利邦於君父 忠義孝純

聲名遠馳則 視齋桓晉文未肯多遜

法令外護則 雖衛主裴相莫之爲倫

扶起箕弓之家業 建立大厦之柱礎

探得禪河之淵底 把斷洞水之要津

廓頂門正眼 千載一週

帶肘後靈符 百世一人

剃髮染衣堅持戒律 黃大史如齋輔池寺

建寺度僧廣修檀度 梁天子似在禁紫震

常時食無美味 平日衣薄褥茵

僉曰在家梵侶 咸稱菩薩肉身

不屈看經坦然坐 撥轉如來之正法輪

勦絕百非四勺 併却咽喉吻唇

有無二俱盡 動靜并相混

此是 大中良等庵主 存前沒後之一相三昧 卽今

臨菩提園裏 轉身之法要如何指揮去

丙丁童子通消息 劫外靈枝壽密新

589

「貴久公御譜中」

「此本在清水阿寺」

維元龜二年次辛未六月朔壬辰二十有三日甲寅、前奧州太  
守大中良等庵主於本宅俄示而登仙矣、越二十有九日庚申、

就于 日新精舍隨梵儀以闡維レ、其三男藤原年久謹備湯茗

蔬果之奠、昭告尊靈以文、其詞曰、

嗚呼悲哉 三州中興藤氏大賢源家一流盡美盡善

撫育情旨 日益愛憐 文學孔孟 武師張權 投龍雲室

心印單傳 唐韓退之 似見大顛 月夕風晨 誦經坐禪

日餘歌詠 古今全篇 兵書妙理 聲播坤乾

嗚呼悲哉 仲夏微疾 越旬平安 膝下侍臣 悅有目前

予亦促歸 季夏下弦 忽乘鳧舄 無端登仙 計音落耳

淚雨潛然 慟哭有餘 是何因緣 憶昔公也 手提利劍

出軍旅則 敵退三邊 邦內降人 捧以山川 齊家治國

如周王宣

嗚呼悲哉 富貴易盡 存命難延 黃梁一夢 五十八年

茫茫九原 蒼々九天 桐葉欲落 又聞秋蟬 秋思無間

挽詞綿聯 一盞芳茗 一片紫栴 尊靈有知 烟裏尊旂

嗚呼悲哉尚享

590 「貴久公御譜中」

「此本在清水岡寺」

維元龜貳年歲舍重光協洽林鐘廿有三甲寅、先君三州太守

前陸奧守大中良等庵主、俄然唱無聲三昧於加世田城寢室、

越末系藤氏征久不耐哀慟、今月朔五日乙丑、就于日新精

舍、謹備清酌魚羞之奠、昭告尊靈、厥詞曰、

於戲悲哉 萬軍機軸 源家大賢 雖居陰室 深守世全

地膏腴故 一藤鎮連 大枝大葉 和根長堅 論武威則

轟雷掣電 論誠心則 撫民敬天 歌詠文學 功業不淺

朝誦經典 修因明緣 夕誦教外 學道參禪 嗚呼哀哉

我幼喪父 十有餘年 匪先君惠 誰蒙哀憐 雖京洛遠

常重勸宣 日傾三接 今奠楹邊 胸次如鑑 九流灑圓

雲飛運月 岸移轉船 化城早過 寶處既遍 蛩聲唧々

野桐花鮮 長空風罷 玉露璨然 薄奠非他 別酌清泉

所薦丹悃 靈昭受焉 吁悲哉尚饗

不可有他見慚媿「本ノマ、」

近澤作大安良等之祭文「右上有之」

591 「川上氏支流系圖」

忠貞

鹽太郎 小次郎 治部少輔 筑前守

奉事相模守忠良入道主、主卒去之後、奉仕 太守貴

久公、元龜二年六月二十三日、公御病大漸、竟逝于

忠貞之膝上、法名重山受珍、

592 「正文在清水郷岡寺」

十五代太守陸奧守貴久公御逝去之時、肝付左馬頭良兼奉

獻靈前祭文、但良兼者公之甥也

維元龜二年歲舍辛未林鐘二十又三日甲寅、

前薩隅日三州太守南林寺殿大中良等庵主捐館矣、同下

旬之比、雖其訃音到、多年以非虞之事、兩地似并汾絕

信、故無侍柳營之青油幕下焉、雖然、辱葭李之好者人

焉慶哉、哀悼慟哭之餘、悶絕躡地忘然不顧不朝之罪、

伴氏良兼越七月廿有四日、命十餘員之苾蒞來、備殯繁

伊蒲塞之淨膳、以謹奉祭尊靈前香案之下、其文曰、

嗚呼哀哉

扛三國鼎 起中興兵 唐依肅宗德 漢因光武明 推任  
 人心 曲木用曲處 直木用直處 得愛衆勝 文士播文  
 名 武士播武名 初當府君興之日 與我先人誓而盟  
 譬如圍獵人 君角之我叉掎 況多遊說客 彼從兮此也  
 橫 百戰百勝數雄漸盡 萬代萬年太業已成 聲聞如羊  
 緣覺如鹿 菩薩如牛 隨分之宜耳 照烈得龍 討虜得  
 虎 丞相得狗 所古難兼并 何其爲主如件大 物各得  
 所皆向榮 恭惟 周陳之舅而陳周之出 衛魯之弟耶魯  
 衛之兄 某等雖有貴賤之差 辱君之臭味 訃音到于闕  
 諍之際 哀情傷殘生

嗚呼哀哉

五十餘年夢 一彈指頃驚 群臣仰天泣血 庶民哭巷吞  
 聲 山如改容 時是悲秋樹凋葉落 天似易色 月將殘  
 夜風驚雨鳴 悔東坡面前不趨過 奈西州門下慟哭情  
 以妙心不傳妙心 見超大龜氏 在尊貴不墮尊貴 機語  
 老狐精 見生死如遊戲 豈着在涅槃城 還來應此供  
 薄奠鑒我誠

嗚呼哀哉 尚亨

〔此祭文、貴久公御譜中ニ在リ、糺合ス〕

593

元龜二年秋、伊地知重興・伊東・肝付・禰寝相語らひ、  
 鹿兒島内海ニ押寄候時、瀧ヶ水ニテ戦功、同年十一月廿  
日ノ事とあり、  
 平田美濃守トアレハ、歳宗ノ弟也、是カ「新三郎トアリ」 勝部與左衛門鉄砲の上手  
「歳宗トランカ」  
 平田藤九郎「勝宗」歳宗ノ弟 南雲壹岐守  
 指宿四郎二郎

南雲新次郎「新四郎トモ」 美濃守郎等

八九人

594

『箕輪伊賀覚書』

一元龜二年の夏の末ニも成けるに、伯圍入道殿有爲無  
 常の浮世なれハ、例ならぬ心地出來らせ給ひて、六月廿  
 三日曉天に、壽五拾八ニして隠させ玉ひける、男子四  
 人、太守義久を初め、忠平・歳久・家久其外一門の人  
 く嘆き給ふ事とも申も愚也、士以下卑き民賤の女ニ至  
 ルマテモ、父母の喪ニ合つる如くそ思ひける、鹿兒島  
 の南良巽ハ海つらニテ、潔き眞砂地ニ三町余リニ松を  
 植、寺を造立して、法名兩洞大中庵主と号し、今の松  
 原山南林寺是也、かの貴久と申は、十二三の時、前太

「御文庫三番箱中」

元龜貳年八月十六日

名号之連歌

名や残□入ての跡も秋の月

義久

むしはねを啼今朝の浅茅

其阿

暮より夜さむのあらし明立て

珠玄

わたらぬ水も袖にかゝれり

昌宗

村竹の下行河邊よる浪ニ

珠長

瀬にゐる鳥のうちそふる聲

忠金

をしなへて山雲さはき時雨きぬ

久秀

むなしき空のなかめをやせん

意外

守忠兼の御養子と成らせ玉ひし比より、その志氣非常

人、老功の人申けるは、此人こそ三州の太守ニも可成

人也、讒臣ニ謀られ不快し玉ふ、誠ニ不義の至也、か

の人世ニある程ならば、隣野ニ虎を飼ふニ似たり、左

こそ相州家の人ニ頼しくや思らんと申せしが、幾程な

く三州の太守ニ成玉ひたり、梅檀ハ二葉より香し、所

當其器老人の見目愚かならさりしは、実ニ恥かしかり

ける事也云々、

音に啼て霞ニやとる夕雲雀

駒かひいつる野こそひろけれ

何所にも風吹たゆむ折なれや

舟に燒火のをちこちの影

松原や見たすかたの浦さひて

をく霜はらふはしの一すち

鶺鴒はこなたかなたに□ひかはし

入日のみねや雲ふかむらん

出かての月をまつこそわひしけれ

露けき夜半もねてわすれはや

音きけは思ひなをそふ秋の風

なれはつるともうきはうら浪

あやしき住家になせる海士小舟

世をわたるならひやすからんとや

はるくくと雪まの野への道分て

水の氷やとけてなかるゝ

さはききてかものむら鳥あそふ江に

あるもさためのなきやうき草

誘引なはいなん我こそ悲しけれ

見へつる夢そこゝろまとはす

忠金

久秀

周琳

等林

釣江

重持

重秀

親治

城勢

親豊

經宣

其阿

珠長

昌宗

意外

親豊

珠長

等林

其阿

久秀

明るをも待たぬ衣く月もしれ

枕うこかすあき風そうき

佐小鹿の野路の草ふしいかならん

山はつま木をこらぬまもなし

誰も日を徒にとはおもふなよ

老はてゝたにまなふことの葉

くりかへし昔をいまにわすれめや

わかゆくすゑをいのる玉の緒

憑むをは神もうけよと御抜して

いつまで須摩のうらみならまし

汲たへてもしほ火消る五月雨に

友もまとをのころも侘しき

こもりぬる日敷そかたみすみの袖

あかつきことにむすひなれつゝ

岩根ふミ夢を枕に片敷て

雲まにみねの月寒き空

山深ミ河をとそひて暮わたり

なれてすむともさそ宇治の里

よそよりもあらましかへと涙おち

道とをけれとたへぬ音つれ

重持

昌宗

釣江

義久

重秀

珠玄

周琳

親治

城勢

意外

珠長

重持

等林

周琳

親豊

久秀

昌宗

其阿

珠玄

釣江

花の香を風のまにく送きて

たとれハ春に心まとひぬ

しつかなる山のおくをや尋まし

ミやこに小野の里のはるけさ

かゝりきてやかて跡なきむら雨に

夕日さやけし月もさこそは

秋のたつそなたとむかふ西の空

風すさましくうきハあつま路

何により旅の心のなくさまむ

ありはてしこの世をもさらはや

見きく事いづれも夢の外ならて

浅はかなるそちきりくやしき

一筆も中たちゆへやもれぬらん

しとねはをよふかたならぬ人

こゝろにも花をさかする宮の内

はかなくならのいにしへの春

程とをく都をよそにうかれ出て

さそふも旅にいかにかせし

つらからぬかたこそなけれ草枕

月のあはれもところによる

義久

忠金

珠玄

意外

義久

忠金

重持

釣江

親治

珠玄

等林

周琳

久秀

珠長

珠玄

其阿

親治

周琳

等林

重秀

□かほり薄霧なひく雲の上  
紅葉をならす庭の行かひ

親豊 釣江

琴の緒をいとも長閑にかきならし  
浪もなきたるあをうみのほら  
つり舟のよるへをわすれくるゝ日に  
雲こそかへれかねひく山

意外 城勢

御法にハ山さへうこくはかりにて  
こゝろのなきも心ありなん

重持 城勢

古郷をそなたとはかりおもひやり  
身のをきところしらぬはてく

久秀 親治

大かたにたつをみましや夕煙  
雨そほふりて野風はけしも

其阿 義久

別れての跡したひつゝ伏佗て  
むかへは月に面影そたつ

昌宗 其阿

問事もこたへす過る道のへに  
ことつてわひぬしらぬさと人

昌宗 珠長

あたにしも消にし露の玉かつら  
秋のあはれや野分たつ暮

忠金 珠玄

関山を遠くも花に越て来て  
春のこゝろやうかれかちなる

意外 珠玄

見し花ハきのふけふかの名残にて  
庭行水の春ふかき聲

義久 等林

此たひももれて悲しきあるためし  
染るも袖のみとり哀れさ

親治 重持

義久七句 等林六 其阿八 重秀三 珠玄十

薄とも夏野ゝ露に打なひき  
すゝしき夜半の月やしら雪

久秀 珠長

親豊五 昌宗六 釣江六 珠長八 重持六

富士の根やいかて時をもしらざらん  
里はいつくもけふる朝夕

珠玄 其阿

忠金五 城勢四 久秀七 經宣一 意外六

ゆたかなる世はよそめにもみえつへし  
めく□のほかにのこるやハある

義久 釣江

596 「義久公御譜中」

やき捨し草葉も春にもへ出て  
消しかすみもたては立なり

周琳 珠玄

「正文在國分衆安樂了心」  
元龜貳年八月廿五日



賦何船連歌

みしやあらぬ見すや今年の秋の月

風は夜さむのかりふしの山

古郷の夢のゆくえに鹿啼て

うかれやいてむ朝あけの空

跡もいま降そふ雪におしまめや

みきりをひろミおほふ松かえ

岩間よりなかれて水の浅ミとり

すミミところや人つとふらむ

行ちかふちまたの車くれ深ミ

やとすもいまたはつ草の露

色みえてこゝろの花もまちとをに

かすめやりしをおもひしらなん

それとなくまきらへしたる筆の跡

あやしきまでにゆかしさを添

むかしたか住あらしけん里ならし

な<sup>▽</sup>にハかくれぬ浦をめてはや

むら雨のふれは田蓑の嶋にきて

雲よりをちの浪のつり舟

ともし火はそれかはかりに風を荒ミ

義久

珠文

其阿

兼盛

珠長

意外

昌宗

久秀

重持

釣江

久治

等林

重秀

親豊

純辰

義久

珠文

其阿

兼盛

あかしかねつゝひとりねへうき

鳥そなくたかきぬく月のならん

旅たつ秋のせきちはかなや

まはらなる板間の露にぬれくて

かきならしてはしのふふる琴

さひしさをよほす嶺の松かせに

夕になりて鐘ひく空

たのめぬも心のくせに立またれ

おもふかものを我もおほえす

人めをもつゝまでもろきうき涙

いはのはさまにゆきて住はや

浪風にきくも分れぬさ夜徧

あかしといはし月そしくるゝ

衣うつ岡へのさとの秋更て

物すさましや松のこゑく

たゝひと重立残たる朝霧に

見わたすかたの露かすかなり

打なひく竹の下みち分くて

川そひをふねさしとむる暮

たはやめに誰もこゝろや移るらん

珠長

意外

重持

久秀

久治

釣江

重秀

等林

殊文

親豊

意外

義久

久秀

其阿

兼盛

珠長

釣江

重持

親豊

殊文

こすもさなからそよきぬの香

余浪ある夢のたゞちの衾にて

とおくはなざしたらちねの跡

思ひとりいるへき山もいりかてに

はかなやなにかほたしなるらん

まなふるもこゝろをそきにむすはふれ

たゞいたつらに日かすをそふる

五月雨の比までなかぬ郭公

つれなき人もおりにこそよれ

下紐や花にならひてとけぬらん

かすみのころもきる月の暮

越きても年またさむきやま／＼に

歸るつはさかをちの鷹かね

身やハいつゆきてミヤこに住馴ん

われをはなるゝこゝろつらしや

未とけぬ事も戀ちのならひにて

うらミても又たのミある中

こかねをも捨るちきりや深からん

おもひかハしておもへはらから

山里のうきつれ／＼ハ問もなし

其阿

久治

等林

義久

殊玄

久秀

意外

重秀

釣江

殊長

重持

其阿

義久

殊玄

等林

親豊

重持

意外

殊玄

其阿

木の葉は庭の塵とつもれり

をしの居る玉藻の床に池ふりて

くるゝみきハにしつむ日の影

誰もまつ月になる夜やいそく覽

雨のをときくまくら露けし

秋はなを篠ふくかけのかなしきに

なれにし友もうときこの比

大方の人をハいかて恨ミまし

いひはなたるゝかへりみをせよ

のほるへきくらゐももるゝ度／＼に

あまたの魚のうかふ瀧津せ

ものゝ音に山の鳥をもおとろかせ

花よりけにもにほふ袖くち

青柳に織まかへたるから衣

かすみなひかせわたる朝かせ

しら雪の上にも春や立けらし

老のこゝろものとかにそなる

草の戸にうき世わするゝ月の影

むしなきくらす花の萩かえ

ゆく／＼も霧にかくるゝ野は遠し

久秀

釣江

殊長

殊玄

其阿

久秀

意外

兼盛

殊玄

等林

重持

其阿

殊玄

殊長

親豊

義久

意外

重秀

其阿

兼盛

おくかおくまでうきは東路  
 西をのミおもふ心にあこかれて  
 あつさにたへすまつは秋風  
 おりくをならす扇のうつし繪に  
 なくさめかねつわかれたる跡  
 まことなきその面影ははかなしや  
 夢にや見ゆるいにしへの友  
 夜を深ミ人の音する浅茅生に  
 かなしむ秋や月もしるらん  
 野は霜に鳴もうつらも伏かねて  
 露のひまなく行かよふミち  
 すてん世の山にさき立わかこゝろ  
 あるやあらぬもなにゝさためん  
 まきくにしるしをきたる物語  
 いつゝ六ともえこそわかかれね  
 黒髪はかたをもいまた過やらて  
 おもふを見そめたのむ行すゑ  
 こゝろやハ奥までしるき人ならん  
 おしむ花をもしひて問はや  
 おらせしと壻こめをける藤つゝし

意外 義久  
 殊文 親豊  
 其阿 等林  
 重持 久秀  
 久長 其阿  
 久治 等林  
 殊文 意外  
 重秀 義久  
 親豊 釣江  
 其阿 其阿  
 殊文 殊文

598

「喜入季久譜中」  
 「正文在當家」

「上包」  
 木入攝津守とのへ (花押)

「朱力字」  
 「元龜二年秋」九月三日  
 (喜)季久  
 木入攝津守とのへ (花押)

(昭高院遺墨)

597

「喜入季久譜中」  
 「正文在當家」

くハ、るにしもなをあかぬ春 殊長  
 義久八句 釣江六 殊文十三 久治四  
 其阿十二 等林七 兼盛五 重秀五 殊長八  
 親豊七 意外九 純辰一 昌宗一 久秀七  
 重持七△

先度者上洛之刻、懇切之次第不知所謝候、其日後以屋簡  
 成共可被申候処、不得好便、彼は無沙汰非本意候、抑當  
 門跡末寺大弘寺之儀、此刻被預置候様、別而取成所希候、  
 向後者切々可申通候、仍此一裏進之候、猶不断光院可有  
 演説候也、かしこ、

尚々老父かたより御報雖可申候、濃州ニ在之候間、  
從拙者如此候、

玕札令披見候、先年御下向以後無幸便付、不申承候、京都物念故、方々令在國之間、罷成無音候、次うつほの儀被仰上候、虎豹皮平仁斟酌候之間、以猪皮申付候、將又爲御音信銀子三兩請取申候、仍雖左道候、ゆかけ二具進之候、猶御使可被申候間、不能詳候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
〔元龜二年秋〕九月十日

秀清〔花押〕

喜入攝津介殿

御返報

〔上包〕

小笠原民部少輔

喜入攝津介殿

御返報

秀清

599

〔川上武藏守經久譜中〕

〔正文當家有之〕

弓馬一流之儀、以神載相傳之早、子孫之事業者不及申、

有志方者、依時儀可傳之、其外若此事有他見者、

梵天帝釈四大天王堅牢地神、惣而者日本國中之大小神祇、殊者當所鎮守白鷺六所權現 霧嶋六所權現 諏訪上下大

明神、各々神罰冥罰可蒙者也、  
仍起請文如件、

元龜二年九月吉日

河上十郎左衛門尉殿

參

嶋津兵庫頭藤原忠平〔花押〕

600 元龜二年辛未

九月二十七日、島津五郎四郎忠俊

下大隅の海灣にて  
戰死、年二十一歳

十一月二十日、萩原又左衛門

神瀬の燃崎にて戰死  
武石見守 海岸にて

死、和氣與左衛門

元龜中片浦に戰死とあり、年月  
なし、種子島氏臣なり、埃考、

601 〔北郷時久譜中〕

元龜二年辛未十月九日、時久爲談軍事、參於鹿兒島、北

郷紀伊守忠徳・和田越中入道起雲・津曲備後守兼廣・龜

澤河内守・河野筑前守・大岩根兵部少輔供奉、

602 〔義久公御譜中〕

大隅州中有三土之叛太守不出頭、曰、肝付河内守兼續・

禰寝七郎重長・伊地知周防介重興、匪啻不來調、先是永

祿四年之夏、押領同僚之地廻之城、丁此之時、叔父右馬

頭忠將戰死其地之後、乘勝彌增奢侈、且復三士與伊東氏俱運謀略、元龜二年辛未十一月廿日、催兵船一百餘艘來、而欲犯鹿兒島濱浦、然而不成、以棹過之路、欲破卻瀧水之孤村、時平田新三郎及帖佐之勇銳士卒五十許輩、防禦堅固、故不得破退散者也、

## 『長谷場越前日記』

下大隅の郡司伊地知重興者肝付省釣ニ與同シテ、鹿兒島之内海に日州・肝付・根占・下大隅の兵船三百余艘乗浮元龜二年十一月廿日ノ事ト地理志帖佐ノ部ニ見ユへ、櫻島之内ニ有る野尻の村を破却せんと寄せ來る、懸る處ニ中務太輔家久様を始、奉行究竟の兵もの五百騎計り、横山ノ赤水・野尻ニ走籠り、今や遅しと待居たる處ニ、敵船も功者共が見切りつゝ、さくら嶋を漕のきて鹿兒島表に寄來る、爾も内手衆續合ひ、濱の手を持堅め、敵船の着くならハ、各海ニ懸ケ入りて、舟數を切り留て高名せんと色めくを、沖の船も見切つゝ漕退んとせし程に、鹿兒島町之地頭ニて有りけるが、伊集院善左衛門尉と名乗て、兵船を漕出して船之部板へうばんに立上り、唯今爰に進ミ出たる兵ものを、如何なる者とか思らん、右によべるゝ如く也、悪しきたなし、返せもどせと云捨て、鉄炮

を取合せ、時移るまで討程ニ、無慙やな善左衛門尉かきたりける甲の眞向打破り、額が後ニぬくれハ、とうの矢を射返さんとせしか共、痛手ニて船底にかつはと落て空く成る、敵船がハ是を見て、あゝ射たりやくとて、船端をたゝひて勇める事ハ無限り、味方之船も數拾艘こき掛て矢師をさせらるゝ、日は申のさかり成り、舟師も難叶やおもひけん、船を沖に漕退て大崎かけて乘て行く、此刻ニ帖佐衆早く續合て、其中ニ老武者が見切つ、我船を瀧か水ニ漕着て、村を構て待懸る處ニ、敵船者我先ニと押寄せて、此小村を破ん事ハ安るべしと思ひかけ、船も飛て下り、破却せんとせしか共、隅州帖佐之城主平田新三郎と名乗て、城戸の口を被持せ、同名ニ藤九郎、押並て南雲壹岐守・同新四郎・勝目與次郎彼是都合五拾騎ニ者過ぎりけり、矢彘作て散々にそ射たりける、指宿四郎次郎同心シテ、表ニ進む兵ものを七八騎迄射伏せたり、是を打んと云儘に打物取て切て出、我もくゝとさき懸す、敵ハ大軍ニ思ひ取り、手負共を引退て、漸く船ニ取乘て、沖の船ニ相もやい、瀬戸を掛てぞ開きける、櫻島の内ニ有る藤野村より家久様者御覽して、不審ニおもひてハ、若シ瀬戸村を破るべし、若武者ハ懸け續き籠り

相ひ、高名いたせと御下知也、御意を各承り、畏て候と、

弓手上帯ちやうどしめ、且ハ弓征矢取り付て、且は打物

脇き夾ミ、瀬戸村に走籠り、待構たる事共を、敵船は用

捨して恐を成てこきのけば、向山の礮きわ我が船さき

にと懸け通る、陸も大鉄炮を被打せ、雷雨の如くにて、

海山も振動す、御太將の御威光ニ恐れ奉り、言葉を出す

敵はなし、下大隅の湊とて、かるさを指て漕て行く、伊

地知重與案内者一段憚り至極也、御爵に當ん事を見よ、

必報は有へきと諸人は取さた申けり、其故は御當家ニ對

し奉りて、伊地知事ハ上古より普代の御披官たりしが、

國方を與同して、友々の兵船を指向けて依緩怠子細ニ、

瀬戸村之向山早崎と云へる處あり、是ニ諸勢を打上られ

云々、

604 辛未 元龜二年十一月廿日、伊東兵船ヲ下、肝付・伊地

知・祢寢取合、百余艘慶島ノ奥へ漕泛、無何夏歸ニ、隅

州ニダキガ水ニ倚、平田新三郎ヲ始メ、帖佐衆五十計籠

戰、敵切負退、

「正文在當家」

此比豊州仁令在國間、得好便一筆申候、去年者從匠作預

御音信候、御懇之儀共候、貴所御在京之砌、到攝州中嶋

御動座之前後、以外取乱、無沙汰已失面目候キ、幸御隣

國江罷下事候条、自様躰与風罷越、御礼可申述候かなと

有増候、乍去當國ニ抑留候間、雖未定候、万一於罷越

者、萬々可得御指南候、小者一人之躰餘々憚多事候、態

以使者可申處、旅中無人之儀候間如此候、自然次御取成

所希候、不宣、

〔朱カキ〕  
元龜二年 霜月十四日

宗入(花押)

喜入攝津介殿

〔上包〕  
喜入攝津介殿

宗入

606 「義弘公御譜中」

「正文在上原長次郎」

書面之趣細々披見候、仍一ヶ條之儀依無心元、飛脚進之

候之處、替儀無之旨喜悅候、巨細所存之通川上三川守へ

申合候条、以時分可被遂面談之旨、肝要候、恐々謹言、

霜月廿三日

忠平(花押)

上原長門守殿(尚近)  
進之候

兵庫頭

「上包」  
上原長門守殿

進之候

忠平